
F a t e / S t r a t o s

永遠の仮面戦士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / S t r a t o s

【Nコード】

N 9 2 7 6 X

【作者名】

永遠の仮面戦士

【あらすじ】

聖杯戦争

それは聖杯を巡る魔術師達の血塗られた戦い

セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー

七人のサーヴァントとそれを使役するマスター達は最後の一组になるまで戦い続けなければならない

これは第五次聖杯戦争が終えてからのその先の血塗られた物語

それと現在放送中のZEROのネタバレもあります。注意してください
さい

プロローグ・開幕

聖杯戦争

それは聖杯を巡る魔術師達の血塗られた戦い

セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー

七人のサーヴァントとそれを使役するマスター達は最後の一組になるまで戦い続けなければならない

これは第五次聖杯戦争が終えてからのその先の血塗られた物語

冬木市

そこは10年前とある大火災で街が燃え、人々も死にいたった

だがその火災で生き残った少年がいた。名を士郎という

少年は衛宮切嗣に救われる

士郎は衛宮切嗣に引き取られ衛宮士郎となり、切嗣は士郎の義父となる

衛宮切嗣は子供の頃憧れていたモノがあった。それは「正義に味方になりたい」だった

切嗣は正義の味方になるため様々な殺戮を繰り返した

射殺、爆殺例を上げればあげきれないほどに

だが第四次聖杯戦争に参加した彼はセイバーと共に最終決戦まで残ったが聖杯の中身がなにかとわかるとセイバーにその聖杯を破壊させたがこの街には大きな被害が出た

士郎は切嗣に助けられた。そして士郎は切嗣の意思を受け継ぎ「正義の味方」への道を第五次聖杯戦争の経験を得て歩んでいる

「セイバー重くないか？」

冬木のとある街道を歩く士郎。両腕には食材が入ったビニール袋を持っている

「はい、大丈夫ですシロウ」

その横には金髪の美少女、セイバーがいた。彼女の真名はアルトリア・ペンドラゴン。かの有名なアーサー王物語に登場するアーサー王その人である

彼女は第四次では切嗣。第五次では士郎に召喚された英霊だ。彼女の手にも食材が入ったビニール袋を持っている

「そうか？無理しないでいいんだぞ」

「心配にはおよびません。それでも戦場を馳せた身ですから」

「そうだった。でも無理なら遠慮なく言ってくれ」

「はい」

士郎の優しい言葉に返事を帰すセイバー
すると

「士郎？」

「遠坂！」

ひょっこりと現れたのはこの冬木の地を預かる遠坂家の現頭首、遠坂凜。彼女ものの第五次聖杯戦争に参加したマスターの一人。召喚されたサーヴァントはアーチャー、弓兵のサーヴァントだ

第四次聖杯戦争には彼女の父、遠坂家前頭首遠坂時臣が参加した。時臣の弟子であり、凜の兄弟子である言峰綺礼に殺害され当時時臣のサーヴァントであったアーチャー、英雄王ギルガメッシュのマスターとなり第四次で切嗣と戦った

「どうしたんだ遠坂？いま帰りか？」

「そうよ。これ見りゃわかるでしょ」

そう言つて凜は鞆を指でつまみブラブラと揺らす

「藤村先生に頼まれて荷物運び。あんなのは慎二にでもやらせておけばいいのに」

小声でばやく遠坂

「士郎たちは買い物帰り？」

「ああ、今日は中華にようと思つてな」

「だったら私の腕の見せ所ね」

遠坂は中華料理が得意でその腕は士郎の上に行く

「それは楽しみですな」

士郎の上に行く凜の中華はセイバーの好きな料理の一つ、セイバーはひそかに心踊つていた

だが、それは叶わない願いだった

士郎、セイバー、凜の目の前に灰色のフードを被った女性が現れる
サーヴァントだ

三人は一斉にそのサーヴァントに振り返る

「シロウ下がって！！」

セイバーは士郎と凜を庇うように前に出て魔力で構築された鎧を身に待とう。目には見えない剣、インヒシブル・エア風王結界を握る

サーヴァントも己の宝具と思われる赤いメカメカしい剣を二本抜く

「アーチャー!!!」

凜は自ら契約したサーヴァント、アーチャーを呼ぶ

「お呼びかな？」

「お呼びかな？じゃないわよ!!!サーヴァントよ!」
「なに？」

アーチャーはサーヴァントを睨む

「どういうことだ？サーヴァントは現在すべて現界している。奴いつたい何者だ？」

そうアーチャーが言うようにここにいるセイバーとアーチャーの他にもランサーはクーフリーン、ライダーはメデューサ、キャスターはメディア、アサシンは佐々木小次郎、バーサカーはヘラクレスと全て現界している。例外である前回のアーチャーのギルガメッシュやアヴェンジャーのアンリマユは別だ

「まあ、ともかくアレを倒せば何か吐いてくれるだろう」

そう言うアーチャーはセイバーの横に並ぶ

「セイバー。俺が弓でサポートする。お前は白兵戦で行けるか？」

「問題ない。ではアーチャー、頼んだぞ!!!」

セイバーはサポートをアーチャーに托し自分が得意とする戦いを始める

「士郎、あのサーヴァントのマスターは確認できる？」

「いや、いなさそうだ……………」

「やっぱり……………。それにあのサーヴァントの能力値が異常よ、圧倒的にセイバーの上をいつてるわ……………」

サーヴァントのマスターは契約が終えると令呪というサーヴァントを最高三回まで命令できる印しを授かる。さらにマスターには相手サーヴァントのステータスを確認することのできる目を与えられる。そしてあのサーヴァントのステータスは騎乗、対魔力といったセイバーのクラスに与えられるスキルが全てA++以上、恐らくあのサーヴァントはセイバーで、しかも士郎と契約したアルトリアと同等かそれ以上の能力を持っている。それにあのメカメカしい剣、彼女も英霊エミヤと同じく未来の英雄なのだろうか

「はあ！！！」

アルトリアの風王結界を流すサーヴァント
さらにアーチャーの放つ矢も弾く

「くっ……………」

アルトリアはこのままでは拉致がないと悟り敵サーヴァントから一定の距離を取る
するとサーヴァントは剣を振るうと三日月状のエネルギーの刃が飛びだしアルトリアとエミヤを襲う
エミヤは瞬時に左右の刃が黒と白の夫婦剣、千将・莫取を投影し刃をクロスさせ防御する

アルトリアはその隙をつきサーヴァントを斬ろうと飛び上がる。だ

が、敵サーヴァントは剣をつき刺すように腕を伸ばすと刀身からレーザーが放出させアルトリアの腹部に直撃し落下する

「がはっ！」

「セイバー！！！」

ガチャと鎧が音をたて、地面に激突する

だが、鎧を着ていたおかげでダメージは少なかった

「紅椿……………」

敵サーヴァントがそう呟くと彼女の身体を赤い鎧が身に纏われるさらに彼女の鎧の装甲が開き黒の粒子を放つ。すると士郎たちの背後にブラックホールのような空間が出現しそれは士郎たちを吸い込もうとしている

「あれはいつたいたいなんなの！？」

「よくわからないが、あれは俺達を吸い込もうとしている！！」

士郎と凜は足で踏ん張り吸い込まれないようとするが士郎が足を滑らせる

「うああああ！！！」

「士郎！きゃっ！！！」

士郎に手を伸ばした凜も巻き添いとなり士郎と一緒に吸い込まれる

「シロウ！リン！」

「手遅れだ！俺達も行くぞセイバー！！！」

「はい！！！」

アルトリアとエミヤは吸い込まれたマスターを追うためそのブラッ
クホールに飛び込んだ

だがエミヤはその時敵サーヴァントの素顔を見た

白髪にその髪には目立たない白いリボンを巻いた年齢が約二十歳前
後の女性の素顔を

そして彼ら四人はこれから別の物語に干渉するのであった……

プロローグ・開幕（後書き）

予告どおり始めました！

フェイスト！！

次回からはISキャラが登場する予定なので期待してください

第1話・英霊召喚

とある部屋

白い壁が広がる部屋。机があり、数々の薬品が並びその薬品が独特の臭いを漂わせているさらにベッドの上には一人の青年が寝ていた。衛宮士郎だ

そして士郎は目を覚ます

「ここはどこだ………？」

寝ぼけた目を擦り、辺りを見回すとシャーとこの部屋の自動ドアが開く

「ん？目覚めたか。衛宮士郎」

入ってきたのは凜のサーヴァント・アーチャー、エミヤだった

「ああ」

士郎はエミヤの言葉にそう答える。だが士郎は変な違和感があつた。そう、いつも自分の側にいる剣の英霊、セイバーのアルトリアがない。それにエミヤがいるのならそのマスターである遠坂凜の姿もない

「セイバーと遠坂は？」

士郎はアルトリアと凜の所在をエミヤへ問う

「安心しろ。彼女達は別室にいる」

「別室？」

「そこでいまこの世界の事を聞かされている」

「そうか。え？世界？」

一瞬納得しかけたが世界という単語に士郎は疑問を持った。エミヤの言い方だとまるでこの世界は士郎たちの住んでいる世界とは別の世界と言っているようなものだ

「そうだ。どうやらここは私達の住んでいた世界とは違うらしい」

士郎の思ったことは的中した

「それより目が覚めたならついて来い。セイバーと凜が心配している」

「わかった」

士郎が返事をするにエミヤは別室にいるセイバーと凜の元へ連れていく。しばらく歩くと「応接室」と書かれた部屋の前に立つ

「ここだ。私は霊体化している。あとは好きにしろ」

そういうとエミヤは霧状になり霊体化してしまう

士郎はドアをノックする。返事が返ってくる

「失礼します……………」

士郎は恐る恐るドアを開けるとそこには二十歳過ぎくらいでスーツ姿の女性とセイバー、凜の計三人がソファにセイバーと凜に対するように腰掛けお茶をいただいていた。綺麗な色の紅茶だ。女性の目の前にはコーヒーが注がれてある。アルトリアはサツと立ち上がり

言葉を放つ

「シロウ大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ。セイバー」

アルトリアに言葉を返す士郎。すると女性も立ち上がる

「君が衛宮士郎か？」

「あなたは？」

「私は織斑千冬。この学園で教師をしている」

「ああ」とこは学校かと納得する士郎

「彼女達からいろいろ聞かせてもらった。君の義父の事、聖杯戦争の事、繰り返す四日間の事。得に驚いたのはアーサー王が女だったという事だな」

千冬がそついうと士郎は凜に目先を向け

「遠坂！何考えてるんだよ！サーヴァントや聖杯戦争に関係のない人にあの出来事を話すなんて！！」

士郎は怒鳴るような言い方で凜に言うが、凜は紅茶を啜りテーブルに置く

「交換条件よ。私たちがいろいろ話す変わりにあっちもいろいろ話すっていうね。もっとも千冬さんが助けようとしてくれたんだけどセイバーとウチのバカアーチャーが彼女の目の前で宝具抜いて剣を投影したりしたから……………」

「ああ……………。そうなのかセイバー？」

士郎は冷めた目つきでアルトリアを見る

「はい。すみませんシロウ」

「いや別にいいんだ」

士郎はスーとセイバーから目を反らす

「さて次はこちらの事だな」

千冬は再びソファに腰掛ける

「衛宮そこにパイプ椅子がある広げて座れ」

「あ、はい」

士郎は千冬の指示でパイプ椅子を広げ腰掛ける

「ではISについて話すぞ」

「IS?」

士郎は聞き慣れない言葉に疑問を持つ

「あのー、ISってなんです?」

士郎はつい千冬に聞いてしまう

「だからそれを説明するんでしょうが。バカ士郎。千冬さんお願いします」

凜はため息をつき呆れた表情で士郎言い、キリとした元の表情に戻る

ると千冬に「IS」の説明を求める

「ああ、ISの正式名称はインフィニット・ストラトス。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」と呼ばれる事件をきっかけ従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。女性にしか扱えないというのが欠点で、いまではこの世界のバランスは女性優先社会となっている。さらにそのISの勉強をするためにこのIS学院が設立された。とうところか」

千冬は坦々とISの説明を士郎達にし、両目をつむりコーヒークップに手を伸ばしコーヒースプーンを嚙り右目を開ける。そこには完全に話の内容を理解した凜。だいたい理解した士郎。ほとんど理解せず頭を回すアルトリアがいた

「ようするにISは女性にしか扱えない兵器といったところかしら？」

「簡単に言えばな」

凜の言葉に納得するセイバー陣。それを見た凜はまた呆れている

「で、ものは相談だが。お前たちIS学院に通ってみてはどうだ？」

「「「え？」「」」

「お前たちはこちらの世界に来てまだ日が浅いというか数時間しかない。IS学院には寮もあり食事も一応無料だ。先程の話を聞く限りセイバーは大食いなのだろ？それにできればお前たちは私の側においておきたい。うってつけたと思うがどうする？」

千冬からのIS学院入学の申し出

「だけど、俺は男ですよ？大丈夫なんですか？」

千冬の話が本当なら、ISの操縦者は皆女。男である士郎はいてもなにもならないと感じたが

「それは心配するな。実は私の弟がここに通っていてな」

「えっ、でも……」

「本人に聞くと入試時道を間違えてIS学院のISを動かしてしまつたらしくてな。それがきっかけで今月IS学院に入学したんだ。だから問題ない」

千冬の弟が入学したのなら士郎も大丈夫だろうというのが千冬の考えのようだ

するとアルトリアが目を輝かせ士郎に飛びつく

「士郎！ここはこの提案に乗るべきです！！！」

「ちよっ、セイバー！？」

「ここに入学すれば食事、いえ、士郎からの魔力供給も稼げます！！なによりせつかくの申し出です乗らずにはいられません！！！」

いまこの娘、食事つて言つたよね？と士郎は凜へ視線を向ける

「では、決まりでいいな？」

「ええ、お願いするわ」

千冬の問いに凜が答える

「では、今日は休むといい。私はこれから家に帰るが今日は泊まっ

ていけ」

「あ、はいお願いします!!」

興奮しているアルトリアを抑えて言う士郎

「では、正門に車を回す。そとで待っていてくれ」

そう言う千冬は退室し車を出し、士郎達を連れ織斑邸へ送っていった

しばらく走ると車は織斑邸に到着し全員降りると千冬は玄関のドアを開け士郎達はそろそろとそのついていく

「一夏。いま帰ったぞ」

「お帰りー、千冬姉!!」

と奥から男性の声が響きエプロンをした姿でやって来る。どうやら夕食の支度の途中だったようだ

「あれ？お客さん？」

千冬の弟は士郎達の存在に気がつく

「ああ、衛宮士郎、遠坂凜、アルトリア・ペンドラゴン。三人とも私の知り合いだ」
「そっか」

千冬の弟は納得すると三人に自己紹介する

「初めまして、俺は織斑一夏。よろしくな」

「ああ、俺は衛宮士郎。士郎でいいよ」

「遠坂凜よ。よろしくね一夏くん。私のことも凜でいいわ」

「アルトリア・ペンドラゴンです。セイバーと呼んでください」

一夏に釣られ士郎、凜、アルトリアと順番に自己紹介をする

「えっと、士郎と凜とアルトリアさんはセイバーだな。いらっしやい、歓迎するよ。そうだ千冬姉ちよつと買い物頼んでいいかな？」

「ん？言ってみろ」

「実は材料をきらせてて、エビと刺身を買ってきてほしいんだけど

.....」

「仕方ないいいだろう。遠坂手伝ってくれないか？」

千冬は凜に手伝いを頼む

「ええ、いいですよ」

「そうか。では、行ってくる」

「いつてらっしやい千冬姉」

「ああ」

そして千冬は遠坂を車に乗せ近所のスーパーへエビと刺身を買に行った

「さてと、夕食作りの続きを」と

一夏はそのまま厨房へ向かう

士郎とアルトリアも一夏についていく

「一夏。俺もなにか手伝おうか？」

士郎は一夏に手伝う事はないかと聞く

「あー、ありがとう。だったらみそ汁作ろうと思うから手伝ってくれ。エプロンはそのにあるから」

「わかった」

そして士郎はエプロンを着け一夏と夕食の準備を手伝う

その後士郎と一夏は各家庭の味を組み合わせ織宮スペシャルというみそ汁が完成する

千冬達も帰って来て頼んだ食材を受け取り夕食が完成し全員一夏と士郎の作った夕食に下積みした
それからしばらくし風呂から上がった一夏は自分の部屋にいた

「ふう……」

まだ少し濡れている頭をタオルで拭きながら一夏はベットに腰掛ける

（今日は久々に楽しかったな）

拭き終えたタオルを手で握りベットに背中から倒れ込む

「士郎とみそ汁作って、セイバーさんには俺達の料理食べてもらって最高の一日だ」

今日という一日に満足していた

すると部屋の電球がチカチカと点滅する

「なんだ？電球が切れたのか？」

立ち上がり一夏は部屋の電気を消すと一夏の部屋のなにも置かれていないスペースに奇妙な模様が描かれていた
それは士郎は凜が知っているその模様は、サーヴァント召喚の魔法陣だ

魔法陣が輝いて、強い風が吹きすさぶ

「な、なんだ？痛つ……………」

さらに一夏は右手に激痛を感じそれに目をやるとそこには龍のような痣が三つにわかれて浮き上がった

「なんだこれ……………」

手の痣を見て一夏は呆然となる。だが、呆然としているうちに風は止んでいた

魔法陣の中央には黒い全身甲冑フルプレートの男が現れる

そして男は兜を取り、一夏にこう尋ねた

「問おう、貴方が私を招きしマスターか？」

第2話・契約完了

「問おう、貴方が私を招きしマスターか？」

黒甲冑のサーヴァントが一夏に問う

さらにここにサーヴァントが召喚された気配を察知し甲冑を身に纏ったアルトリアは織斑邸の階段を駆け上がる。その後を追うマスター二人

「イチカ！！」

一夏の部屋のドアを開け突入するアルトリア

「セイバー！？」

アルトリアの甲冑姿に一夏は驚いていた

「下がってください！ここは私が」

一夏を庇うようにし前に出る。サーヴァントに対し風王結界を向ける

「何物だ？私をアルトリア・ペンドラゴンと知って剣を向けるのなら受けてやる」

アルトリアの切っ先を向けられてもなお同じないサーヴァント。すると彼はひざまづいた

「え？」

それに驚くアルトリア

「お久しぶりです、王よ」

「その声……………まさか、貴方は……………」

聞き覚えのある声、言い方それはかつてアルトリアに忠誠を誓った騎士、サー・ランスロットのものだった

「ランス……………ロット……………？」

「はい、十年ぶりですね。アーサー様」

そこにはバーサーカーではなく、かつての騎士としての凛々く、王に使えたサー・ランスロットの姿があった

「ランスロット！！」

アルトリアは嬉しさのあまりランスロットにそっと寄り添った

「アーサー様？」

「よくぞ、よくぞ私の元へ帰って来てくれた」

「アーサー……………様……………」

ランスロットの足に冷たいなにかが当たった。それは騎士王、アルトリアの流した一滴の涙だった

そして彼は騎士王の頭を数回撫でた

そっぴているうちに士郎と凜が一夏の部屋にたどり着き、この状態を目撃する

「これはいい……………」

アルトリアとランスロットの現状を見て声を漏らす士郎

「一夏くんちょっと右手見せて」
「あ、ああ」

そう言うで一夏はそつと右手を凜に見せる。腕には令呪が刻まれていた

「やっぱり。士郎ちょっと」
「どうした？遠坂」
「これ、見て」

一夏の右手を士郎に見せる

「これは……！？」
「令呪。間違いないわ」
「ということは……！！？」
「一夏くんはマスターに、聖杯に選ばれたのよ」
「聖杯？」

聞き慣れない言葉に一夏は首を傾げる

「とりあえず下で詳しい話をするわ。悪いけどセイバーと一夏くんのサーヴァント。一緒に来てくれない？」

アルトリアはそつとランスロットから離れ士郎達の方を向く

「はい。わかりました。行きましょうランスロット」
「ハッ！！」

そして士郎達は織斑邸の居間へ行き、千冬を交え一夏に聖杯戦争というシステムのカラクリを話し、士郎達は別の世界の人間だということを知った

「まさか、身内から聖杯戦争に参加する者が現れるとはな」

居間で仕事の疲れを癒していた千冬に、まさか先程聞かされた聖杯戦争に参加するサーヴァントを使役するマスターが自身の弟と知り呆れてた

「千冬姉は知ってたのか？」

「いや、私は先程遠坂に聞かされて知った。それだけだ」

「そっか……………」

一夏がそう言うのと千冬はテーブルのビール缶に手を伸ばしグイッと飲む

「ねえ、一夏くん。そういえばさっき彼を召喚した時なにか流れこんで来なかった？」

「ああ、そういえば。対魔力とか騎乗とかよくわからない単語が頭に入ってきたような」

「だったら、サーヴァントのクラスは？セイバー、アーチャー、ランスー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー。どれが頭に流れてきた？」

「あ、それならわかった。セイバーっていうのが流れてきた」

一夏が言うにはランスロットのクラスはセイバーだ。確かにランスロットにはアルトリアの最強の聖剣、勝利^{エクス・}された約束^{カリバー}の剣があるよ

うに、最強の魔剣、無毀なる湖光<sup>アロン
ダイト</sup>がある。セイバーとして召喚される理由がしかとある。前はバーサーカーとして現界したがそれは間桐雁也が召喚の際に「狂化」の属性を与えるためにバーサーカーとして召喚されたのだ
だがそれでは矛盾が生じる

（どういう事？私たちが戦ったあのサーヴァントはセイバーのはず。なのにここにもセイバーとしてランスロットが現界した。あれはセイバーでは無かったというの？それともこの世界の聖杯戦争では召喚に制限がない？）

それが矛盾だ。あの時のサーヴァントがセイバーなら、このランスロットもセイバー。アルトリアを除くとセイバーのサーヴァントが二体存在するということになる。さらにアルトリアに聞いたところによると、このランスロットは第四次聖杯戦争で戦った事がある。この世界のランスロットではなく士郎達のランスロットという事になる

「とにかく俺はランスロット。お前を聖杯戦争に勝利させればいいんだな？」

一夏はランスロットに首を向ける

「あ、はい。そうなります……」

「だったら俺は協力するよ。魔術は使えないけどお前の助けになりたい」

「だが、しかし……」

ランスロットの視線はアルトリアに向けられる。アルトリアは首を横に振り

「ランスロット。貴方はかつて私と戦い、五回目の聖杯戦争でも私はブリテンを救済する事ができず聖杯を破壊した。しかし私が以前の聖杯戦争から今までたくさんの事を学び成長できました。貴方は新たな君主にその力を捧げなさい」

アルトリアは王としてランスロットへ言葉を捧げる。己のなすことを。アルトリアは彼の道を導いた

「ありがとうございます。アーサー様」

そう呟くとランスロットは一夏に右手を差し延べる

「私などでふがないかもしれませんが、全力で私は貴方を守り抜きます。マスター！」

「ああ、よろしくなランスロット」

一夏は差し延べられたランスロットの右手を握る。これでマスター、織斑一夏とセイバー、サー・ランスロットとの契約は完了した

「話しはまとまったか？なら早く寝ろ。明日に差し支えるぞ」

空になったビール缶を置きこの場の全員に言う

「わかったよ千冬姉。それじゃ、お休み」

「お休みなさい。マスターの姉上」

一夏は立ち上がり、階段を上り部屋へ戻り、ランスロットは霊体化し消滅する

士郎達も織斑邸の客間に敷かれた布団に横になり床についた

一人残った千冬は……

「聖杯戦争か……」

と呟くと彼女はビール缶を片付け自分も眠りについた

翌日

「久しぶりだな一夏の家は……」

織斑邸の前に一人の少女がいた。黒いポニーテール、和服が似合いそうなスラッとしたスタイル、落ち着いた物腰。織斑一夏の幼なじみ篠ノ之箒だ。手には包帯が巻かれている。彼女は今日一夏に呼ばれたためにまこうしてここにいる。そして箒はインターホンを鳴らす

「はい」

ガチャとドアが開き、一夏が姿を現す

「来てくれたんだな箒」

「ま、まあ。お前の頼みだったからな。仕方なく、仕方なくだぞ！」

「あ、ああ……」

一夏は箒の威圧に下がってしまう
それを見た箒は

（しまった。少し強く言いすぎた……）

少し後悔していた

彼女、篠ノ之箒は一夏に恋しているのだ

そのため照れ隠しに少し強い物言いになってしまった

一夏は右手に巻かれてる包帯が目に入る

「手、どうしたんだ？」

「あ、ああ、これは数日前切ってしまつてな……」

「大丈夫なのか？」

「ああ、少し切っただけだ。心配ない」

「そうか」

「心配ない」その言葉を聞いた一夏は安心していた
すると

「どうかしましたか？マスター？」

ランスロットが姿を現した。もちろん霊体化からではなくちゃんと
ドアの向こうからだ

一夏は「ゲッ」と声を漏らしそれが表情に出ている

「ちょっ、ランス！お前！」

一夏がそう言う

「はいはい。ちょっとお話があるんだちょっと来てくれないかな
ランスさ〜ん」

「そうですよ。勝手に出ては行けませんよ兄さん」

凜、アルトリアの順番で言い、ランスロットは二人に連行された。

アルトリアは箒をごまかすためランスロットを兄という事にしているらしい

「ちょっ、遠坂殿！？アーサー様、兄とはいっただい！？」

ランスロットは二人に連行されしばらく説教を受けた

「一夏あれはいっただい？」

放置されていた箒が声を出す

「ああ、千冬姉のお客さんで明日IS学園に転入する予定でいまは家で暮らしてるんだ。今日はその為の生活用品を買いに行くから手伝ってほしくて箒を呼んだんだ」

「そ、そうなのか……………」

一夏と二人きりでデートかと思ったが他の連中も一緒に心の底からガッカリしていた

「じゃ、箒上がって待っててくれ。俺達も準備するから」

「ああ……………」

そして箒は織斑邸に足を踏み込んだ

それから数分後、士郎、一夏、アルトリア、箒、凜、ランスロットの六人はたいていの物が揃っているショッピングセンターへ向かったが、ショッピングセンターへ向かう士郎達を眺める陰があった
翡翠色の鎧に布に巻かれた二本の異なる長さの槍を持ち、なにより特徴的なのは二枚目で目尻に泣き黒子がある男だった

「見つけたぞ。セイバー……………！！」

そう言うとその男は霊体化し消滅した

第3話・開戦（前書き）

IS小説なのにまだISが出せないというか、原作本編にすら入れてない現状。ああ、鈴音やシャルロット、ラウラを参加させたい

第3話・開戦

士郎たちは明日に転入するIS学園に向けて、筆記用具やちよつとした私服を買いにショッピングセンターに来ていた。遠坂にいたつては魔術道具に使えるそうな物も買うつもりだそうだ

「シャーペンよし、ボールペンよし、次はつと……………」

士郎は文具店でこれからの学校生活に必要な筆記用具一式をカゴの中へ入れる。ちなみに隣には遠坂中がいて、一夏と箒、アルトリア、ランスロットは文具店の前にあるベンチに座っている。箒にしてみればこの二人は現在邪魔物以外の何者でもない。エミヤもいるが出かける当初から霊体化したため人目にはつかない。カゴにはシャーペン、ボールペン、消しゴム、ノート数冊ペンケースが三つづつ。黒は士郎、赤は凜、青はアルトリアと色分けされている

「こんなもんでいいんじゃない士郎？」

「そうだな。じゃ、俺はレジ行ってくるから遠坂は一夏たちと待っていてくれ」

「はいはい、ちゃっちゃと買ってきてね」

「わかりましたよ。まったく……………」

ため息をつくると士郎はレジへ行き品物を購入した
その頃先に戻った凜はとんでもない光景を見せられる

「うつわ、なにあのカオス……………」

その光景とはアルトリアの隣に箒、箒の隣に一夏、一夏の隣にランスロットと英霊二人に挟まれている妙な構図だった。箒は一夏の隣

でソワソワしている

一応ランスロットは宝具、フォー・サムランズ・クロウリ「己が栄光の為でなく」で鎧を一般の服に変身させている

第四次聖杯戦争ではこの宝具はバーサーカーとして現界せられたため己のステータスを隠す事に使われたが本来は変身宝具なのだ
するとその光景をしばらく眺めていた凜の後ろから買物を終えた
士郎が帰ってくる

「どうした？遠坂？」

「お帰り士郎、ちょうどよかったアレどう思う？」

「ん？」

士郎は遠坂の指差した方を見ると、例の光景が目に入った

「あれがどうしたんだ遠坂？」

「あんたね……………」

「はあ」とため息をつき真顔でそんな事を言う士郎に呆れていた

「まあ、いいわ。士郎ちよつと手伝いなさい」

「あ、ああ……………」

（何故！何故こうなる！！）

箒はベンチでソワソワしていた

（一夏と二人きりかと思って来てみれば、邪魔物が四人も……………）

と箒は思っていた事が外れ、ショックを受けていた
するとソワソワしている一夏が箒に声をかける

「大丈夫か箒？そんなにソワソワして……………」

「あ、いや、大丈夫だ。気にしないでくれ……………」

「そうか？でもなにかあったら言ってくれよな」

「ああ……………」

と心配して声をかけてくれて箒の頬に赤みが加わる

すると買い物を終えた士郎と凜が早足でやって来た。だが様子がちよつとおかしい

士郎はアルトリアの手を掴むと無理矢理立たせる

「シロウ？」

「セイバー、ゴメン」

彼がそう言うときアルトリアの手を引いてどこかへ連れていく

「衛宮殿！？」

アルトリアの手を引いてどこかへ行こうとする士郎にランスロットは立ち上がり声を上げた

すると凜がランスロットの手を掴むと士郎達と同じ方向に向かいつつ

「一夏くんちよつと私たち急用ができたからランスロット借りていくわー！じゃ、ごゆっくりー、おほほほほ」

と叫びつつアルトリアとランスロットは士郎と凜に連行される
それを啞然と見てるしかできなかった一夏と箒だった

「なんだっ たんだ？今の……………」
「さあ……………」

だがすぐに箒は察した

（この状況は！）

そう一夏と二人きりという状況だ

連行されたアルトリアとランスロットは士郎と凜と一緒にエレベーター裏にいた

「いったいどうしたんだですかシロウ？わざわざこんなところに連れて来て」

「そうです。遠坂殿理由を聞きたい」

士郎と凜に詳しい事情を聞こうとするアルトリアとランスロット

「あんた達あの空間に直にいたのにまったく気づかなかったわけ？」

凜の言葉に首を傾げるアルトリアとランスロット

「いい、よく聞きなさい。おそらく、篠ノ之さんは一夏くんに恋してるわ。しかも、かなり昔からね」

「なんと……………」

「それは……………」

箒の思いを知ったアルトリアとランスロットは驚きを隠せずにいる

すると先程までずっと霊体化していたエミヤが両目をつむり、腕を組んだ姿で現れる

「おとりこみちゅうか？」

「ちよつとね。でもどうしたの？いつも霊体化してるあんたがいきなり現れるなんて」

「そのことだが、近くにサーヴァントの気配がするのだが、その二人は気づいているのか？」

エミヤは右目を開け、アルトリアとランスロットを見る

「はい。今感じましたランスロットはどうです？」

「確かに、近くにサーヴァントがいる」

先程まで感じなかったサーヴァントの気配に気づく二人のセイバー

「どうする遠坂？」

「そうね……。だったら私と士郎、セイバー、アーチャーでそのサーヴァントを迎え撃つわ。ランスロットは一夏と箒の警護ね」

凜は大まかに作戦をこの場の全員に言う

「だけど、頃合いになったら一夏くん連れて合流ね。わかった？」

作戦を聞いたランスロットは頷く

「頼みます。ランスロット」

「ハッ！！」

アルトリアからその言葉を聞くと彼は霊体化し一夏の元へ戻る

「さあ、行くわよみんな！」

その後、士郎、凜、アルトリア、エミヤはサーヴァントの気配を辿った

「ここですか……………」

しばらくして四人がたどり着いた場所は長いこと整備も点検もされていない工場だった

アルトリアは瞬時に鎧を身に纏う

そして工場内へ突入すると底には翡翠色の鎧に長さが異なる布が巻かれた槍、二枚目で泣き黒子がある男が立っていた

「久しいなセイバー!!」

「お前は……………!!」

その男はかつての聖杯戦争でケイネス・エルメロイ・アーチボルトのサーヴァントとして現界し、切嗣の汚いやり方でケイネスに令呪を使わせ自害させられた、フィオナ騎士団随一の騎士、輝く顔のデイルムッド・オディナだ

「知ってるのかセイバー？」

見知らぬ顔の相手に士郎はアルトリアに聞く

「はい。彼はかつての聖杯戦争でランサーとして召喚されたサーヴァント、ケルト神話に登場するフィオナ騎士団のデイルムッド・オ

デイナーです。彼とは二度矛を交えましたが結局勝敗はつかず終わりました……………」

「ふっ、そうだな。かつてのお前のマスターの汚いやり方のせいで俺は負けた。さらに主も殺された。そうだったな？セイバー！！」

怒りの表情がディルムツドの顔に表れる

「どういう事だセイバー？」

「はい、かつて切嗣はランサーのマスターを汚い手口で殺しランサーを自害させました」

「親父が……………」

アルトリアから第四次聖杯戦争の隠れた秘密を知り、士郎はディルムツドに聞こえない声を漏らす

「だが、安心しろランサー。今回の私のマスターは以前のマスターとは違う私たち騎士の決闘に首を突っ込むことはけてない！」

「それはどうだかな？見たところ、その赤いサーヴァントと協力関係のようだが、はたして奴が我々の決闘の邪魔をしないという保証もない」

ディルムツドはアルトリアが凜とエミヤを協力関係であることを見切り疑っている
すると凜が口を開く

「安心しなさい。私もアーチャーも手は出さないわ。何なら令呪で言い聞かせた方がいいかしら？」

鼻で笑う凜。それに対してディルムツドは

「なるほど、ならばセイバー、かつての俺の怒り！妬み！憎しみ！憎悪！それを全て貴様に叩きつけさせてもらう！！！」

彼が叫ぶと、持っていた槍の布を外す。するとそこからは黄色い短槍と赤い長槍がその姿を現す。それはデイルムツドの宝具、あらゆる傷を癒さぬ槍、必滅の黄薔薇と、魔力を無効にする槍、破魔の紅薔薇がその矛先を見せる

「ああ、望むところだ！！」

アルトリアも己の宝具である風王決界に隠していた黄金の聖剣、約束された勝利の剣がその刀身を現す

「行くぞ、ランサー！！」

「来い、セイバー！！」

お互いは足を踏み込み戦闘が開始される

そこからしばらく離れた位置。そこには一人の少女がいた。縦ロールがある金髪に清んだ青い瞳、白いワンピースを着た気品のある少女、セシリア・オルコットだ。IS学園の生徒で一夏の学友の一人。しかも彼女も箒同様一夏に恋した女性の一人だ

「デイル様一体どこへ……………」

彼女は「デイル」と呼ばれる男を探していた
すると工場から人気のない工場から光が漏れその光はセシリアの目に止まる

「あの光は、まさかあちらに………?」

セシリアはなんの核心もないがとりあえず、その工場へ足を向けた

第3話・開戦（後書き）

なんだか今回は駄文な感じがしますが
おかしな点があれば教えてください

次回はアルトリアVSディルムッドです
しかもセシリアにある秘密が！！

第4話・和解

「ぜああ!!」

「くっ!」

「らあああ!!」

「うっ!!」

「らああああ!!」

かつての聖杯戦争の恨み憎しみを得て鬼神のように荒々しい突きを繰り出すデイルムツドの赤き呪槍、破魔^{ゲイ・}の紅薔薇^{ジャルグ}。その宝具としての能力は魔力を無力化させる。そのためアルトリアは剣で流すか、避けるかでデイルムツドの必滅の紅薔薇を防御している

さらに黄色い槍、必滅^{ゲイ・}の黄薔薇^{ボウ}は傷を負わせればそこは槍が破壊されるか、デイルムツド自身を倒さぬ限り癒えることのない呪いの呪槍。つまり今のアルトリアは防戦一方なのだ

「凄いわねあのランサー。技量はセイバーと一緒にくらいかそれ以上……」

確かに、前回の聖杯戦争でデイルムツドはアルトリアと対峙しその強さを証明している

「だが、先程の彼との約束で私達はこの決闘の邪魔をすることはできない。セイバーに勝つことを願うしかないだろうな」

冷静にそう言うエミヤ

「ああ、勝ってくれセイバー……!!」

士郎は契約サーヴェント、セイバーのアルトリアの勝利を願いそう
呟いた

だがデイルムツドの猛攻は続く

「どうした騎士王！！以前より衰えたな」

「嘗めるなよランサー。今の私が以前の私と一緒にだと思うな」

「ほお、それではなにか秘策があるか？笑わせるな。騎士の恥さらし者が正々堂々とした勝負でその秘策が通用すると思っているのか？」

デイルムツドはそう言うアルトリアを鼻で笑ったが

「違う！！！」

と工場に声が響き渡る

士郎の声だ

「セイバーは恥さらし者じゃない！たしかにお前は切嗣の汚いやり方で聖杯戦争を終わらされたのかもしれない！だつらなんでしょうそんな風に槍を握る！なぜ、お前はそこまでセイバーをバカにできる！お前にもセイバーと同様に理想があつたんだろ。それを叶えるのになんでお前はそんな狂気に取り付かれたように槍を奮う！！俺には騎士の誇りがなんなのかわからない。でも俺の知っているランサーはそんな風には絶対槍は握らない！！」

「……………」

士郎の叫びがこだまする。デイルムツドは齒を食いしぼり己のなしたことを悔やみその言葉を聞いた

「セイバー。今のお前マスターはお前のことを真に理解しているの

だな」

「ええ、彼が今の私のマスター。そして私の愛するものだ!!」

「ならば俺も取り付かれたように槍を奮うのはやめにしよう。次の一撃で勝負を決めさせてもらおう……………!!!」

「いいだろう。私も全力でそれを打ち砕く!!!」

そう叫ぶとアルトリアの剣、エクス・カリバー約束された勝利の剣が黄金の輝きを放つ

「行くぞセイバー！我が槍受けてみよ!!」

デイルムツドは槍を構え、アルトリアへ向け突進する

ゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇でアルトリアの鎧を無効にし、体を貫こうとする

エクス・カリバーアルトリアも約束された勝利の剣を大きく振り上げ、魔力を光に変えていく

エクス・ゲイ「約束された……………」

ゲイ「破魔の……………」

そしてお互いは一定の間合いに差し掛かると、お互いの宝具を繰り出そうとしたが

「デイル様!!」

金髪縦ロールの少女が現れる

（マスター!?!）

ここにいるはずのない自らのマスターの存在に驚いているデイルムツド。すると彼の狙いは外れアルトリアの肩を掠める。さらアルトリアの約束された勝利の剣の切っ先が鈍り工場の天井に向け放たれる

エクス・カリバー
約束された勝利の剣の光を受けた場所は完全に消滅したがここは放置されていた工場。整備も点検もされずにガタが来ていたこの工場にエクス・カリバー
約束された勝利の剣の光を受けたせいでついに崩落しそうになっている。ただし崩落しそうな場所はアルトリアや士郎達のいる場所ではなく、デイルムツドのマスターの場所だ。天井を支えていた鉄柱が崩れる
そして

ガシャン！！！！

と大きな音をたて地面に鉄柱が落ち、茶色い砂が煙りとなり舞う

「マスター！！」

デイルムツドはアルトリアから離れ己の宝具すら投げ捨てマスターの元へ向った
だが、そこにはとんでもない人物がいた

「はあ……………」

黒いヘルメットに黒甲冑の男。それは戦闘体制のランスロットだ
ランスロットの手には黒い魔剣、それはランスロットの二つ宝具、フォー・サムワンス・クロウリー
「己が栄光の為でなく」と「騎士は徒手にて死せず」を封印し己の全てのステータスを全て1ランクアップさせる剣、無毀なる湖光^{アロン}を抜いたのだ

つまり、ランスロットはデイルムツドのマスターにぶつかりそうになった瞬間、デイルムツドのマスターに直撃しそうになった鉄柱を^{アロン}
全て無毀なる湖光^{タイト}で薙ぎ払ったのだ

「セシリア、大丈夫か！？」

さらにランスロットのマスターである一夏も来ていた。しかもディルムッドのマスターは一夏の学友でもあり、幕と同様に一夏に恋した女性、セシリア・オルコットなのだ

「ええ、わたくしは大丈夫ですわ……………」

「そうか、よかった。サンキューなランス」

セシリアが無事でいて安心した一夏はランスロットに礼を言う

「いえ、私はマスターの指示に従ったまでです」

ヘルメットを外しながら言うランスロット
するとディルムッドが駆け付ける

「我が主！お怪我は！？」

「わたくしは大丈夫ですわ」

一夏はディルムッドの「主」という言葉に反応しセシリアに聞いた

「セシリア。まさかお前……………」

「はい。わたくしも聖杯戦争に参加するマスターですわ」

「という事は俺とセシリアは敵ってことになるのか……………」

一夏は一瞬絶望しかけた。なぜなら同じ学年で同じ仲間のセシリアと殺し合うなんてことになるとは思わなかったからだ
すると凜が茶々を入れた

「お話中悪いけど。ちょっと待って」

「え？どういことだ凜？」

「さっきからずっと考えてたの。しばらく一夏くんとランサーのマスターも停戦してほしいのよ。その間この聖杯戦争を調べてみようと思うの。それにランサーのマスターと一夏くんが友達なら別にいまは戦う必要はなく協力し、最後に一騎打ちで戦えばいいんじゃない。どう、乗ってみる気ある？」

凜は腕を組んで自分の意見を発言する

「ああ、俺はそっちの方がいい！友達と殺し合いなんかしたくない」「わたくしも同意見ですわ」

一夏とセシリアは凜の提案に乗る

「サーヴァント連中はどう？」

次にランスロットとディルムッドに聞く

「はい。マスターがいいのであれば私に依存はありません」「同じく」

上からディルムッド、ランスロットの順番で言う

「じゃ、決定ね。買い物もすんだしこれから一夏くん家でこれからの方針を考えるわよ。そういえば篠ノ之さんは？」

「ああ、箒なら士郎達が戦いにいったって聞いた後すぐに帰ってもらった」

「そう、じゃ早く帰って作戦会議よ！！！」

凜が大声で仕切り、織斑邸へ向かおうとした瞬間、アルトリアがディルムッドが投げ捨てた己の宝具の槍を渡す。先程、ディルムッド

が投げた後、セシリアが無事としたアルトリアは二本の槍を拾いにいったのだ

「ランサー、これを」

「ああ、すまない」

デイルムッドはその二本の槍を受け取る

「すまないなセイバー。お前のことを騎士の恥さらし者と言ってしまった。あれは撤回する」

「いえ、かつての私のマスターは貴方の騎士の誇りに傷を付けたました。当然のことです」

「だが、お前の騎士の誇りは正しいものだ。詫びを言わせてくれセイバー。すまなかった」

「はい。その言葉素直に受け取ります」

アルトリアとデイルムッド。二人はお互い謝罪しあい騎士の誇りを確かめあった

だが、そこから離れた場所から一つの少女がその光景を覗いていた。黒いポニーテールをした少女が……

「はあ、IS学園はビックリ英雄タウンにでもなるのか？」

とセシリアがマスターと知った千冬はぼやく

現在は織斑邸の居間に士郎、一夏、凜、セシリア、アルトリア、デイルムッド、ランスロット。エミヤはいつものことながら霊体化している

「それにお前はさつきから私になに色目を付けている？私に喧嘩を売っているのか？」

千冬はデイルムツドの鎧の裾野をイライラしながら掴み持ち上げる

「チフユ落ち着いてください！仕方ないのですそれはランサーの呪いなのですから！！」

千冬を止めようとするアルトリア

「呪い？」

「はい。ランサーはデイルムツド・オディナという騎士でして、彼の泣き黒子には女性を魅了する呪いが賭けられているのです」

「そうか。ならしかたない」

そう言う千冬は納得しデイルムツドを下ろすと千冬はセシリアに聞いた

「そういえば、オルコットお前はなぜマスターになったんだ。お前は貴族であつても魔術師じゃないだろう？」

「はい、実は数日前、わたくしがシャワーから上がると右手に痛みを感じまして、すると目の前にデイル様が召喚されていたのです。

聖杯戦争のことは召喚時に彼より聞きました」

「なるほどな。だがよくいままで、その呪いが学園の生徒には効果無かったな」

「はい、学園内ではできるだけ霊体化するように言っておりますから。おそらくそれのおかげかと」

「なるほど」

セシリアの説明に納得する千冬

「遠坂、これからこの世界の聖杯戦争のことを調べるのだろう?」
「はい」

「なら頼む。私の教え子達が訳のわからん戦に強制的に参加させられるのは見たくないからな」

「わかりました。私が無理な時はアーチャーにも調べさせます」

「悪いな。このような面倒を押し付けて」

「いえ」

凜はそう答えると一つ疑問を感じたデイルムツドの呪いについてだ

「そういえばオルコットさん」

「はい。なんでしょ遠坂さん?」

「あなた、ランサーの呪いの効果効いてないわねどうして?」

するとセシリアの顔が真っ赤になる

「それはその……」

そして一夏をチラチラと見始める。それで凜は核心する「この娘も篠ノ之さんと一緒か」と

「なにはともあれ、一夏、オルコット今日はお前達はIS学院に帰れ。一夏の外泊届けは昨日までだろう?」

「あ、そうだった!」

忘れていたようである。思い出すと一夏は立ち上がる

「それじゃ、俺達に行くけどじゃあな士郎また明日」

「ああ、じゃあな一夏」

一夏は士郎と別れの言葉を交わしセシリアとランスロット、ディルムッドと一緒に席を立ち、IS学院に戻る
そして千冬は残った士郎、凜、アルトリアにビニールに包まれたあの服を渡す。IS学院の制服だ

「先程お前達の制服と教科書が届いた。明日からお前達は、ISの武装のための知識をより勉強するためにという口実でIS学園に入学することにする。だから明日私が学院まで送ってやる。それに衛宮は男でISが動かせない、遠坂は魔術師は機械が苦手と聞いたし、セイバーは女で魔術師でもないが、立派に戦う力を持っているからな。そういうことになるが構わないな？」

これからのIS学園での生活を贈るために必要なことだろうということ
ことで千冬は三人に聞く

「はい。俺は構いません」

「ありがとうございます。すちふ」

「そうね。ありがとうございます。千冬さん」

上から士郎、アルトリア、凜の順番で答える

「よし。では今日は出前を取ろうと思うのだが、なにか食べたい物はあるか？」

千冬は立ち上がり、出前のチラシを数枚持っている

「え、そんなの俺が作りますよ？」

「今日は教え子が世話になったからな。その礼だ。気にするな」

千冬はすまし顔で言う。土郎は小声で礼を言う。そして四人は出前を注文し、食べ終えると明日の準備を三人は取り掛かる。だが三人は知らなかった。明日から始まる学院生活が波瀾万丈なものになるとは……

第4話・和解（後書き）

次回やつとIS学園に突入します

うまく行けばセカンド幼なじみも登場させれます

お楽しみ！！

第5話・転入と転入生

IS学園、1年1クラス

そこは一夏や筈、セシリアのクラスで、千冬が担当している組だ。現在ざわついている。だいたいの高校の朝ではめずらしくない光景だと、キーンコーンとチャイムが鳴り響くと同時にガラガラとドアが開き、このクラスの担任、織斑千冬と副担任、山田真耶が共に入ってくる

「うるさい。お前ら席付け!!」

と生徒達に言くと、ササツと自分の席に戻る

千冬は教卓に立つち真耶も千冬から離れた位置に着くと今日の日程を生徒達に連絡する

「えー、以上が今日の連絡だ。それと今日は転入生を三人紹介する。入って来い」

するとドアが開き三人の転入生がやって来る。士郎、凜、アルトリアの三人だ。IS学園は制服のカスタムが自由なだ。士郎はなんのカスタムもしていない制服。凜はいつも着ている赤い私服に類似するようにカスタムが施されている。アルトリアはスカートではなく男子制服用のズボンを掃き、上の制服は女子用の制服を着用している。さらには、アルトリアは手に白い手袋をしている
三人が中に入ると一列に並ぶと自己紹介を始める

「衛宮士郎です。ISの事を学ぶためにこの学園に転入しました。よろしく願います」

「遠坂凜よ。士郎と同じ理由でこの学園に転入することになったわ。

よろしく」

「アルトリア・ペンドラゴンと申します。シロウやリンと同じく理由でここで学ぶ事になりました。よろしく願います」

三人が自己紹介を終えると

「き……………」

「「「「きやあああああああああ！……………」」」」

と女生徒の叫び声がこだまする

「男子！男子よ！」

「しかもけっこうかつこいいー！」

「遠坂さんもなんかツンとしてて素敵ー！」

「ペンドラゴンさんも執事みたいでかつこいいー！」

1組の興奮し始めた

「騒ぐな、うつつうしい！」

千冬が一言葛を入れると全員一気にしんとしてしまう

「衛宮や遠坂達はISの技術を学ぶためにこの学園に来た。ISの実習の時間は教室に残って雑学になる。時々私が名を出した生徒にも残ってもらうがわかったな、わからなくても返事しろ」

「「「はい！！」「」」

千冬の強引な発言に生徒達は声を揃え返事する

「では、織斑とオルコットはこれより衛宮達と雑学だ。他の者は山

田先生と一緒にアリーナへ向かえ。それと衛宮、遠坂、ペンドラゴンお前達は空いている席に付け」

「はい」

返事を返すと士郎達は空いている席に着く

「それでは解散！ただちに準備しろ」

千冬がそう言うのと女生徒達は着替えを始める

残される士郎、一夏、アルトリア、凜、セシリアは廊下で待たされる
そして教室から真耶と女生徒達がなくなると五人は教室に戻り自分の席に着く

「さて、ISの雑学の授業を始めると言いたいところだが。別に教える事は特になくてな。お前達を残した理由は聖杯戦争の今後の方針についてを考えようと思う」

「どういう事だよ千冬姉？」

「織斑先生だ馬鹿者。織斑、オルコット、ランスロットとデイルムツドを呼べ」

「は、はい！！」

千冬がそう言うで一夏とセシリアは自分のサーヴァントのセイバーのサー・ランスロット。ランサーのデイルムツド・オディナの実体を現させる

「よし。遠坂、お前のアーチャーはどうした？」

「アーチャーはいま聖杯戦争について調べてもらってます。ですからここにはいません」

「ああ、そうだった。ではこれより聖杯戦争の今後の方針を話し合
う」

こうして、「IS知識学」という名の「聖杯戦争作戦会議」という授業が始まった

その後士郎やアルトリア、凜がクラスの女子達に質問攻めさせられたのは言うまでもない

「ああ、今日は疲れた……………」

とベットに倒れ込む士郎。ここは士郎とアルトリアの部屋。作りは一夏達の部屋と同じで場所は一夏の部屋の隣である

「ふん！それはよかったですねシロウ」

アルトリアはふてている。理由は今日一日ちやほやされていた一夏をずっと見せられたのが原因だ

「なあ、セイバー。なんでさっきからふて腐れてるんだ？」

「ふて腐れてなどいません！不愉快だ！先にシャワーを浴びさせてもいます」

と大声でシャワールームへ入って行くアルトリア

「なんでさ……………」

と士郎は呟く

士郎はその後、明日の復習をするためノートを開く

「さてと復習でもするか……………」

士郎は黙々と教科書に載っている問題を簡単に解いていく。それは簡単なはず。なぜなら士郎の本来の学年は3年生。今いるのは1年生のクラスだ。それは問題もスラスラと解けるつてものだ。一応千冬からは、「1年の問題ばかりでは、せつかく覚えた3年の問題も忘れてしまっだろ」という理由で3年用の問題集を士郎と凜は受け取っている。がそれは休日用ということにしてある。それから約三十分後アルトリアはまだシャワールームから帰ってこない

「どうしたんだ？セイバーの奴？」

そう呟く士郎

するとシャワールームに続く洗面所のドアが開く

「ああ、上がったのかセイバあああああ！？」

士郎は叫び声をあげる勢いで椅子から倒れた

それもそのはず、なぜならいまの彼女の姿は髪を下ろしたオル一枚つまり全裸の状態に近い姿なのだから。それに心なしか悲しそうな表情だ

しかもお湯に紛れアルトリアの目から一粒の雫が頬を伝う

「セイバー……お前泣いてるのか？」

「え？」

「だって……。お前……」

士郎がその先を言おうとした瞬間、アルトリアはそつと士郎に抱き着いた

「セイバー……………」

その行動に啞然となってしまう土郎
するとアルトリアは口を開く

「怖いんです……………」

「怖い？」

「ここには女性しかない。その空間に男はシロウとイチカしかない。誰かが私からシロウを奪うのではないかと考えるだけで私は……………」

「セイバー……………」

アルトリアはギュツと抱きしめた。土郎がどこかへ行かないようにと願って

すると土郎は彼女の名を呼び

「セイバー!!」

「はい……………？んん!？」

いきなり彼女の唇を奪った

ほんの一瞬の出来事だったが二人には長く、何時間もしているように思えた

二人はそつと離れる

「俺はお前を離さない。なにがあろうと絶対!!」

「シロウ……………。ありがとう」

アルトリアは笑顔で返す。その笑顔は土郎には輝いて見え頬を赤らめた

土郎はアルトリアから顔を逸らすと

「ほつ、ほら寒いんだから服着て！」

「そうでした。では着替えてきます」

アルトリアはそう言うのと洗面所へ向かい着替えを始めた

（そうだな。俺達は帰るんだ。桜がいて、ライダーがいて、藤姉がいて、イリヤがいて、カレンがいてランサーがいて、バーサーカーにリズ、セラがいる冬木の街へ絶対に戻る！！）

と士郎は思いを新たに決意した

その隣の部屋、そこは現在、遠坂凜の部屋になっていた

凜はテーブルに向かい、本を読んでいる。魔導書かなにかかと思いきや、その本の表紙に「全国！！宝石カタログ！！」と書かれていた。凜は宝石魔術師。宝石がないと何もできない。たとえるなら銃弾のない銃ということになる

すると凜の英霊、エミヤが姿を現す

「ただいま帰った」

「ああ、お帰り。どうだったこっちの聖杯戦争の資料、なにか見つかった？」

「いや、今日はダメだった。また明日探しに出掛けようと思う」

「ええ、わかったわ。とりあえず私は宝石を集めなきゃ！！」

と宝石カタログに食いつくように見る

「相変わらず。宝石魔術師とは面倒なうえ金がかかるな」

「うつさいわね!」

いつもの調子だった

こうしてこの日はくれ明日の太陽が昇る

数日後、チャイム前の登校時間。1年1クラスの生徒がほとんど登校しているなか、教室ではある話題で持ち切りだった。それが

「ねえねえ織斑くん、セシリア知ってる、2組のクラス代表が変更になったんだって」

「なんとかっていう娘に代わったんだよね」

「中国からの転校生らしいよ」

というものだった

「なんでも代表候補生らしいよ!」

「ねえねえ、どう思う織斑くん!セシリア!」

生徒の一人が一夏とセシリアに聞く

「どうだろうな、俺ほとんど初心者みたいなものだし」

「大丈夫ですわ。一夏さん、わたくしが手取り足取りお教えしますわ

「そうか、じゃたのむなセシリア」

「はい」

セシリアは頬を赤らめる

すると士郎とアルトリア、凜が登校してきた

「みんなおはよう」

「衛宮くん、ペンドラゴンさん、遠坂さんおはよう」

士郎が挨拶すると女生徒の一人が返事し返してくれる

「衛宮達はどう思う？2組の転入生」

「転入生？」

「そう中国からの代表候補生らしいよ」

「今度のクラス代表戦では優勝してもらわないとねー。商品が商品だから」

「商品？なにが出るのよ？」

と凜がそう聞くとあからさまにサイズがあっていない制服を着ているクラスメイトの布仏本音ことのほほんさんが説明する

「だってねー。クラス代表戦の優勝は学食のケーキ半年分のフリーパス券なんだよー」

「へえー」

「ケーキ……………」

凜は「へえー」と納得したが、アルトリアは口からよだれをはらすそして一夏の両手を取り

「イチカ！勝ってください！！お願いします！！」

「あ、はい……………」

とアルトリアの「食」という魂に火がついた

(王……………。いまの貴女は民には見せることはできませんよ……………)

とランスロットは霊体のまま、そんな君主を見ていた

（ですが、貴女は乙女のように笑えるようになったのですね。アルトリア様）

とランスロットは内心うれしそうだ

「まあ、うちには専用機持ちが二人もいるんだもの」
「楽勝よね」

と勝った気でいていた
すると

「その情報古いよ……！！！」

すると教室の扉が開きツインテールが特徴の小柄な少女が立っていた。そしてその少女が口を開く

「2組も専用機持ちがクラス代表になったのそう簡単には勝てないよ」

その少女は自信満々に言うと教室はざわめき始めた。そして

「鈴？お前鈴なのか？」

一夏の「鈴」という言葉に筭とセシリアがその鈴と呼ばれる少女を睨む

「そつよ！中国代表候補生鳳鈴音。久しぶりね一夏！」

第5話・転入と転入生（後書き）

執筆前にカーニバル・ファンタズムを観たてたんですが
これが面白いのなんの！！

この小説でもあんなのやってみたいです
ネタがあつたら教えてください

でもやるのはラウラ加入後になりますが
頑張りたいです！！

ネタ提供お願いします！！

第6話・侵入者

ある少女の登場で教室がざわめいていた

その最中一夏がその少女の名を呼びさらに教室はざわめく

「そつよ！中国代表候補生鳳鈴音。久しぶりね一夏！」

鈴音は一夏を指差し言う。その隣では箒とセシリアが悔しそうな顔でいた

「今日は宣戦布告に来たってわけ！」

「宣戦布告」つまり鈴音は敵。だが一夏には彼女を敵だという認識もなく

「鈴……なにカッコつけてんだ、すっげー似合わないぞ」

「ははは」と笑い友達のように言う

「な、なんて事言うのよあんたは！」

鈴音は顔を真っ赤にさせて一夏に怒鳴る。するが出席簿で誰かが脳天をチョップした

「いったー、なにすんのよ！！ゲッ」

鈴音が怒鳴り振り返ると、一瞬で表情が一変する

それはこのクラスの担任であり、ディルムッドの呪いすら粉碎する無双の女性、織斑千冬その人だった

「もうショートホームルームの時間だぞ？」

「ちっ、千冬さん……」

鈴音は冷や汗をかきながら千冬の名を呼ぶ

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ」

千冬は呆れ顔で教室へ入る

「また後で来るから逃げないでよ一夏！！」

鈴音は自分のクラスへ戻った

「あいつが代表候補生……」

鈴音がなくなると一夏はそう呟いた

そして昼休みに鈴が一夏の幼なじみ。もといセカンド幼なじみだと
を士郎や箒達は知ることになる

放課後、ISの訓練を箒やセシリアとした一夏はもうへとへと
の状態で更衣室のベンチで倒れていた

「あー疲れた……」

「お疲れ様です。マスター」

実体化したランスロットは一夏に声を駆ける

「ああ、そういえばどうだった？ISつていのを始めて見た感想は？」

「そうですね。IS本体は不可能ですが武装だけならば私の宝具で支配下に置けると思います」

「そういえば俺、ランスロットの宝具つて変身の宝具、フオー・サムワンス・クロウリー「己が栄光の為でなく」と伝説で有名な剣、アロン・ダイト「無毀なる湖光」しか知らないけど。もうひとつあるんだよね」

「はい。武器という概念や武器となりえる物を全て私の支配下に置く宝具、ナイト・オブ・オーナー「騎士は徒手にて死せず」です。相手の宝具も自分の武器に出来ます」

「へ、へえ……………」

一夏は実感した「ランスロットが敵じゃなくてよかった」と

するとランスロットは人の気配を感じ一夏にそれを伝えると霊体化してしまう

その後現れたのは鈴音だった

鈴音は一夏にスポーツドリンクとタオルを持って来てくれた。そして中学の昔なじみな話をしているうちに一夏が箒と同じ部屋と知ると鈴音は一夏と箒の部屋に押しかけて

「という訳で部屋変わって？」

遠慮無しに一夏とルームメイトの箒にそう言った

「ふざけるな！何故私がそのような事をしなくてはならない！」

と箒の怒声が部屋に響く。それもそのはずせっかく好きな相手と同じ部屋になったというのにどこの馬の骨ともわからない奴に譲りたくないという思いが箒の胸で燃えていた

「いやー、篠ノ之さんも男と同室なんていやでしょ？その辺あたしは平気だし変わってあげようかなと思ってね」

と余裕を持って言うが箒は我慢の限界を超えていた

「余計なお世話だ！！別に私は嫌とは思っていない！それにもし問題があっても部外者が口を挟んで欲しくはない！」

「だーいじょうぶ あたしも幼なじみだから」

「それは口を挟む理由にはならない！」

鈴音は余裕タツプリとあるが、箒は完全にキレている

「ね、一夏もあたしと一緒にの方がいいでしょ？」

「え？」

「ふざけるな！自分の部屋へ帰れ！さもなくば……………」

箒は竹刀を取り出して鈴に向けて振り下ろした

「ばっ、ばか！！」

一夏はそれを止めようとしたが間に合わず鈴音に直撃しそうになった。が、鈴音の腕には赤紫がベースカラーのISの腕が部分展開されていた

「今の生身の人間なら本気で危ないよ……………」

「……………」

箒は竹刀を引き、シュンとしてしまう

「ねえ、一夏約束覚えてる？」

「約束？」

「覚えてないの？」

一夏は少し考えこむとその内容を思いだし口にする

「あつ、あれの事が鈴の料理の腕が上達したら毎日酢豚を……………」

「そうそれ！！」

「…………おごつてくれるやつだろ？」

「…………はい？」

鈴音はポカンとしてしまう

「だから料理上手になつたらメシをごちそうしてくれるっていう約束だろ？一人暮らしの身にはありがたい……………」

バシン！！

一夏が言い終える直前に鈴音の平手打ちが一夏の顔面にヒットする

「ええ！？」

「最っ低！！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて男の風上にも置けないやつ！！犬に噛まれて死ね！！！」

「なつ、なんで怒ってんだよ？ちゃんと覚えてたろう」

「約束の意味が違うのよ、意味が！！」

「どんな意味があるんだよ説明してくれよ」

「説明って、そんな事言える訳無いでしょうが！じゃ、こうしまし
よう来週のクラス対抗戦そこで勝つたらひとつ言つことを聞かせら
れる！」

「おお、いいぜ俺が勝つたら説明してもらつからな」

「「うううううう……………」」

お互いは顔を近づけ合い睨み合う

「そっちこそ覚悟してなさいよ!!」

そう一夏に言つと鈴音は荷物を持って部屋から出ていってしまう

「一夏」

「ん、なんだよ箒?」

「馬に蹴られて死ね!」

「えっ!?!」

と女の気持ちかわからない一夏に箒からの強烈な、例えるならエミヤのガラドボルグ?を受けるよりも強力な言葉だった

そして対抗戦当日

アリーナの中央には白式を装着した一夏と中国の専用機を装着した鈴音がいた

士郎、アルトリア、凜、箒、セシリアは特別へ、千冬、真耶は教師のため観覧席ではなくアリーナのコンピュータールームにいた

「一夏いますぐ謝るんなら手加減のレベルを下げるけど、どうする?」

「手加減なんていらねえよ。真剣勝負だ。本気で来い!」

「なら容赦しないわよ。この甲龍で叩きのめしてあげるわ!」

鈴音のその言葉がアリーナに響く。そしてアナウンスの指示により二人の勝負が始まる

二人は試合開始と同時に飛翔し戦いを始める

鈴のIS甲龍は接近戦を主力とした機体

白式と同じタイプだ

鈴音は甲龍^{シェンロン}。そしてその武装の一つ双剣の双天牙月で一夏に襲いかかる

一夏は白式の唯一の武装、雪平で防御するが、甲龍のもう一つの武装、龍砲で白式を狙い打つ

一夏は千冬から教えてもらった技、^{イクニッション・ブースト}瞬時加速で反撃を狙う

そしてその瞬間が訪れた。甲龍のバリアを無効にし鈴音にダメージを与えようとしていた

そしてその瞬間

アリーナの遮断シールドを突き破り何者かが侵入してきのだ。さらにアリーナの観覧席に被害が出ぬようシャッターの全てが閉じられる。そしてアリーナの中央にはクレーターができたようになりその中から1つの影がうごめいた

「試合中止！織斑、鳳！ただちに退避しろ！！クソツ、音が出ていないということだ……………」

千冬はアナウンスで、一夏と鈴音を下げようとするが、アナウンスの通信回線が正常に機能していない

だがモニターを見ていた土郎達には落ちてきたのがなんなのか見えた。それがなになのかを

ISだ。フルスキンのISが防御シールドを突き抜け侵入してきたのだ

「デイル様！！」

「お呼びでしょうか？我が主よ」

フルスキンのISの侵入と同時にセシリアはサーヴァント・ランサ

ーのデイルムツド・オディナを呼び出したが

「誰え！？いったいどこから！？」

と突然現れたデイルムツドに驚く真耶

「あー、真耶。あとで説明してやるから今は黙っとけ」

「は、はい！」

千冬の一言で真耶は黙る

「主よご用は？」

「はい、ただ今アリーナに謎の侵入者が現れました。一夏さんがピンチです。すぐ助けに向かってくれますか？」

「ハッ！このデイルムツド・オディナが必ずや！」

デイルムツドは霊体化し、一夏と鈴音を助けに向かった

「シロウ！私もランサーと共に向かいます！」

「ああ、わかった頼むセイバー！！」

「はい！！」

セイバーは甲冑を身に纏うと風王結界をから放たれる剣技、ストライク・エアでシールドをこじ開けアリーナに突入する。凜のサーヴァント・アーチャーのエミヤが姿を現さない

「遠坂、アーチャーはいないのか？」

「ええ、聖杯戦争の資料を調べに行ってるから今は無理だわ」
「そうか。頼むセイバー！！」

士郎はそう声に出してセイバーに勝利を託した

そしてアリーナ内

その頃、一夏達はフルスキンのISに襲われていた。フルスキンのISはビーム兵器を使用し白式と甲龍にダメージを与えるため強烈な攻撃を繰り出す。猛攻としか言いようがない

「くっ！」

「一夏大丈夫！」

「ああ、なんとか……。それにしてもあのISかなり……。強い！」

一夏は歯を食いしばりフルスキンのISの攻撃を避ける

「これじゃやられる。ランス！頼む！！」

「ハッ！！」

一夏の指示に従い、黒甲冑を装備した一夏のサーヴァント・セイバーのランスロットはフルスキンのISの上空で姿を現しISの上に着地すると能力宝具、「騎士は徒手にて死せず」で敵ISの武装を全て己の宝具としてしようとするが

（騎士は徒手にて死せずが通じないだ！？）

なんとランスロットの宝具、「騎士は徒手にて死せず」を受け付けない。さらにフルスキンのISはランスロットを巨大な腕で殴り飛ばす

「ぐあ！」

「ランスー！」

一夏は白式のブーストを使いランスロットの後ろへ回りランスロットをキャッチする

「大丈夫かランス？」

「申し訳ない。マスター……」

「気にするなッて」

一夏はランスロットを下ろすと彼は一夏に気がついたことを話す

「マスターあいつは無人です。人ではありません」

「なんだッて！？本当かランス？」

「はい。私の「騎士は徒手にて死せず」を受け付けなかった。つまりアレは装甲や武装がコアと融合したISです。つまりは……」

するとランスロットは己の宝具を封印して解放する最強宝具、「無^アとする^{ロシ}湖光^{ナイト}」を抜き

「遠慮せず、斬れるということですよ……」

「そうか、だったら俺も力を貸すぜ」

「よろしいのですか？マスター」

「ああ、今回はお前に背中を預けるよ。頼むぞ湖の騎士……」
「ハッ……」

一夏とランスロットはお互いの背中預け合い
フルスキンのISに挑む

第7話・狂雷神（前書き）

今回はついに敵サーヴァントと原作本編から二人の英霊が！？

第7話・狂雷神

一夏、ランスロット、鳳鈴音の三人はアリーナのシールドを破壊し侵入してきたフルスキンのISと対峙していた
ランスロットの騎士はナイト・オブ・オーナーは徒手にて死せずが通用しなかったおかげで奴を無人のISと認識できた。そのため一夏達は遠慮せず攻撃することができる

「はあ!!」

フルスキンのISのバリアを無効にし切り掛かる一夏

「ふっ!!」

ランスロットは魔剣、アロン無毀なる湖光でISへ高いダメージを与える。
しかも一夏とランスロットのコンビネーションで圧倒的にISにダメージを与えている

鈴音も甲龍の射撃武装、龍砲を放つがISへのダメージは低くあの二人のようにダメージを与えることができない

(くっ、あのIS超強い……。それに途中から出てきたあの黒いの、仲間みただけで一夏とのコンビネーションがいい。一体何者なのよ……………)

鈴音は突然現れたランスロットに対しそう考えていた。だが、次の瞬間。彼女に無人ISの両腕に装備されたビーム兵器の照準が合わせられる

ISはエネルギーをチャージし鈴音を先に潰すことにした
そしてエネルギーがチャージされ放たれそうになった、その瞬間

「ぜああああ！……！」

雄叫びと共にガキン！という音がISの腕を弾き、鈴音への攻撃を逸らす

「待たせたな。一夏殿！……！」

その正体はランサーのデイルムツドだった

「サンキュ、ランサー」

一夏の言葉に頷くデイルムツド

「今だ騎士王！……！」

デイルムツドの声と共に太陽を背に、黄金の輝きを放つ約束された勝利の剣を構えたアルトリアがフルスキンのISへ向かい降下する

「約束された……！」

だがISは巨大な腕をアルトリアへ向け、先程鈴音を撃つためにチャージしたビームを発射しようとするが、ランスロットはISの巨大な腕の下にくぐり込みその両腕を斬り落とす

「今です、アーサー様！……！」

「すまないランスロット！……！」

そしてランスロットは約束された勝利の剣の剣撃が届かない射程の位置へ退避し、アルトリアがISとの剣撃を放てる範囲に入り込む

とその黄金の剣を振り下ろした

「……………勝利の剣！！！」
カリバー

その叫びと共に無人ISは黄金の輝きを放ちながら真つ二つに切り裂かれISは無残に倒れる

「終わったな」

コンピュータールームの千冬と呟きコーヒを啜る

「そうですね」

真耶は笑顔で千冬に返す。だがそれはつかの間の休息だ。コンピューターはなにかを察知する

ビービービー！！

アラームがコンピュータールーム全体になり響く

「なにごと！？」

真耶は画面に向かい合いキーボードを操作するとアリーナのシールドの上空に熱源反応と表情される

「熱源反応あり……。大きさ2m50cm!？」
「「「え!?!」」」

全員が真耶の言葉を信じぜぬいたが、その熱源は鈴音に状況説明していた一夏たちのいるアリーナのシールドを突き破りアリーナの中
央のクレーターに落ちる

「なんだ!？」

クレーターはアリーナいる全員がクレータを一斉に見る
すると

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

その熱源は巨大なハンマーを持ったそれは咆哮を上げる。アルトリ
ア、ランスロット、デイルムツドの三人は一夏と鈴音を庇うように
前に出る

「下がってください!サーヴァントです!」

「あの咆哮。おそらく奴はバーサーカー」

「以前の私と同じという訳か。マスター、鳳殿は早くお逃げくださ
い。ここは我々が……!!」

すると三人は各最強宝具を構える

「ふざけるなよランス」

「マスター?」

「言ったよな。今回は俺の背中はお前に預けるって。だから、最後
まで頼むぞサー・ランスロット!!」

一夏は雪片を構え言う。ランスロットはその言葉に一夏の覚悟を見た

「鈴、お前はとうする?怖いなら逃げてもいいんだぜ」

「冗談。あんたが戦うなら私も残るに決まってるじゃない」

鈴音は天双牙月を両手に構える

「そつか。じゃ行くぞ!!」

「「「「おう!!!」」」」

一夏、鈴音、アルトリア、ランスロット、デイルムツドの五人は2m50cmを超えるバーサーカーに挑む

「はぁぁぁあ!!!」

アルトリアは^{エクス・カリバー}約束された勝利の剣でバーサーカーに斬り掛かる
だがバーサーカーは巨大な腕で弾く

「ぜあ!!」

デイルムツドも^{ゲイ・ジャルグ}破魔の紅薔薇でバーサーカーを貫こうとするが巨大なハンマーで弾き返される

「チッ、あのバーサーカーただ者ではないぞ!!」

デイルムツドは着地し槍を再び構える
すると

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

バーサーカーは咆哮し宝具と思われるハンマーを地面にたたき付ける。大地を揺るがし、雷が地面を走る。サーヴァント達はジャンプし雷を回避する

「この雷にあの巨大な魔鎚……。まさかバーサーカーの真名は!？」

アルトリアはバーサーカーの真名を悟った。サーヴァント達は地面に着地する

「まさか奴の正体は、あの北欧神話に登場する戦いの神……。トールだともいうのか？」

そう、あのバーサーカーの正体は戦いの神、トール。ラグナロクでは同等の力を持つとされた神、ロキに捨てられた巨大な蛇、ヨルムンガンドと戦い相打ちとなり死した。つまりトールの宝具は雷神^{ニル}の魔鎚、雷を放つ強力な魔鎚だ

「なるほど、それなら奴の強さにも納得がいくが、完全な神が聖杯戦争に参加するだと？ そんな話聞いたことがない……。！」

「だが、ここでやらなくてはやられるぞ。魅惑の槍騎士よ」

「フツ、それもそうだな。行くぞバーサーカー！！」

「それはかつての名だ」

「そうだったな。行くぞ湖の騎士よ！！」

ランスロットとディルムッドは同時に走り出しバーサーカーに仕掛ける

その頃一夏と鈴音は

「鈴手伝ってくれ。俺と白式とのワン・オフ・アビリティー、零落白夜で落とす」

「その零落なんとかならあいつを倒せるのよね？」

「ああ」

「OK いいわよ。でなにすりゃいいの？」

「俺が合図したらあいつに向かって衝撃砲を撃ってくれ」

「いいけど、あんなのに撃つても意味ないかもよ？」

「いいんだよ。意味がなくても」

一夏はその白式との必殺技となりえる、零落白夜を発動しようとする

「そんじゃいくぜ!!」

一夏は体制を低くして攻撃の体制をとる。だが次の瞬間

「一夏!!」

アリーナに声が響き渡る。その声の主は箒だった。箒はISのカタパルトに立っていた

「男なら、男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする!!」

箒の思いの籠った一夏に対する言葉。だがその声にトールは振り向き、雷神の魔鎚^{ニル}を箒目掛け投げる

「しまった!ホウキ!!!」

アルトリアの声が響く。だが雷神の魔鎚^{ニル}は箒目掛け一直線で向かう。その場の全員が肝を冷やしたが

ガキン!

と雷神の魔鎚^{ニル}が弾かれる

箒の目の前には白い髪に白いリボンのポニーテール。さらには、メカメカしい剣を持った、一人の少女が立っていた。その正体はこちらの世界に士郎達を送り込んだサーヴァントだった。今回は素顔をさらしている

その姿はコンピュータールームの士郎や凧の目にも入る

「あいつは!」

「知っているのか？」

「ええ、こちらの世界に来る直前に戦ったサーヴァント。つまりこちらの世界に送り込んだ張本人!」

凧は千冬にそう説明する

（だけど、どういうこと？彼女が現れたって事はまた誰かがこっちの世界に？）

と凧は考えていた

するとサーヴァントは霊体化し消滅する
だがバーサーカーのトールは健在だ

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

トールは咆哮しデイルムツドに襲い掛かる

「なに!?!ぐあ!」

トールはデイルムツドの身体を巨大な腕で掴み動きを封じる

「ランサー!今助けに!」

アルトリアはデイルムツドを助けに向かうとした瞬間、トールは空いているもう片方の腕でアルトリアの左の細腕を握る

「ぐああああ!」

「アーサー様！今助けに、ぐあー！！」

ランスロットはアルトリアを助けに向かおうとしたがトールの巨大な足で蹴り飛ばされ壁に激突する

「ランスー！！ぐああ………」

アルトリアの叫びがこだまする

デイルムッドも巨大な腕に捕まれ、トールは力を強める

「ぐああ………！！！！」

デイルムッドの身体が軋み上げる

「デイル様……！！」

セシリアの声がコンピュータールームに響く

「ここまでなのか………？」

「主よ………。面目ない………」

アルトリアとデイルムッドは諦めかけた

次の瞬間

「貴様あ……。誰の許可を得てセイバーに手を挙げる……！！」

アリーナに轟く謎の声。するとアルトリアを掴むトールの腕に無数の剣や槍といった宝具という宝具が突き刺さりあまりの激痛にアルトリアを放すトール

「いま声……、まさか!？」

アルトリアは飛んできた武器の方角を見るとそこには黄金に輝く英霊がいた
さらに

「刺し穿つ死棘の槍!!!」

赤い槍がトールの腕を貫く。デイルムツドを掴んでいた腕はあまりの痛さにデイルムツドを放す。デイルムツドはなんとか足で着地する

「……………一体なにが……………起きたんだ？」

「おう、大丈夫かい色男？」

デイルムツドは声のする方を向くとそこには赤い槍を携えた青タイツのクランの狂犬と呼ばれる槍の英霊、クー・フリーンがいた

「よう」

黄金の英霊もアルトリアに元に降り立つ

「久しいなセイバー！」

その黄金の英霊とは古代メソポタミア文明の王の座に着き、あらゆる財を自らが所有する宝物庫に保管した英霊王

「ギルガメツシュ!!!」

だった

第8話・消えし英霊・怒る英雄王・現れし征服王

アルトリア達の目の前に現れたのは、第五次聖杯戦争でランサーとしてバゼット・フラガ・マクレミッツによって召喚されたクランの猛犬、クー・フリーン。もう一人は第四次聖杯戦争にて凜の父である遠坂家前頭首、遠坂時臣によって召喚された英霊王、ギルガメツシュだった

「ギルガメツシュ、それにランサー。なぜ貴方方がこちらの世界に？」

「言うまでもなかるう。それは我の貴様への愛の力だ」

ギルガメツシュは気障っぽくそう言うが、クー・フリーンが横槍を入れる

「違うだろうがタコ。なんか意味不明なサーヴァントが現れてな、そいつと戦ってるというの間にこっちに来てたんだよ」

クー・フリーンはギルガメツシュに変わって適切な答えを話す。アルトリアはそれに納得する

「そうか。ギルガメツシュ、ランサー頼みがある」

「あ？」

「ほお、貴様が俺に頼みがあるとはな、申してみよ」

とギルガメツシュは偉そうに答える

「いまから私、ランスロット、デイルムッドと共闘しバーサーカーを倒すのを手伝ってくれないか？英霊王、お前の鎖は神性が高いサ

「ヴァント程有効に活用するのだろ？」

「我が友、天の鎖^{エルキドゥ}は神に近い者ほど力を増す代物だ。だが奴は神なのかセイバー？」

「私の感が正しければ、奴の真名は雷神トール。北欧神話ラグナロクに出てくる神だ」

「なるほど……。よからうセイバー。いまは貴様と共に戦ってやる。それに貴様の頼みとあつては断るとうりがない」

「助かる」

ギルガメツシュは共闘に同じた

「ランサー貴方は？」

「いいぜ、つてかこの状況で俺だけのらねつてのは抵抗あんだろ？
ただどこれは貸しだぜ？」

「わかっています」

アルトリアがそう言うとき、フリーンはトールの方を向き槍を構える

「んじゃ、行くぜ！！」

猛犬のように吠えると彼はトールに矛先を向ける

ギルガメツシュも王の財宝を展開する^{ゲート・オブ・バビロン}

「さあ、貴様の力を見せてみよ！ 雑種！……！」

その頃コンピュータールームでは

「ギルガメツシュ！それにランサー！」

士郎は現れた二人の英霊に驚く

するとこちらの世界の聖杯戦争を調べに向かっていたアーチャーの
エミヤが帰還する。さらにはエミヤの隣には銀髪のシスター姿の
少女がいた

「ご機嫌よう。皆様」

「「カレン！？」」

そこには現在言峰教会を拠点に言峰綺礼亡き後監督役を引き継いで
いる少女、カレン・オルテンシアがいた

「知り合いか？」

現れた少女の事を千冬は士郎と凜に聞く

「まあね。ところでカレンなんであなたがここに？ギルガメツシュ
とランサーが出てきた時点であなたがいると思ってたけど……」

「ええ、私もビックリです。あなた方がまだピンピンとしているな
んて」

「相変わらずの毒舌っぷりね……」

凜の口元が引き攣っている

「でもどうしてカレンがこっちに？」

「恐らく貴方達と同じ。妙なサーヴァントとの戦闘の最中こちらに
送り込まれまして、アーチャーと出会わなければ今頃大変な事にな
っていたでしょう」

「そうか」

カレンが語る中、士郎達は黙って話を聞いていた

「それよりも……………」

カレンはモニターに移るバーサーカーのツールを凝視した

「あれはサーヴァント。しかもクラスはバーサーカー。やつかいそうですね。内の犬と成金加わった程度でどこまでもつでしようか？」

「そうね。アーチャー、いまからセイバー達の援護に向かってくれる？」

凜は契約サーヴァントのアーチャーのエミヤに指示をする

「わかった」

エミヤはそう言つと霊体化しアリーナへ入り込む

「はぁあああああ！！！！」

白式で降下しつつツールに剣撃を入れようとする一夏。だがツールは攻撃の範囲に入ると巨大な腕を振り回し妨害してくる

「くっ、これじゃあいつにダメージを与えられない……………」

奥歯を噛み締める一夏。そんな一夏に鈴音が近づく

「どうする一夏？あれじゃあんたの策通用しないわよ」
「わかってる。しかたないランスロット」

ランスロットはマスターである一夏の声に振り返る

「これから俺と鈴で大技を仕掛ける！隙を作ってくれ！！」

一夏の言葉を聞いたランスロットは頷き、再び無毀なる湖光アロンを握りしめ戦場へ向かう

デイルムッドは必滅ゲイ・ボウの黄薔薇で癒せぬ傷を付け

クー・フリーンは脚を使いツールを翻弄

ギルガメッシュは自慢の宝物から剣と槍の雨を振らせる

アルトリアとランスロットは各最強宝具エクス・カリバー、約束された勝利のと剣無アロ毀なる湖光ナイトで小さな隙ができる度そこに斬撃を繰り出す

そして一夏と鈴音の反撃の隙ができる

「鈴！いまだ！！」

「OK！！！！」

鈴音は甲龍の衝撃砲、龍砲にエネルギーをチャージしそれを放とうとすると一夏がツールとの間に割り込む

「ちよつ、あんたときなさいよ！」

「いいから撃て！」

「あーもう、どうなっても知らないわよ！！」

凝縮したエネルギーをツールへ放つ、一夏を巻き添いに。だがそれを受けた一夏のIS、白式のエネルギーが上がって行き、白式のディスプレイには『零落白夜使用可能エネルギー転換率90%オーバー』と表示され、雪片の刀身は伸び、白式はオーラを纏う

「うおおおおおおおおお！！！」

一夏はその冗談のまま、トールに向かい突進する

だが、トールはその危機を察知し一夏に右拳を振り上げるが、ジャラジャラ！とトールの右腕に鎖が巻き付く。ギルガメツシュの天^{エル}の鎖だ

「小僧！止めは貴様にくれてやる！」

とギルガメツシュは叫ぶ。一夏は「サンキュ」と返し雪片の刀身はトールの右肩から左脇下に向け、斬撃を受ける。すると、トールは残っている左腕で一夏を殴りつけ地面に落とされ気絶してしまう

「ぐあー！！」

「「「一夏！！！！」」」

箒、セシリア、鈴音の声がこだまする

トールは地面にたたき付けた一夏を踏み付けようと足を上げるしかし、そのような事があの英雄王の前で許されるはずはない足を上げた直後、トールの身体を天^{エル}の鎖^{キドゥ}が縛り上げ宙に浮かす

「貴様…………。言っただであらう。小僧の一撃が止めだと…………。ならば、その場でまま死せぬか雑種！！！」

ギルガメツシュが右手を掲げると、トールを囲むように王^{ゲート・オブ・バビロン}の財宝の財が牙を向く

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

トールは鎖の縛りから抜け出そうともがくが神性が高い程能力を増す天の鎖には意味のないことだ。ギルガメツシュはそのまま右腕を下ろすとあらゆる財がトール目掛け雨のよう降り注ぐ

トールは逃げる事が出来ずのまま全ての刃を受け霧状となり、消滅した

これにてサーヴァント・バーサーカーのトールが消滅した

その後一夏は保健室へ送られ、カレン、ギルガメツシュ、クー・フリンはこの世界の話聞くことになる

先程の戦闘でトールにたたき付けられた一夏はダメージが大きいせいで眠っていた。鈴音はその隣で小さな椅子に腰掛けている。眠っている間一夏は夢を見た。二年前の、鈴音が帰国する前の頃の

「あのね一夏。私の料理の腕が上達したら。私の酢豚毎日食べてくれる？」

「ああ、わかった。約束するよ」

「約束よ」

そしてその二人はお互いの小指を出し合う

そこで途切れ一夏は目を覚ます

一夏が眠っている横で鈴音は一夏顔をまじまじと見つめ一夏の唇にキスをしようとしたが一夏が目を覚ましてしまう

鈴音は目覚めた一夏に驚き慌てて離れる
横になっていた一夏は身体を起こし鈴の方を見た

「なにやってんだ、お前？」

「べべべ、別になんでもないわよ！」

「なに焦ってんだよ」

「焦ってないわよ……。勝手な事言わないでよバカあ……」

鈴音は頬を赤くしながら言う

「あのISはどうした？」

「動かなくなっただわ。心配しなくても怪我人はあんた以外いないから」

「そうか……」

一夏は窓から夕日が差し込む外を見る

「なあ、思い出したよあの約束の事」

「へ？」

「正確には「私の料理の腕が上達したら。私の酢豚毎日食べてくれる？」じゃなかったか？それって日本でいう毎日私のみそ汁を食べてくれるとかそういう意味……」

「ちがわない、ちがわない！ほら料理つてだれかに食べてもらえば上達するじゃない！そういう意味よ！」

鈴音は顔を真っ赤にしにしながら否定する。本当は一夏の言うことはあっているが恥ずかしさのあまり否定してしまった

「お前の酢豚も食ってみたいけど鈴の親父さんの料理うまいもんな。また食べてみたいぜ」

鈴音は少し悲しそうな表情になる

「もう、お店はしないんだ」

「え、なんで？」

「あたしの両親離婚しちゃったから国に帰ることになったのもそのせいなんだよね」

「なあ、鈴今度どこから遊びにいくか？」

鈴音の表情がパアと明るくなる

「それってデー……………」

プシャ

自動ドアが開く音。その扉から入ってきたのは

「一夏さん、わたくしが看護に来て、えっ…？」

ゆらゆらと胸踊らせながら入ってくるセシリア。だが鈴音がいることに気づくと表情が凍ってしまう

「あら？」

そしてセシリアは鈴音にずいずいと前に進み鈴に前屈みになる。夕日が差し込んで影ができていたので怖く見えたのは一夏だけかもしれない

「どうして貴女が、一夏さんが起きるまで抜け駆けはなしと決めた

でしょ！」

再びドアが開く。そこには箒がいた

「そういうお前も私に隠れて抜け駆けしようとしていたな？」

「そつ、それは……………」

「くうく、出て行ってよ、一夏はあたしの幼なじみだから！」

「それだと私も！」

「だいたい二組の貴女が！」

その後三人に喧嘩をランスロットとディルムッドが鎮静化させたのは言うまでもない

学園の研究室。職員のみが入る事のできるトップシークレットの部屋
現在そこでは襲撃してきたISの解析を千冬と真耶は行っていた

「やはり無人機ですね。登録されていないコアでした」

「そうか……………」

「ISのコアは世界に467しかありませんでもこのISにはそれ
のどれでもないコアが使用されていました」

「はやり……………」

「織斑先生なにか心当たりでも？」

「いや、今のところは……………ないな……………」

ISの開発者なら作るとは可能かもしれないと千冬は思った。ま
さかあいつがそんなことをするとも思えなかった

「真耶、今日実際見たあの戦いが聖杯戦争だ」

千冬は真耶に聖杯戦争のルールを話していた

「はい、まさかあんな戦いがいままでどこかで行われいたんですね。正直驚きました……………」

真耶は初めて見た英霊と英霊の戦いに肝を冷やしていた

「そうか、これから先。一夏達を守ってやれるのは私達だけだ。手伝ってくれるか、真耶？」

「はい。織斑くんもオルコットさんも衛宮くんも遠坂さんも大事な私の生徒ですから」

「そうか。助かる」

「いえ」

と千冬と真耶はこれから先、聖杯戦争を見守る立場の人間として行くことを決心した

その日の夜、鈴音は今自分の部屋にでベットに転がっていた

「一夏覚えててくれてたんだ。ちょっとうれしいかも？」

と頬を赤らめる鈴音

「やっぱり私は一夏が好き。何があるつと一夏と付き合っ！そして結婚してそれから……………」

鈴音は自分の未来予想図を想像し、真っ赤になると頭から恥ずかしさのあまり爆発してしまう
そして鈴音は立ち上がりこう叫んだ

「よし！絶対一夏は私のものにする！！」

鈴音は一夏への思いをさらに強めた。すると鈴音は右手に痛みを感じた

「いてっ、なに？」

鈴音はゆっくりその痛んだ部分を見てみると、そこには牛のような入れ墨が出現した。令呪だ

「これって、一夏の言ってた令呪……………？」

鈴音はそう呟く

すると、鈴音の部屋の明かりが消え、空いているスペースにサーヴァント召喚の魔法陣が現れ、強い風を巻き起こす

「ちよっ！なんなのこれ！？」

鈴音は飛ばされないように壁に捕まる

しばらくすると風は止み、魔法陣の中央には赤髭と赤髪が繋がり大きなマントを背負った大男が姿を現し、大男は鈴音にこう問いた

「問おう、貴様が余を招きしマスターか？」

第9話・聖杯戦争

「問おう、貴様が余を招きしマスターか？」

大男は鈴音にそう問いた
だが鈴音は腰を抜かしている

「ななななななななななな！！！なんなのよアンタ！！！」

いきなり現れた大男にパニックになっている
するとサーヴァントの気配を察知したアルトリアとディルムッドが
鈴音の部屋に突入する

「リンイン！！大丈夫ですか！？お前は！？」

「なんと……………」

アルトリアとディルムッドはそこにいる大男に見覚えがある。前回の第四次聖杯戦争でライダーのクラスで召喚され、今度もライダーのクラスで召喚されたマケドニアの征服王。その名もイスカンダル
イスカンダルも突入してきた二人を見て嬉しそうに声をだす

「おお！セイバー！それにランサー！久しいな！！」

「ライダー。なぜ貴様がここに？」

「ん？決まっておろう。余は今回の聖杯戦争で再びライダーのクラスで現界した。それだけだ！！」

イスカンダルは胸を張って言う

「てことは、あんた私のサーヴァントって事？」

腰を抜かしていた鈴音が声を出す

「うむ、そういうことだ」

「じゃ、私がマスターってこと？」

「うむ」

その返事を聞くと鈴音の表情が明るくなる

（これで一夏と一緒に！セシリアと一緒にのはなんか嫌だけど、一夏を守る力を手に入れた！！）

と内心ではそう思いつつ鈴音は立ち上がる

「じゃ、契約ね。私は鳳鈴音よろしくねライダー」

「うむ、余は征服王イスカンドルだ！よろしくな小娘」

「小娘！？」

イスカンドルの小娘という言葉にガーンとする鈴音
すると凜が現れる

「まさか鳳さんまでマスターになるとはね」

「リン。どうしたんですか？」

「実はね今朝アーチャーにこの世界の聖杯世界を調べさせてたんだけど、それに纏わる資料があったからIS学園にいるマスターとサーヴァント、織斑先生を集めて話したいのよ。それに鳳さんがマスターになったのなら同行してもらわないといけない。食堂に集合だから鳳さんとライダー連れて先行ってて」
「わかりました」

アルトリアが返事をすると思は他のメンバーを集めに行く

「リンイン！征服王！」

アルトリアは二人を呼ぶ

「え？」

「ん？」

「これからこの聖杯戦争の仕組みを凛が教えるそうです。一緒に食堂に来て下さい」

とアルトリアが言うと

「なに！？食堂とな！！そういえば余は先程から空腹でなちようどいい！食事にしよう！！」

「ライダー貴様言う奴は……………」

イスカンドルのその言葉にアルトリアは呆れてしまう

その後、鈴音、イスカンドル、アルトリア、ディルムッドはIS学園一年食堂へ向かった

一年食堂には数人の影がある

セイバーことアルトリア・ペンドラゴンのマスター、衛宮士郎。アーチャーことギルガメッシュとランサーことクー・フリーンのマスター、カレン・オルテンシア。セイバーことサー・ランスロットのマスター、織斑一夏。ランサーことディルムッド・オディナのマスター、セシリア・オルコット。そして先程契約し終えたライダーことイスカンドルのマスター、鳳鈴音の十一人が席に着いていた。た

だしギルガメツシュだけ自らの宝物であるいかにも高そうな椅子に、しかも偉そうに座っている

しばらくすると凜と千冬がやって来た

凜は薄く黒い本を持っている

「揃ってるな」

千冬は全員揃っている事を確認する。そして鈴音の姿が目に入とため息をつく

「まさか鳳までマスターになるとはな」

「すみません……………」

鈴音は軽く頭を下げる

「まあ、いい。遠坂、始めろ」

「はい。今回集まってもらったのには理由は、先日から調べていた聖杯戦争の仕組みがわかったわ。そのために今日は集まってもらったの。そんじゃ説明するわね」

凜は持っていた黒い本を開き、メガネをかけると本に載っている文章を読み出す

「聖杯戦争とは、願望を叶えるために聖杯を争奪する魔術師達の戦い。ルールは初期の段階でマスターというクラスのサーヴァントが二体召喚される。マスターとそのマスターはセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカー、ファイター、ウォリアー、サモナー、パラディン、ルーラーのクラスをランダムに授かり、マスターのサーヴァントは七つの令呪と魔術刻印を持っている。さらに魔術刻印のない者に与えられた魔術刻印を

移植しサーヴァントを召喚させる事ができる。召喚されるサーヴァントは英雄、悪魔、天使、殺戮者、神々から各クラスに見合う者が召喚される。十クラスから七クラスになるように召喚され、サーヴァントはマスターのサーヴァントの配下となり2つのチームを作る。ただし、同じクラスのサーヴァントが召喚される可能性もある。そして生き残ったチームに聖杯が与えられる。だそうよ」

凜が説明は本の内容をだいたいに分けて話す

「つまり、この戦いの中核を担うのはそのマスターのサーヴァントということになるのか」

凜の説明を理解する千冬

「ええ、そして仲間のサーヴァントを従えている令呪には色があってその色で敵がわかるみたい」

凜がそう言つと一夏、セシリア、鈴音は自らの手に刻まれた令呪を見る

「俺のは赤」

「わたくしも赤ですわ」

「私も赤」

三人共が同じ色の令呪を宿している

「三人とも仲間ってこと。他にもマスター生前に得たスキルと聖杯から固有能力与えられるみたい。それにさっきのバーサーカーが味方だとしても、明らかに攻撃の意図があつて襲つて来たんだしあれはしかたないわね」

「つまり、あのいままでセイバーだと思っていたサーヴァントはマスターで俺達はこちらに飛ばされたのか？遠坂」

「そういう事になるわね。とりあえずこれで聖杯戦争のルールはわかった訳だし。今日はこれで解散にしませんか？織斑先生」

凜は首を捻り千冬の方に顔を向ける

「そうだな。それでは各自解散！明日の授業に備え予習復習を怠るな以上だ！！」

すると一夏や士郎達は各自の部屋に戻ろうとするが千冬がカレンを引き止める

「オルテンシア」

「はい？」

「お前はこれからどうするつもりだ？」

「私は別にやりたい事もないので、まずはここから近いマンシヨンでも借りようかと」

「そうか。ならお前には明日から保健員として保健室にくる生徒の世話をしてほしいのだが、すでに許可は出ている」

「わかりました。それでは、明日より保健員として働かせ頂きます」
「頼む」

カレンは一礼すると、ギルガメッシュとクー・フリーンと共に今日だけ貸し与えられた宿直室へ向かった

それから数日後

「お引越です」

「はい？」

突然の真耶の訪問

「部屋の調整ができました。ですから篠ノ之さんは別室に移動です」

と真耶は笑顔で言う

「まっ、待ってください！それは今すぐでなければいけないのですか？」

箒が慌て反論する

「それはまあ、そうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活するのは、篠ノ之さんもくつろげないでしょ？」

真耶は箒の気を使ってそう言う。箒はせっかく一夏と同じ部屋になれたので出ていくのは嫌なのだ

「いや、私は……」

「別に箒がいなくてもちゃんと起きれるし歯も磨くぞ」

その言葉に箒は力チンときた

「先生いますぐ部屋を移動します！！」

「は、はい……！」

箒は怒鳴って言いっ飛ばす。一夏は箒を止めようとする

「お、おい箒……」
「ふんっ！」

箒は荷物をまとめて真耶と一緒にいつてしまった

「なんなんだよいったい……？な、ランスロット？」
「マスター……。もう少し女の子の気持ちを考えて上げてくださ
い」
「ん？」

ランスロットは呆れていた
それから数時間後

コンコンとノック音が一夏の部屋に響く
「はい」

一夏は扉を開くとそこにいたのは、先ほど部屋を出ていった箒だった
「どうしたんだ忘れ物か？」

「話がある……」
「なんだよ改まって……」
「来月の学年別個人トーナメントだが……。わっ、私が優勝した
ら……。っ、付き合ってもらおう！！」

箒の決死の告白だ。だがこれがいつの間にか「優勝したら一夏と付き合える」として噂になるのだった

第が別室になった次の日

「今日はなんと転校生を紹介します」

真耶が教卓の前に立ち言う

「今日から皆さんと一緒に勉強する。シャルル・デュノア君とラウラ・ボーデヴィツヒさんです。皆さん仲良くしてあげてください」

真耶の隣には銀髪の小柄な少女とかわいらしい金髪の

「男?!」

が並んで立っている。そしてこれがこのIS学園を混沌の渦へ巻き込む事になるとは土郎、アルトリア、凜、エミヤは知るよしもなかった

第10話・転校生の右手（前書き）

前話の聖杯戦争の召喚サーヴァントを四体増やしました
これでISの世界の聖杯戦争では8VS8となります
お楽しみに

第10話・転校生の右手

「では自己紹介をお願いします」
「はい」

真耶に金髪の少年は返事をし自己紹介を始める

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さんよろしくお願いします」

シャルルが自己紹介を終えるのと同時に

「「「きやあああああああああ!!!」」」

「男子!!!」

「三人目の!」

「しかもうちのクラスに!!!」

他の女子達が感激のあまり騒ぎはじめる

「あー、もう騒ぐなうっとうしい」

「皆さんもう一人自己紹介が残っているので…静かに………」

生徒達は静かになる

「ラウラ。自己紹介をしろ」
「はい。教官」

ラウラは敬礼を千冬にして言う。ラウラな生徒達の方を向く

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ！」

教室が静まる

「あの…他には…」

「以上だ！」

自己紹介を終えたラウラ一夏を鋭い目つきで睨み、数歩き一夏の前
にでる

「貴様が……」

ラウラは腕を高く上げ、振り下ろし

パン！！

と一夏の頬を叩く

「私は認めない。お前があの人の子であるなど、認めるものか！！」

ラウラはそう吐き捨て元の位置に戻る。一夏はそれを頬を抑え啞然
と見てるだけだった

「HRは以上だ。各自すぐに着替えて第二グラウンドに集合！今回は
衛宮、ペンドラゴン、遠坂も今日はグラウンドへ来い。以上、解散！
！」

生徒達は千冬の指示に従い行動する

「それと衛宮、織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろ」

「は、はい……！」

一夏は立ち上がりシャルルの元へと歩みよる

「織斑くんだよな。初めまして僕は……」

シャルルは一夏に手を差し出すと一夏は強引に掴みシャルルを引っ張っていく。士郎もその後を追う

「あの織斑くん、衛宮くん。女子は教室だけど……？」

「男子はアリーナの空いてる更衣室での着替えだ。トイレもかなり離れてるから早めに慣れてくれよ」

「う……うん……」

と更衣室へ向かう廊下の会話だった。三人が更衣室へ向かう最中ある試練が訪れた

「いたあああああ……！」

「転校生発見……！」

これである……

「げっ、見つかった……！」

このIS学園ではかなり早く情報が回る。つまり今女生徒達が集団でやって来たのだ

さらに女生徒達はギルガメッシュゲート・オフ・バビロンの王の財宝から宝物を連続発射するかのごとく続々と増えていく

「見て見て……織斑くんと衛宮くんも一緒……！」

「ああ、織斑くんの黒や衛宮くんの橙にもいいけど金髪もいいわね
！！」

「しかも織斑くんと手繋いでる！！」

「日本に生まれて良かった！お母さんありがとう！今年の母の日は
河原の花以外のをあげるね！！」

向こうは勝手に盛り上がっていた。一夏や士郎の気もしらず

「どうするの織斑くん、衛宮くん？」

「決まってるだろ……………」

「もちろん」

シャルルの問いをすぐ答える一夏と士郎

すると一夏とは足を捻り全力で女生徒達から

「逃げろ！！！！」

士郎と一夏はシャルルの手を引き全力で逃げた

「うおおおおおおおおおお！！！！」

と雄叫びを上げシャルルは宙に浮きながら一夏と士郎は全力走った

「ああ！逃げた！」

「もの共出会い出会い！！」

女子は全力で走り、一夏達を追うが三人はなんとか女子達を振り切ることに成功した

「「ぜえ……はあ……ぜえ……はあ……」」

女子達を撒いて更衣室に着いた一夏、士郎、シャルルだったが、大きな被害を一夏と士郎にもたらした。それは息切れというものすごくつらい状況である

「だ、大丈夫？二人とも？」

息切れする二人を見て心配になり聞くシャルル

「ぜえ…大丈夫」

「心配いら……ない……はあ……」

どう見ても大丈夫には見えない

「とりあえず着替えよう。遅れると千冬姉になにされるか……」

そっぴいつつ一夏はロッカーを開ける。士郎はベンチで横になってしまう

「あれ、衛宮くんは着替えないの？」

「ああ、俺はISの事を雑学で……学ぶ為に来たから……こういう時間に出るのはほとんどないんだ……」

士郎は息切れというつらい状況のなかつかえつかえだがシャルルに話す

「ふううん」

シャルルは納得する。すると一夏はシャルルの右手の甲に刻まれたあるものが目に飛び込む。風車のように刻まれた赤い令呪だ

「シャルルそれ……」

一夏はシャルルの令呪を指差す

「ん？あこれ、これね数日前に目が覚めると浮かんでたんだ。なんだろうこれ？」

「そ、そうなのか？」

シャルルはそれが令呪だという事には気づいていないようだ。一夏は士郎にシャルルに気づかれないよう相談し、凜に報告することにした

その後、着替えを始めるとシャルルがフランスで有名なＩＳの企業の子供だという事を一夏と士郎は知り、着替えが終え第二グラントへ向った

そしてグラントで一夏が真耶にラッキースケベを発動し、セシリアと鈴音に抹殺されかけたが真耶に助けてもらったりと騒ぎが起きのだ

グラントの横で見学している士郎、アルトリア凜は一夏が大変な目にあつた後、凜にシャルルの手に令呪が刻まれている事を話す

「え、デユノアさんの手に令呪が？」

「ああ、赤かったけどサーヴァントの気配もなかった。多分なにも知らないんだと思う」

「そう、やっぱりね」

「やっぱり？」

凜の言い方はまるでシャルルが令呪を宿している事を知っているかのようであった

「あの本に載ってたのよ。聖杯は聖杯戦争に参加する前にマスターのサーヴァントの令呪を一定の人数に刻ませ、その中から先にマスターのサーヴァントを召喚した者に聖杯戦争参加資格を与えるって簡単に言えば、今の彼女はバーサーカーがいなくなったイリヤやアーチャーのいなくなった時の私と一緒にすることよ」

凜はアーチャーが見つけたした本に載っていた話さなかった部分を適当に話す

「つまり、彼ははぐれサーヴァントと契約できるということですか？」

「そう、綺礼がバゼットからランサーを奪ったように、お父様からギルガメッシュを奪ったようにね……。お父様……」

凜の表情が暗くなる

自分が尊敬していた遠坂時臣が自分の兄弟子である当時同盟関係にあった言峰綺礼によって殺され時臣が綺礼に渡したアゾット剣、自らの父の心臓を貫いた刃をいままで自分が大丈夫に持っていた事を思い出していたのだ

だが、士郎が綺礼との一騎打ち際に綺礼の胸を貫いたと言うのも事実である

「とにかく、彼からは目を離さない方が良さそうね。千冬さんには私から言っておくから、一夏くんやカレン、オルコットさん、鳳さんに伝えておいて」

「わかった」

「はい」

士郎とアルトリアは返事を返す

後にシャルルは最強の英霊のマスターになることはまだ誰も知らない

その頃一年の寮長室。ランスロット、イスカンダル、デイルムッド、クー・フリーン達は……

「まさか、お前がまた召喚されるとはな征服王。5」

「余もちゃんとした自我をもった貴様と話せるのを心から待っていたぞお。6」

「ともあれ、貴様が俺達と仲間であるなら、以前のようなことはないだろ。7」

「四回目の聖杯戦争でなにがあったか俺は知らんが仲良くやってこうや。8な」

ランスロット、イスカンダル、デイルムッド、クー・フリーンの順で言う

しかも四人ともこの世界にあった服装でいる

ランスロットは黒いTシャツ

イスカンダルは世界地図が胸に描かれたTシャツにバカデカイズボン

デイルムッドはタートルネック

クー・フリーンはアロハシャツだ

すると

「……ダウト！……！」

ダウトしていた

ランスロット、イスカンドル、デイルムツドの三人は声を揃えクー・フリーンを差す。中央には二十枚以上で山積みになっているトランプがあった

「てか、また俺かよ!？」

「しかたなかるう。だって余の札には8のカードが四枚揃っておるからな」

そう言って先程カードで負けたクー・フリーンが買ってきたコーヒ―缶に口をつける

「じゃー！なんでお前らはわかつたんだよ!!！」

「騎士の勘だ!!！」

「んなトコで騎士の勘働かせんな!!！」

とマスター達が授業中はそれぞれ好きに時間を満喫しているサーヴァント達だった

第11話・二人の金髪

数日後、ISの授業、千冬の指示で今回は特別授業は無しになりアリーナで一夏達は自習をしていた

もちろん士郎、アルトリア、凜は教室

そして一夏は……

「こうズバー！とやってからガキン！ドカン！という感じだ！！」
「何となくわかるでしょ？感覚よ感覚。はぁ！？なんでわかんないのよバカぁ！」

「防御のときは右半身を斜め上前方に5度！回避のときは後方へ20度ですわ！」

箒、セシリア、鈴に理論指導を受けていた。ちなみに上から箒、鈴、セシリアだ。だが一夏は

「率直に言うが。全然わからん！！」

「何故わからん！」

「ちゃんと聞きなさいよ！ちゃんと！」

「もい一回説明して差し上げますわ。つまり斜め上前方に……」

「はぁ……」

一夏は「そういう理論指導がよくわからん」と言いたかったがため息だけで済ませた。するとシャルルが寄ってくる

「一夏」

「ん？」

「ちょっと相手してくれる？白式と戦ってみたいから。いい？」

シャルルからの助け船

「わかった。というわけだからまた後でな」

一夏は逃げ、もといシャルルとの模擬戦のため三人から離れたシャルルのIS、フランスの第二世代型IS、ラファール・リヴァイブ・カスタム？との戦い始まる。結果はシャルルの勝ち。一夏の敗因は白式の固有武装が雪片しかなかったから、つまり長距離からの攻撃には対処できず、ラファールの連続射撃を受けたせいで白式のエネルギーが尽きたため。そして一夏はイコライザが無い白式が射撃戦の時のことを踏まえ、シャルルからライフルを借り射撃の練習をした。シャルルいわく普通は他のISの装備は使えないが所有者がアンロックした登録ISの武装は全員使えるらしい
結果はなかなかのものだった

射撃の練習を終えると周りの女子達が騒ぎはじめる。カタパルトにいるISの事だったので一夏達もそっちを見ると、そこには漆黒のISドイツの第三世代型、シュバルツァ・レーゲンを見に纏ったラウラがいた。ラウラは一夏を睨みつける

「織斑一夏」

「なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話しは早い、私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様に無くとも私にはある」

「いまでもなくてもいいだろ。もうすぐクラスリーグマッチなんだからその時で」

「ならば……………」

ラウラはレールキャノンを一夏へ向ける

『その生徒！何をしている！！』

とアナウンスがアリーナに響く

「チツ、命拾いしたな」

ラウラはそう吐き捨てると去っていく

「一夏どついう事だ」

「あの方とあなたの間になにがありましたの？」

箒とセシリアは問うが

「いや、なにもない。と思う……………」

としか言えなかった

騒ぎがあつた日の放課後一夏とシャルルはISの特訓を終え、着替えるため更衣室にいた

「じゃ僕は先に帰るね」

シャルルは一夏に言う

「え？ここでシャワー浴びてかないのか？お前いつもそつだよな」

「い、いや！僕は……………！」

一夏はそう言つと立ち上がりシャルルの肩を寄せる

「そう釣れないこと言っとなって」

するとシャルルは頬を赤くし

「うあああああああ!!」

シュルルは一夏を振り払いまとめてベンチに置いてあった荷物を持ち、悲鳴をあげながら逃げてしまう

（バカバカ!!一夏のバカ!!!!）

シャルルは心の中でそう叫び部屋まで疾走したが

ドン!

と途中誰かとぶつかり持っていた衣類を散らかし尻餅を付いてしまう

「いたた。あ、すみません……………」

シャルルはぶつかった人に謝ろうとするが

「貴様、誰にぶつかっているのかわかっているのか?」

その人とは赤い瞳に黒い服しかもこのIS学園では一夏と士郎以外に存在するはずのない男性

その名は、ギルガメツシュ

「まあ、いい許す。さあ、立て」

ギルガメツシュは手を差しのべるでもなくシャルルに言う

「は、はあ……………」

返事をすると思ひ散った服を拾い立ち上がり、英雄王の方を向く

「あの、すみません。お怪我はありませんか？」

「無い。よかったな。我がここでかすり傷一つ付けられたのならば、貴様死んでいたぞ？」

シャルルはギルガメツシュの言葉に振るいあがる

ギルガメツシュは微笑むとシャルルの横を無言で歩く

「あ、あのお名前を！？」

シャルルは振り返り英雄王の名を訪ねようと振り返るが

「あれ……………」

ギルガメツシュの姿はもうなかった

シャルルはその疑問を持ちつつ部屋に戻った

着替えを終えた一夏は帰り道である事を考えていた。ラウラ・ボーデヴィツヒのことだ。ラウラについてなにか思い当たるふしを潰していくと軍人、ドイツこの二つのキーワードが浮かび上がったそれは数年前ISの第二回モンドグロッソの世界大会、決勝戦の当日自分が誘拐された。しかもそれを助けに来たのは決勝戦を放棄して駆け付けた千冬だった。決勝戦は千冬の不戦敗、一夏の監禁場所

を提供してくれたドイツ軍に借りを返すため一年と少しの間ドイツ軍のIS部隊の教官をしていたという訳だ

（全て俺のふがいなさのせい……。情けない弟だよな。いつまでも千冬姉に守られてちゃだめだよな。よし！今度からは俺が千冬姉を守る番だ）

一夏はそう決意をした

「ただいまー」

一夏が部屋に戻るとシャワールームからシャワーの音が流れる

「シャルルはシャワーか。そういえばボディーソープ切れてたよな」

一夏は棚から新しいボディーソープを取りシャワールームに繋がる洗面所の扉を開ける

「シャルルー。ボディーソープ切れてただから変えの……」

一夏が言い終える前にシャワールーム扉も開く。次の瞬間

「「あ……………」」

沈黙が続く。シャルルの体つきはどうみても女性のものだった。だがすぐに気を取り戻したシャルルは赤面しシャワールームの影に隠れる

「これボディーソープ……………」

「う、うん……………」

シャルルは隠れながら一夏からボーディーソープを受け取り一夏は着替えベットに座った
シャルルもジャージに着替えて背を向け合うようにベットに座る
すると

「お茶でも入れるか」

一夏は立ち上がり茶を入れようとする

自分とシャルルの茶を入れた一夏はシャルルに湯呑みを渡そうとするが

「はい」

「あ、ありがとう。あつ！」

シャルルは一夏の持っている湯呑みに手を伸ばしたらシャルルは落としてそうになり一夏はそれを掴もうとすると中身がこぼれ一夏の手
に掛かる

「あつち！あつ！」

「ごめん！」

一夏は急いで手を冷やすため水に手を付ける。シャルルはそれに駆け寄る

「ごめんね僕のせいで、ちょっと見せて。あつ、赤くなってる、ほんとにごめん」

シャルルは一夏の火傷を見ようとする

「いやたいしたことはない。それよりその当たっているんだが……」

シャルルの胸が一夏の腕に当たっている

「ハッ！」

シャルルはサッと一夏から離れ胸を隠すようにてを前にだすし一夏の方を向く

「一夏のエッチ……」

「なんでだよ！」

と一夏はシャルルにツツコミを入れた

シャルルは話し出す自分が何故男の格好までしてIS学園に入ったのかを自分がデュノア社の社長の愛人の娘で母の死後デュノアに引き取られた事。デュノア社が経営危機に陥りシャルルをIS学園に入学させ一夏に近ずいたこと。すると一夏は立ち上がりシャルルの肩を掴む

「お前はそれでいいのか」

「え？」

「お前はそれでいいのか。いやいいはずないだろ！親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。けどだからといってなにおしてもいいなんてそんな馬鹿な事はない！！」

「一夏……」

「俺と千冬も親に捨てられた。いまさら会いたいとも思わない。お前はこのあとどうするんだ？」

「どうって、女だつてばれたらきつと本国に呼び戻されるだろうね。後の事はわからない。良くて牢屋行きかな？」

「くっ……。だったらここにいろ！」

「え？」

「俺が黙っていればそれですむ。それにお前の親父にも手出しはできないはずだ」

一夏はバッグの中から生徒手帳をとりだすページをめくる

「IS学園特記事項。本学園においてあらゆる国家、組織、団体には本人の意思無しでは帰属しない。つまりこの学園にいればすくなくとも三年間は大丈夫ってことだ。その間になにか方法を考えればいい」

シャルルはその言葉に温かみを感じた

「一夏、ありがとう」

シャルルは一夏の前にで屈み込むと一夏の視線がシャルルの胸へと向けられる

「胸が見えそうだって」

「あっ……………」

シャルルは再び胸を隠すようにする

「そんなに気になる？」

「当たり前だろ！」

「ひよつとして見たいの？」

「なっ!？」

「一夏のエッチ」

「違うなんでそうなるんだ!！」

と再び一夏はツッコミを入れる
するとドアをノックする音が聞こえる。セシリアだった

「一夏さんいらっしゃいますか？夕食をまだ取られていないようですがお加減でも悪いのですか？」

セシリアが喋っているうちにシャルルをベッドに隠す

「一夏さん？入りますわよ」

セシリアが中に入ると中ではシャルルを寝かしつけているようにしか見えない

「いやー。シャルルがなんか風邪っぽいって言うから布団をかけてやってたんだ」

「それはお気の毒ですわね。一夏さんをおつれしてもいいですか？」

病人勘違いしたセシリアはシャルルに聞く。シャルルは咳き込みセシリアに声を出す

「ごほん、ごほん。どーぞ」

とシャルルは言う

「わたくしも偶然まだですよ。ご一緒しませんこと？」

彼女はモジモジと言う。シャルルは再び咳き込み

「じゅっくり……」

セシリアはその言葉を聞くと一夏の腕を掴み食堂に連れていった
ドアが締まる音がするとシャルルは体を起こす

「はぁ……………」

と悲しい表情になり、ため息を漏らす
すると誰かがドアを蹴破り入ってきた。ギルガメッシュだ

「おうセイバー！うまい酒が手に入った！征服王と共に酌み交わそうではないか！！！」

ギルガメッシュは我がもの顔で部屋の奥まで歩く
シャルルはそれを啞然と見ていた

「ん？貴様先程の……………。なぜここにいる？」

「あ、えつとここは僕と一夏の部屋でペンドラゴンさんの部屋は隣ですよ？」

「なに！？部屋を間違えたか？まあ、いい貴様でも酒を注ぐこともできるだろう？我が許す」

「は、はぁ……………」

シャルルはマイペースなギルガメッシュに圧倒された

ギルガメッシュは部屋の椅子に腰掛けシャルルに酒を渡しワイングラスを王の財宝から取り出しシャルルに向け
ゲート・オブ・バビロン

「注げ」

と言う。シャルルは黙って酒をグラスに注ぐとそのグラスをギルガメッシュは口に付ける

「ふううん。美味しい」

とギルガメッシュは呟く

「あの……」

「ん？なんだ小娘？」

「さつきはごめんなさい」

「別によい。貴様名は？」

「シャルルです。シャルル・ディノア……」

「シャルルか。いい名ではないか」

そう言うときギルガメッシュはグラスに口を付ける

「貴様が名のつたのだから我の名を教えてやろう。我が名はギルガメッシュ。聞いたことくらいあるだろ？」

「ギルガメッシュってあのバビロニアの英雄王？」

「そう、その英雄王だ」

シャルルは驚いた。神話上の人物が目の前に現れたことに

「でも、なんでそんな昔の人が現代に？」

「無論。聖杯に呼ばれ、聖杯戦争にサーヴァントとして召喚されたからだ」

「聖杯戦争？」

「そうだ。貴様の手にも刻まれているだろう。令呪が」
「これ？」

シャルルは右手の令呪を凝視する

「そう、それだ。知らぬようなら話してやろう。聖杯戦争というものを」

ギルガメツシュは簡単にだが語った。聖杯戦争のことを

「まさか……。そんなことが？」

「ああ、現在この学園にもマスターとサーヴァントがかなりの数いる」

ギルガメツシュは微笑むと再びグラスに口を付けグラスの酒は空になっってしまう

「では、おしえてください英雄王」

「ん？」

「僕は一体どうすればいいんですか？お母さんはいなくなって、お父さんに捨てられ、周りからはいらなんて言われる。じゃ、僕はなんでここにいますか？僕はどこにいればいいんですか？教えてください英雄王。王様なら僕を導いてください……！！」

シャルルは泣きじゃくった。だが英雄王にはその言葉が耳障りでしかなかった

「甘えるなよ。雑種……！！！」

「え……？」

「親がいない？なら自らの力で生きろ。いらんと言われる？なら好きにしる。居場所がわからない？なら作れ。我はそうやって生前は友と生き財宝を蓄え娯楽に浸った。生きる覚悟のない奴に王は導かず、救いもしない」

ギルガメツシュは立ち上がり持っていたグラスを机に置く

「生きる覚悟ができたのなら。次はお前が我の所に来い。その時は考えてやる」

ギルガメツシュはそう言々と黄金の霧状となり姿を消す
そしてシャルルは呟いた

「生きる覚悟……………」

シャルルはその言葉を胸に刻んだ
その後一夏がシャルルの分の食事を持って帰ってきて、シャルルが
箸を使えないと知ると一夏が食べさせてあげた

第12話・怒れる英雄達

学園に広まったある噂。その内容は「優勝したら一夏と付き合える」というものだ。本当は筈がした決死の告白だったがよそで聞いていた者が適当に流したためこのようなものになった

そして学園のアリーナ。そこにはその噂を信じている一人の少女、鳳鈴音がいた

「今回の学年別クラストーナメントで優勝できれば一夏と付き合える……。よし！頑張るわよ！」

決意を改める鈴。すつと後ろから声をかけられる。声の主はセシリアだった

「あら、てつきりわたくしが一番乗りだと思ってましたのに」

「私はこれから学年別トーナメントの優勝に向けて特訓するんだけど？」

「わたくしもまったく同じですわ」

そしてお互いに睨み合う

「このさいどっちが上かこの場でハッキリさせるつても悪くないかもね」

「よろしくてよ。どちらがより強く、より優雅であるかこの場で決着をつけて差上げますわ」

「もちろん私が上なのはわかりきってることだけど」

「ふふ、弱い犬ほどよく吠えると言っけれど、本当ですね」

「どういう意味よ……」

「自分が上だつてわざわざ大きく見せようとしているところなんか

典型的ですもの」

セシリアの言葉に拳を握りしめる鈴

「その言葉……そっくりそのまま返してあげる!!」

セシリアと鈴は同時に一瞬でISを装着し戦いが始まる。かに思えたがそれに水を差す者が現れる。一発のレルキヤノンの砲撃がセシリアと鈴との間の土に当たる。二人は攻撃された方を向くとそこにいたのはシュバルツァ・レーゲンを武装したラウラだった

「どういうつもり!?いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない!」

ラウラは無視し自分のディスプレイを見る

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか。データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

余裕な表情で微笑む

「なに、やるの?わざわざドイツからくんだりやって来てボコられたいなんてたいしたマゾっぷりね。それともジャガ芋農場じゃそういのがはやってるの?」

「あらあら鈴さん。こちらの方はどうも共通言語能力をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ?」

二人はラウラを思い切りコケにしていた

「貴様等のような者が同じ第三世代の専用機持ちとはな。勝くらい

しか脳がない国と、古いだけの取り柄の国はよほど人材不足と見える」

するとセシリアと鈴のディスプレイに「最終安全装着解放」と表情される。それを見た二人はキレそうになる

「この人スクラップがお望みみたいよ！」

「そのようですわね……………」

「二人がかりで来たらどうだ。下らん種馬を取り合う雌共にこの私が負けるものか！」

その言葉で完全にセシリアと鈴の堪忍袋がキレた

「今なんて言った、私の耳にはどうぞ好きなだけ殴って下さいって聞こえたけど……！」

「この場にはいない人間の侮辱までするなんて、その軽口二度と叩けぬようにして差し上げますわ……！」

鈴とセシリアの好きな人の侮辱をされての怒り言葉だった

「こい……………！！！」

ラウラは二人を挑発すると、セシリアと鈴音はブースターで飛行しラウラへ攻撃を開始した

その頃、士郎、アルトリア、凜は廊下を歩いていた。その中アルトリアは口を開く

「士郎お腹が空きました。そろそろ食事にしましょう」

「そうだな。久しぶりになにか作るか？」

「そうね。久しぶりに中華なんてどうかしら？」

アルトリア、士郎、凜の順番で話し、楽しそうな会話が続く

「てっ、遠坂。それ自分の得意分野だろ？」

「あ、バレた？」

凜はテヘツと舌を出す。それに士郎は呆れて笑っていた
すると走りながら一夏とシャルルが走ってくる

「士郎！セイバー！」

「遠坂さん！」

二人は三人を呼びそれに振り返る

「どうした一夏？そんなに慌てて」

「大変なんだよ。実はさっき聞いたんだけど、今アリーナでセシリアと鈴がラウラと模擬戦してるんだ！」

「別にいいんじゃないか？模擬戦なら」

と士郎は模擬戦はIS学園じゃ普通の事と思いつ言っ

「違う！セシリア達がやってるのは模擬戦じゃない！たぶん、ただの喧嘩だ！！」

「「「！？」」「」」

その言葉に三人は驚愕する

「どういう事だ？」

「いいからついて来てくれ！」

「あ、ああ……………」

士郎達は一夏とシャルルと共にアリーナへ急ぐ

アリーナへ到着するとアリーナの観覧席には数多くの生徒が集ま
っており、士郎や一夏達が見た光景は、ラウラがセシリアと鈴音を
一方的に痛め付けているというものだった

「セシリア！鈴！」

一夏の叫びが響く

ラウラはシュバルツァ・レーゲンの武装のワイヤーブレードで二人
の首を締め上げる

「あれでは呼吸が！」

「ISの生命維持があるから今はなんとかなってるけど、そう長く
は続かない……………」

シャルルのその言葉を聞いた一夏はボウギョシールドを叩く

「やめろ！やめろ！ラウラ！！！」

だがラウラは聞く耳どころか、一夏が存在がわかると痛め付けレベ
ルを上げていく

「しかたない。ランス！いるだろう！！」

一夏はやむおえず契約サーヴァント、セイバーのサー・ランスロットを呼び出す。シャルルは突然現れたランスロット驚く

「ハッ！ここに！！」

「ランス、いかまら霊体化してアーリーナの中に入りセシリアと鈴を助けに行ってくれ！できるか？」

「可能ですが、よろしいので？ここには数多くの生徒が……………」

ランスロットはアーリーナの観覧席に集まった生徒に自らが現れると聖杯戦争の事が知られるのではないかと言おうとするが

「そんなもん構うな！！今はセシリアと鈴の命の方が大事だ！！！」

一夏のラウラへの怒りの言葉

するとガタンという音が響きセシリアと鈴音がいた場所に砂煙りが舞う

「そんな……………」

一夏は膝から崩れ落ちる

「待ってくださいマスター！この気配……………サーヴァント、しかも彼らです！！」

アルトリアは認識した。その砂煙りの中にいる二つの巨大な怒りを纏った英霊を

ワイヤーブレードでセシリアと鈴音の首を締めているラウラ

「フッ、やはり弱いな。この程度が代表候補とはな」

ラウラは微笑みながらセシリアと鈴音をぶざまに笑う

「光栄に思え。貴様等は貴様達の愛する者の目の前で殺してやる。まずはお前からだ」

ラウラはセシリアを宙に浮かせ、距離を取るとセシリアを宙ずりにし彼女に照準合わせる

（一夏さん……ごめんなさい。あなたにわたくしの気持ちを伝えることすらできなかったわたくしを許してくださいまし……）

セシリアは死の覚悟を決めた

そしてラウラはレールキャノンの砲門にエネルギーをチャージし

「死ね……！！」

解き放つがラウラはバランスを崩してしまふ。これでレールキャノンのエネルギーは拡散し消滅する

「いったいなにが？」

ラウラは頭を抑え起き上がる。ラウラが倒れたせいで生じた砂煙りの中彼女はセシリアと鈴音のいた方向に体を向けるとそこには翡翠色の鎧を纏う槍平兵とマントを羽織った赤い髭の大柄の男が立っていた

ラウラは一瞬目の錯覚かと思ったが、違う。彼らは今そこに現界しているサーヴァントだ

ラウラはその二人を睨みつけ

「何者だ!!」

と問う。すると槍兵は赤槍を構える

「我が名は、フィオナ騎士団の騎士、デイルムッド・オディナなり!!主の危機を感じ、かつてながら助太刀に参った!!!」

デイルムッドは己の怒りを大声で言い放つ。大男も腰に携えたスパタを抜き天に掲げる

「我が名は征服王イスカンドル!!!余のマスターが最早、殺戮を主とする輩に殺されかけたのでな我慢できなくてのお……余に徒なしたも同然に『殺されようともいかしかたあるまいな』?」

イスカンドルもマスターをボコボコにされ怒れ狂っていた
そして二人は互いの得物をラウラへ向ける

「この怒り、貴様の身体に焼き付けてくれるぞ、小娘!!!!」

デイルムッドとイスカンドルは己の主とマスターの受けた痛みを倍しにて返そうとしていた

第13話・恐怖

「この怒り、貴様の身体に焼き付けてくれるぞ、小娘!!!」
騎士と征服王の怒りの叫び。ラウラは二人の英霊の威圧にビリビリと感じていた

（なんだ……この威圧は……!? こいつら本当に人間か!?!）

その中セシリアと鈴音が気がつく

「デイル様？」

「ライダー？」

二人が声が聞こえると二人のサーヴァントは振り返り駆け寄る

「主、ご無事ででしょうか？」

「ええ、大丈夫です。心配ありませんわ」

「よかった……」

デイルムツドはそう呟くとラウラに鋭い眼光を向ける

「無事か？小娘」

「えへへ、ライダーあんた来るの遅すぎよ……。バカ……」

「すまん。この時代でこの姿で現れるのは抵抗があつてな。少し手間取ったがもう我慢できず助けに来た。あとは……」

イスカンドルもデイルムツド同様にラウラを鋭い目つきで睨む
そしてデイルムツドは破魔の紅薔薇をイスカンドルはスパタを構える

「その黒いのはお痛が過ぎた。マスター達はどうか知らんが今の余とランサーは手加減できんぞ」

「さあ、覚悟してもらおうか！」

二人のサーヴァントは己の君主をやられたおかげで相当腹がたっている。得にデイルムツドには前例として以前のマスター、ケイネス・エルメロイと、その婚約者、ソラウがいる。今のデイルムツドは以前アルトリアと対峙した時よりも怒りのレベルが違う

「デイル様、いけませんわ……………！宝具を使つては……………」

ラウラとの戦いで大きなダメージを追ったセシリアが言う

「心配いりません、我が主よ。治癒不可能の必滅の黄薔薇^{ゲイ・ボウ}は使いません。ですが破魔^{ゲイ・シャルク}の紅薔薇は使わせていただきます！！」

鈴音もイスカンドルに宝具を使うなと言う

「ライダー、あんたわかつてると思うけど……………」

「ああ、安心せい。神威^{ゴルディアス}の車輪^{ホイル}も王の軍勢^{アイオニオン}も使いはせんわ」

そう言うとは彼は巨大な腕の十本の指をバキボキと鳴らす

「セイバーとアーチャーと元バーサーカーのマスター達よ。うちのマスター達を頼む。いまから余達はあの小娘に灸を据える。その間マスター達を気かけことはできん、手当してやってくれ」

士郎、一夏、アルトリア、凜、シャルル、ランスロットは頷くき急いでアリーナのセシリアと鈴音を救出し手当する

デイルムツド達はアリーナから外へ出た事を確認すると二人の切っ先はラウラへ向けられる

「それでは!」

「行くぞ!! AAAA r r r r r r r r r r a r a r a I e
! ! ! !」

イスカンドルは雄叫びを上げるとラウラへ特攻する。デイルムツドもそれに続く。ラウラは二人に構えアームブレードを展開する

「らあああ!!」

デイルムツドは破魔^{ゲイ・}の紅薔薇^{ジャルグ}の矛先をラウラへ突き出す

ラウラはアームブレードで受け流すがイスカンドルのスパタが振り下ろされる

「くっ!」

ラウラは腕を突き出すと腕から透明なバリアが展開される
イスカンドルの振り下ろした手が止まってしまう

「なんだ!? ライダーの動きが止まった?」

それを観覧席で見っていた一夏は驚いていた

「A I C、アクディブ・イナーシャル・キャンセラー……………!!」
「なによ? そのアクティブなんとかった?」

呟いたシャルルに凜が問う

「別名、完全停止能力。あらゆる攻撃を無効にし停止させる最強の盾」

「つまり、ライダーのスパタはその盾に止められたということですか？」

「うん」

アルトリアの質問に答えるシャルル

「ほお、奇妙なモンを使いよる」

腕を止められたイスカンダルはそう呆れつつ感心していた

「だが、まだ左が残つとるぞ！！ふんッ！！！」

イスカンダルは残っている左腕でラウラの顔面を殴ろうとする

「くっ！」

右手で防御したがラウラはイスカンダルの拳圧に負け吹き飛ぶ

「ぐあ！！！」

ラウラはなんとか宙で体制を立て直しワイヤーブレードでデイルムツドとイスカンダルに向け放つがデイルムツドとイスカンダルはそれをものともせずスパタと破魔の紅薔薇^{ゲイ・シャルグ}で次々と切り落とす

「なに！？ならば！」

ラウラはデイルムツドとイスカンダルの二人に照準を合わせレールキャノンを放つ

だが、イस्कन्दルはスパタで受け流しディルムツドは最小限の動きで攻撃を躲すと破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルグ}を投げる体制で構える

「決れー……………」

ディルムツドはそう呟くと一気に破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルグ}を投げる

「……………破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルグ}！！！」

ラウラはA I Cを展開し、破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルグ}を止めようとするが、A I Cに輝が生じる

「なに！？」

ラウラはA I Cが通用しないと悟り回避の体制に入るが、その行動より先にA I Sが完全に割れラウラの左脇下を掠める

「がはっ！！！」

ラウラはシュバルツァ・レーゲンの生命維持があつたため傷はついてはいないが痛みはあり、そのまま地面に落下し気絶する

「よし！」

観覧席でガッツポーズをする一夏

だが、英霊二人は負けたラウラに歩み寄っていく

「あいつら……………まさか！？セイバー、ディルムツドとイस्कन्दルを止めに行ってくれ！」

「わかりました！」

士郎はまさか無抵抗のラウラにまだ攻撃をするのではと思いアルトリアにそう言つと、アルトリアは制服から魔力で編んだ騎士甲冑に瞬時に変身する

「アーチャー！あんたもセイバーと行つて！」

すると凜の後ろにアーチャーのエミヤが現れる

「わかった。行くぞセイバー」

アルトリアは黙って頷くと二人は結界を破り中へ突入する
アルトリアとエミヤが突入する前の会話

「どうする？征服王」

「とりあえず、もうあんな事ができんようにこのカラクリの凶悪武装だけでも破壊しておくでしょう」

「そうだな……………」

デイルムツドは渋々返答する

するとイスカンドル先程戻したスパタを抜き巨大な腕を振り上げる

「ううう……………」

それと同時にラウラが目を覚ます

そしてラウラが見た光景は巨大な男が剣を振り上げ、それで自分を切り裂こうとしているように見えた

「あ……………ああ……………」

ラウラの瞳に涙が浮かぶ恐怖という感覚がラウラを襲う

そしてイスカンダルはスパタを振り下ろす。ラウラは恐怖で身体が動かず、涙が浮かぶ目を閉じた

だがガキン！！という音がアリーナに響くラウラはそっと目を開くとそこには騎士甲冑のアルトリアがいた

「ペン……ドラゴン……？」

「はい、私です。大丈夫ですかラウラ・ボーデヴィツヒ？」

「う、うん……」

アルトリアの駆けた言葉に頷くラウラ。それにアルトリアは笑顔で返す

「なにをするセイバー？余達の邪魔をするな」

「騎士として、このような行為頼っておくわけにはいかない。デイルムッド騎士であるあなたがなぜ？いくら主がやられたとはいえ、必要以上に恐怖を与える必要はないはずだ！怒りに捕われるな、誇りを思い出せ、フィオナの騎士、デイルムッド・オディナ！！！」

アルトリアの言葉で正気に返るデイルムッド

「くっ……」

デイルムッドは歎んだ。己のした事を。騎士としてあるまじき事を

「征服王、貴様はどうする？これ以上やるようなら私とアーチャー、ランスロットの三人が相手をする」

「……………。わかったよかろう今回はセイバー、お前顔に免じて許すでしょう」

そう言っているとイスカンドルはスパタをしまいディルムッドと共に霊体化する

そしてラウラは

「立てるか？」

「え……？」

ラウラに差し延べられる赤い手。エミヤの手だ。ラウラはISを解除しその手を叩く

「余計なお世話だ……！」

そう言っているとラウラはアリーナの出口へ小さな背中を丸めつつ向かって行った

「まったく。プライドの高い女は……。まあ、うちのマスターも例外ではないがな」

とエミヤは呟く

その後、凜とカレンの暗示でアリーナにいたシャルルとラウラを除く全てのマスターとサーヴァント以外の生徒の記憶を消すと、セシリアと鈴音は保険室へ運ばれた

第14話・最凶の召喚師

医務室

現在そこにはセシリアと鈴音を手当するため士郎、一夏、アルトリア、凜、シャルルの七人がカレンの元を訪れていた

「はい。これでおしまい」

そう言って治療器具を持つ白衣姿のカレン

「悪いなカレン」

「いえ、これが私の仕事なもので」

そう言っくとカレンは血の着いた器具を洗う

「それにしてもあのラウラって奴ホントムカつく!」

ベッドで体を起こしている鈴音が親指の爪を噛みながら言う

「ええ、そうですわね。デイル様とイスカンドル様がいなかった場合本当にわたくし達、殺されていたかもしれません」

沈んだ表情で言うセシリア

「とにかく、数日したら直る怪我でよかった」

「ああ、しばらくは絶対安静だな」

シャルル、一夏の順で言う。するとセシリアと鈴音は思い出したかのように声を上げる

「あああああああ！！！！」

セシリアと鈴音の声に驚く士郎達

「うわっ！？」

「ビックリした……………」

と各々のリアクションをしていた

セシリアと鈴音が声を上げた原因は例の噂、「トーナメントで優勝すると一夏と付き合える」という噂である
セシリアと鈴音は頷く合いカレンに問う

「あのー、オルテンシア先生？」

「ん？ なにかしら？」

「今のわたくし達の状態ではトーナメントの出場はどうなるのでしょうか？」

「おそらく出場はできないわね」

サラッとカレンは言う

「なぜなら、貴女達のISは約80%以上の損傷。それに私が見たところ怪我の完全完治には最低二週間は必要一周間後のトーナメントの出場は控えなさい。もっともそれを無視して出場しようものなら、あの慢心王の鎖で貴女達に緊縛プレイという私からのプレゼントがあるわよ。ふふふ……………」

「ヒイ……………！！」

カレンは不気味に微笑み、二人はそれに震え上がる

「まつ、しばらくは学校も休んで体調直せよ」
「「うう」」

一夏の言葉に食い下がる二人
すると廊下をドタドタと女子達が走りドアを蹴破って医務室へ突入してくる

「なっなんだ？」

女子たちは一斉に持ってきた紙を突き出すように見せる。士郎はその内の一枚を手にとって読み上げる

「なになに、今月からの学年別トーナメントは、より実践的な模擬戦闘を行うため二人組での参加を必須とする。なおペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒どうしで組むものとする。締め切りは……」

「とにかく私と組もう織斑くん！」

「私と組んでデュノアくん！」

士郎が最後まで言い終わる前に割って入ってくる

「みんな悪い、シャルルと組から諦めてくれ！」

一夏がそう言う女子生徒達は「他の女子と組まれるよりはマシ」や「男どうしても絵になるもんね」等といいながら退散していくと凜が口を開く

「たしかに一夏くとデュノアくんが組めばいいかもしれないわね……」

「え、どうして……？」

シャルルが訪ねる

「だってそうじゃない？今のところボーデヴィツヒさんは一夏くんになんらかの恨みを持っている。それに二人のコンビネーションも抜群にいい。となればISでのタッグは現在一夏くんとデュノアくんがベストなのよ。どうわかる？」

「は、はあ……………」

シャルルは曖昧な返事を凜へ返す
するとシャルルは凜へ問う

「じゃ僕が一夏とペアになるのはいいとして一つ質問いいですか？
遠坂さん」

「ええ、いいわよ」

凜がそう返すとシャルルは目をキラッとさせ言う

「ここにいるみんなって聖杯戦争の参加者なんですか？」

シャルルの一言で一気に空気が張り詰める

「シャルル……………。いったいどこでその言葉を……………」

「数日前、アルトリアさんの部屋と間違えてギルガメッシュさんが
来て僕の令呪を見て教えてくれたんだ」

一夏の問いにシャルルはあの時の出来事を話す

「あの慢心王……………。自害させようかしら？」

とカレンはにこやかにとんでもないことを言った
すると一夏がシャルルに返答する

「シャルル聞いてくれ。士郎や凜は知らないけど俺にセシリア、鈴は誤って英霊を召喚したただけなんだ。だけど俺達は仲間だ一緒に戦いはするが決して見方撃ちなんてしない。別に俺は聖杯に望むものなんてない。ただ、俺はランスロットに協力している。ただそれだけ」

シャルルはその言葉を聞くと安心する

「よかった。一夏がなんか悪い願望を叶えようとしているのかわかって思っちゃって。ごめんね変な疑いして」

「いや、気にしないでくれ。じゃ、シャルルを仲間に入れて今後の聖杯戦争の事でも考えないか？」

シャルルにそう言うで一夏達は今後の聖杯戦争の方針を決めようとした

数日後、学年別トーナメントの前夜

ラウラはアリーナのISの発射台の上に立っていた

「私は負けた……。あい槍兵と大男に……。しかも情けを駆けられ、プライドを踏みにじられた……。」

ラウラはデイルムツドとイスカンドルに負け、アルトリアとエミヤの情けを悔いていた

するとラウラは左目の眼帯を解き叩きつける。ラウラの左目は黄金

に輝く瞳をしていた

「クソ……。私はなんのために戦って来たんだ……。！！これは私の恥だ！！殺してやる！！織斑一夏！！私の手で殺してやる！！！」

ラウラは叫んだ。己の無力さを

するとラウラの右手に犬のような痣が浮かび上がる。令呪だ

「つつ……。なんだこれは……？」

己の右手に浮かび上がった令呪を凝視するラウラ。するとラウラは背後に気配を感じコンバットナイフを構え振り返る

「何物だ！？」

振り返るとそこには黒いローブを羽織ったギョロ目の男が現れる

「問おお。我を呼び我を求め、サモナーのクラスをよりしるに現界せしめた召喚者あ。貴殿の名をここに問う。祖は何者なるやあ？」

いきなり現れた男はラウラに問う

「私はラウラ・ボーデヴィツヒ！！ドイツ軍シュバルツァ・ハーゼの隊長だ。では逆に問うが貴様は何者だ？」

ラウラは自分の素性を話すと次は男に問い返す

「我が名はジル・ド・レエ……。ご存知ではありません？私の名前をお？」

「ジル・ド・レエだと!？」

ラウラはその名を知っている。かつてジャンヌ・ダルクと共に戦場を馳せた騎士。だが、ジャンヌが処刑されると、彼は黒魔術に没頭しいつしか殺戮に快楽を覚え始めたと言われる青髭という名でも有名な英霊だ

ラウラは警戒を解きコンバットナイフをしまう

「ううん。よろしい。契約は成立しましたあ。かの楽園の杯は私達が手にするでしょう」

「杯だと？」

「ご存知ありませんか？聖杯戦争というものをあ」

ジルが問うとラウラは首を横に降る

「そうですね。簡単に説明しますとお……。私とマスターのサーヴァントを除く英霊が約十四体存在します。それを全て狩りつくす事で我々はあらゆる願いを叶える事が可能な願望機、聖杯を手にするのです」

「という事はお前を除くサーヴァントと呼ばれる英霊共を狩り尽くせばいいのだな？」

「いかにも、その通りです」

ラウラはジルのその言葉を聞くと口元を歪める

「いいだろ。現在この学園には私の気に入らない男が一人いる。だが、そいつは少し訳ありだな。手始めにそいつを殺してもらいたい」
「ほお、ではその男の名は？」

ジルはラウラに問うその男の名を

「織斑一夏だ……!!」

「織斑一夏……。わかりました。引き受けましょう」
「そうか」

ジルの言葉に口元を歪めるラウラ

「では手始めに、ここの学園の生徒を皆殺しにし贄を確保しよう
お……………」

するとジルは己の宝具、ブレイク・スベルブック螺湮城教本を開く

「まあ、待て。明日私とその織斑一夏と手合わせする、その時奴を
後ろから攻め殺せ。あとは教官以外どうなるうが知ったことではな
い」

「そうですねえ……。それがマスターの方針なら仕方ありません
ねえ。ですが一応これを」

ジルはそう言うところから白いペンダントを渡す

「これは？」

「それは我が愛しの聖処女ジャンヌから頂いたお守りです。あらゆ
る災からマスターを守るでしょう」

「ほお」

ラウラはジルから受けとったペンダントを首につける

「私はこれより海魔を召喚する準備がございますゆえ、これで失礼
します」

第15話・試合開始

クラス別トーナメント当日

アリーナの中央では四機のI.S.が向かえ合い、対峙しようとしていた士郎、アルトリア、凜、セシリア、鈴音は観覧席で見学。ランスロットは千冬と真耶と一緒にコンピュータールーム。他のサーヴァント達はマスターの元で霊体化している

中央には一夏が乗る白式。パートナーのシャルル。シャルルが乗る機体はフランス第二世代、ラファール・リヴァイブ・カスタム？対峙しているのはドイツの第三世代のシュバルツァ・レーゲン。しかもラウラのパートナーは日本の量産機、打鉄の操縦者の筈だった

「一回戦目で当たるとはな……。待つ手間が省けた」

「それはどうも、以心伝心でなによりだ」

ラウラ、一夏の順番だ

カウントダウンは刻々と迫る。張り詰める空気の中、開戦と同時に

「「たたきのめす!!」」

一夏、ラウラが咆哮し試合が開始される

一夏は開始と同時に雪片を瞬時に構えブースターを使い特攻しラウラとの距離を縮める

だがラウラはA.I.Cを展開し一夏の特攻を止める

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「そりゃどうも。以心伝心でなによりだ」

ラウラ、一夏の順で言う。するとラウラは右肩のレールキャノンの砲門を一夏へ向ける

だが、同時にシャルルが一夏の後ろから現れる。シャルルは一夏の特攻と同時に彼の背後に隠れラウラの注意が一夏に向いているうちにシャルルは攻撃体制に入ったのだ。しかも手にはライフルの銃口がラウラをロックしている

ラウラはレールキャノンを放つがそれより先にシャルルのライフルの銃弾が放たれ一夏へ向けられるはずだったレールキャノンのエネルギー弾の起動をずらす

だがラウラはAICで防御していた為ライフルの銃弾を防ぎ一夏とシャルルから距離を取るため後方に下がる。だが

「逃がさない！！」

シャルルは浮上し彼女の特技『ラビット・スイッチ高速切替』で瞬時にサブマシンガンを左手に出現させる

そして両手に持たれた銃でラウラを撃つ

だがラウラは全ての銃撃を回避する。さらにシャルルの銃弾を装甲で弾きながら一機のISが姿を現す。日本の量産機、打鉄の操縦者の箒だ。箒は打鉄の剣でシャルルの銃弾を弾き返すとシャルルの手が止まり、箒はゆっくりと剣を構える

「私を忘れてもらっては困る……！！」

箒はブーストで加速しシャルルへ斬り掛かろうとするがそれに一夏が迎え撃つ

雪片と打鉄の剣が軋みあう

その隙を察しシャルルは後方で巨大ライフルとマシンガンを構えるそれに箒も察するがもう遅い。一夏は口元を歪め、シャルルの銃が箒に照準を合わせる

箒の顔に焦りの表情が浮かぶ。そしてシャルルは銃弾を放つが、箒は突然足を引っ張られる
シュバルツァ・レーゲンのワイヤーブレードが箒の足に絡み付いている

ラウラは箒を助けたのではない。ただ邪魔だっただけなのだ

ラウラはプラズマ手刀を両腕に展開し一夏に切り掛かる
だが一夏の太刀筋がいつもと一味違う

コンピュータールーム

「ランスロット。お前が一夏を指導したのか？」

千冬がランスロットに問う

「はい。マスターがなんとしてもラウラ・ボーデヴィツヒ殿に勝ちたいと申すもので仕方なく……」

「そうだったのか。だが一応礼は言っておく。すまないな、あんな弟のサーヴァントとして召喚されて」

「いえ。私はマスターに従っただけです。それに王にも私の思いを伝える事ができ、今度こそ騎士として最後を迎えることができそうです」

ランスロットは微笑んで千冬に返答すると千冬は「そうか」の一言を返した

シャルルは箒と戦闘を行っていた

銃弾が打鉄の防御シールドを撃ち、徐々に打鉄のシールドエネルギーを消耗させる

「相手が一夏じゃなくてごめんね!!」

と言いつつ箒に弾丸を浴びせる

「ば、馬鹿にするな!!」

そう言う箒

そしてシャルルはトリガーを引きそれが止めとなる

箒は銃弾を受け、打鉄のエネルギーが0になり打鉄は機能を停止させる

一方その頃一夏とラウラは

「くっ……!!」

ラウラは一夏の剣撃をプラズマ手刀で流す

（こいつ、ここまでの剣使い手だったのか!? こんな情報データにはない!!）

データにない情報に驚くラウラ

そしてシャルルの相手をしていたシャルルがラウラを背後から襲う

「はああああああああ!!」

銃を連射しながらラウラとの距離を縮めるシャルル

ラウラは即座に振り返りシャルルに対しAICを展開する
だが一夏がその隙をつき雪片を振り下ろす

「うおおおおおおお！！！」

ラウラは前後から攻撃される

一夏の剣とシャルルの銃。ラウラは防御しきれないと判断し回避する
一夏はラウラの行動でAICの弱点を察した。それは防御する対象に意識を集中しなくてはいけない。つまり前後からの違った攻撃にはAICはまったくの無力となる

「弱点がわかった。なら、こいつでフィニッシュだ！」

一夏は白式とのワン・オフ・アビリティー。零落白夜を発動する

「チツ、死に損ないがあー！」

ラウラが咆哮しレールキャノンの照準を一夏に合わせるだが

「させないよ！」

「なに！？」

ラウラの背後に瞬時にシャルルが回り込む

シャルルはトーナメントまでの期間に得た技術『イグニッション・ブースト瞬時加速』を発動

しラウラの背後に回り込んだのだ

シャルルは至近距離でライフルを構える。だがラウラはプラズマ手刀でシャルルを切り付けようとするが

カンカンカン！！

とシュバルツァ・レーゲンのシールドを数発の弾丸が命中する
ラウラはそれに振り返るとそこにはライフルを構えた一夏がいた

再び前後からの奇襲に、ラウラは高く飛ぶ

（くっ、奴ら先程からデータにない行動を連続で使ってくる。仕方ない……………」

ラウラは大きく息を吸い込み大声を上げる

「やれサモナー！！！奴らを殺し尽くせ！！！！」

その声はアリーナ全体に広がる
すると地中から数十本の触手が伸びる

「なんだこれ！？」

一夏が突然現れた触手に肝を冷やす。触手が現れるのと同時に緊急事態と悟った千冬は観覧席のシャッターを閉じた
触手は一夏とシャルルに襲い掛かる

「クソッ、なんだこいつら！？」

一夏は触手を切り続けるが触手は切っても切っても現れる始末

「キリがない！」

銃で触手を次々を打ち抜くシャルルを背後から触手が襲い掛かる

「しまっ……………」

回避できない状況
すると、その触手を剣と槍が貫き触手を殺す

「汚物めが。誰の許しを得てこの場で生きるか!!」

と吐き捨てる黄金の鎧を纏う英雄、ギルガメツシュ

「ギルガメツシュさん、どうしてここに？」

ギルガメツシュがここにいる理由は簡単であるアーチャーが持つ単独行動スキルを使用しマスターから離れた場所でも行動できるのだ。彼は姿を現すまで誰にも気づかれない位置から試合を観戦していたのだ

ギルガメツシュはシャルルの言葉を無視し、彼はアリーナの中央を睨みつけ宝物の槍を取り出す

「貴様に言っておるのだ！雑種が!!」

ギルガメツシュは睨んだ場所に取り出した槍を投げ飛ばす
槍は見えない壁にぶつかり、その壁はガラスが崩れるように散る。
壁が崩れるとそこにはローブ姿の男が人の皮で作られた本を開いていた

「やはり貴様かああ、この偽魔術師が!!!!」

と黄金の英雄王は声を上げる

第16話・欲望解放（前書き）

今日の遊戯王の大会のためのデッキ構築のせいで更新が遅れました。
すみません！

それとサーヴァントのクラスにルーラーとパラディンを追加しました
他にもアイディアがあればお願いします
ではどうぞ

第16話・欲望解放

「やはり貴様かああ、この偽魔術師が!!!!」

ギルガメツシュの赤い眼球はそのローブの男を睨む

「貴様貴様貴様貴様貴様ああああ!!よくも邪魔をおおおお
おお!!!!」

ローブの男、サモナーのサーヴァント、ジル・ド・レエは邪魔をした英雄王に怒り狂ったように言う。そしてジルは海魔に指示を出す
と全ての海魔はシャルルとギルガメツシュに襲い掛かる

「はっ!思い上がるなよ?召喚師風情が!」

そう言うとき、ギルガメツシュは己を防御するかのように王の財宝を展
開。その中からランケEとDの槍や剣を放つ。宝物は全ての海魔を
殺し尽くした

「なあ.....にいいい.....!!!!」

海魔を全滅させられたことにさらに腹を立てるジル

だが、ギルガメツシュがジルの相手をしているうちに士郎、アルト
リア、凜、セシリア、鈴音、カレン、クー・フリーン、ディルムツ
ド、イスカンドルが駆け付ける

「待たせたな、金ピカ!」

「遅いぞ!セイバー、征服王。それに雑種共!」

「すまない。避難する生徒達の中逆らって来るのは手間取ってしま

った」

イスカンドル、ギルガメツシュ、アルトリアの順で言う。さらにギルガメツシュは一人足りないことに気がつく

「ん？時臣の子よ。フェイカーはどうした？」

「アーチャーなら一夏ちゃんとシャルルくんのところに行ってもらってるわ」

「そうか。あの小僧のところか」

ギルガメツシュは納得する

「ならば雑種。貴様は小僧の元へ向かえ」

ギルガメツシュはシャルルに言う

「だけど……！」

「いいから行け。ここからは我ら英霊とそのマスターの戦いだ。貴様はどちらでもない。我の言う意味がわかるな？」

つまり彼は「マスターでもサーヴァントでもないものは邪魔だ」と遠回りに言っているようなものだ。シャルルは頷くと一夏の元へ向かう

「あら？彼には優しいのね。英雄王さん？」

凜が冷やかしのつもりで言ったがギルガメツシュは聞こえなかったように霊体化してしまう

ギルガメツシュが消えると同時にジルは奇声を発する

「おおおおおおおおお！！！！」

それに全員構えを取る

士郎は両手に夫婦剣、干将・莫耶かんしょう ばくやを投影し、凜も指先にガントのための魔力を溜める

「おお！！麗しの聖処女よ！！まさか、貴女にこうして会えるとは！なんとこの運命の巡り会わせ！！！！」

「貴様まだ……………！」

「さあ！ジャンヌ！私と共に参りましょう！！貴女に見せて差し上げます。あの愚かしい神を！貴女を火刑にて殺した神を！私が全て食いつぶして差し上げます！！！！」

その言葉は全てアルトリアへ向けられたものだ。奴との関係を知らない士郎首を傾げアルトリアへ問う

「どういう事だセイバー？」

「奴は前回の聖杯戦争で私をジャンヌ・ダルクと勘違いし、何十人もの子供達を殺害した張本人。フランスの英霊、ジル・ド・レエ！！！！」

アルトリアは奥歯を噛み締めて言う

「おお、ジャンヌ。貴女はまだ御自身をそのような……………！貴女はまさしくフランスの紅蓮ラ・ビュセルの聖女ジャンヌ・ダルクなのですぞ！！」

「くどいぞキャスター！いや、今度はサモナーと呼ぶべきか？」

「確かに私は今回はキャスターではなく、サモナーとして現界しました。もちろん私の聖杯に托す願いはジャンヌ・ダルクの復活！！でもそれは成就された！聖杯はまたも私を選んだのです！！！！」

「貴様……………まだそのような戯言を！」

アルトリアは眉間にシワを寄せる

「おおお……！貴女はまだ、捕われておられるのですね！！いいでしょう……。では、それ相応の荒療治と参りましょう！行け海魔共！邪魔物を贅とし、ジャンヌを我が手に！！！！！」

ジルは召喚された海魔を操り士郎達に攻撃を仕掛けた

同じ頃、上空で高みの見物をしていた

「チツ、サモナーめしくじったか。まあいい」

ラウラはシュバルツァ・レーゲンの機能を使い一夏を探すると一直線に矢がラウラに向かい放たれる

「！？」

ラウラはとつさにAICを展開し、それを受け流すとその矢先を睨む矢先には赤い服を着た弓をこちらへ向ける銀髪の英霊、未来の衛宮士郎。アーチャーのエミヤの姿があった

「外したか？」

「貴様ああああああ！！！！！！」

ラウラはエミヤに苛立ちレールキャノンを向ける。だが

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

一夏は雄叫びを上げラウラを背後から襲う

「なに!？」

ラウラは構えていたレールキャノンの照準をエミヤから一夏に切り替える。すると一発の弾丸が頬を掠める

「!？」

ラウラはデイスプレイで確認すると、そこには全身が黒甲冑の騎士、サー・ランスロットがIS専用のライフルを宝具、騎士は徒手にて死せずで己の武器と化していた

「チイイイ……………」

苛立つラウラ

だがそうしているうちに一夏がラウラへの射程に入る

「嘗めるなああああ!！」

ラウラはそう叫びプラズマ手刀を展開。一夏の斬撃、雪片を受け止める

「貴様等さっきから私を嘗めるとは!ただではすまんぞ!!!」
「そりやどうも。ただどお前のやってる事もゆるさねえぜ?」

ラウラは一夏の瞳に怒りを感じた

一夏は怒っている。サモナーのサーヴァントを使用し関係のない生徒を巻き込みかけた事に

「貴様になにがわかる!!!」

ラウラは両腕のプラズマ手刀を消すと左腕で一夏を殴り掛かる
ランスロットはラウラに銃口を向けるが

「ランス、手を出すな!」

マスターの指示で銃を下ろす
するとラウラの左は一夏の顔面目掛け振り下ろされる
一夏は右手でラウラの左手を流す

「くっ…………!!」

ラウラは次に右で殴り掛かる。一夏なそれを左で流す
次は左で殴り掛かるが右で流される。その繰り返しだ

「クソツクソツクソツクソツクソツ!!!!」

ラウラはただ泣きじやくり一夏に殴り掛かる

「貴様のせいだ!貴様が教官を!貴様がいなければ教官は……教官
は!!!」

怒りにまかせ拳を放つラウラ。そして渾身の一撃を一夏に放つ
だが一夏はそれを受け止める

「俺のせいじゃねえよ。千冬姉は昔から千冬姉だ!他人が人の事を
どうこう言っな。俺だって言える口じゃない。そうだろ?だって俺
は俺、お前はお前なんだぜ?違うか、ラウラ・ボーデヴィツヒ!!」

一夏の言葉を聞き涙が止まるラウラ

「私は！私は……………！わあああああああああ！！！！」

叫び声を上げるラウラ。するとシユバルツァ・レーゲンのレールキヤノンが一夏をロックする。一夏は逃げようとするが今逃げれば精神崩壊をしかけているラウラを置いていくことになる。それだけばマズイと思った一夏は覚悟を決め両手で防御した

すると一機のISが上空からラウラに目掛け飛び込んでくる

シャルルとラファール・リヴァイブだ

「危ない一夏！！」

シャルルはラウラは抱き抱え地響きとともに地面に激突し、レールキャノンのエネルギーは拡散しラウラは死んだような瞳をし身体には力が入っていない。まるで糸の切れたマリオネットのようだった

ラウラは今走馬灯のように過去の記憶を見ていた

自分は戦うために作られ、戦うために生きてきた。私は最高レベルを維持し続けた。その後ISの導入で全てが一気に反転する。ISに適合するためラウラ達は肉眼へのナノマシンを注入された。だが私はできそこないの烙印を押された。そんな時、織斑千冬、あの人に出会った。彼女はきわめて有能な教官だった。私はIS専門の部隊の中で、再び最強の座に君臨した。だから私はある日あの人に問い掛けた「どうしてそこまで強いのですか。どうしたら強くなれるのですか？」すると彼女はこう言った「私には弟がいる」その時の彼女は優しそうな笑顔だった。違う、私が憧れるあの方は強

く凜々しく堂々としているのに、だから許せない教官をそんな風に変えた男、認めない織斑一夏を！！

（だから私負けられない！！力が、力が欲しい！！）

（ネガウカ？ナンジ、ヨリつよいちからヲほつスルカ？）

この声はラウラの響く

（よこせ。力を！揺るぎなき最強を！！）

一夏は宙に浮きながら地に落ちたラウラをみていた。そしてラウラから目をそらすと一夏はランスロットの元まで降下する

「終わりましたね。マスター」

「ああ」

頷く一夏

そしてシャルル、エミヤと一夏の元へ集まってくる

「サンキュなシャルル。助かったよ」

「うっん。一夏が頑張ったおかげだよ」

一夏に微笑むシャルル。それと同時にエミヤが現れ口を開く

「お取り混み中すまないがあの娘はどうするつもりだ？織斑一夏」

「ああ、一応保険室に連れていこう。ISのシールドがあったとはいえ、精神的にダメージがあるかもしれないからな」

「わかったではそうするでしょう」

エミヤは腕を組む
するとラウラがムクリと起き上がる
それに全員が戦闘体制に入る

「なんだ!？」

エミヤは夫婦剣、干将・莫耶かんしょう ばくやを投影しランスロットは銃を構える
エミヤはラウラの目を見るがその目には精気が感じられず、スルリ
と眼帯が落ち黄金のナノマシンが注入された左目があらわになる
するとシュバルツァ・レーゲンから黒い泥が吹き出しラウラを包み
込む

「うあああああああああああああ!!!!!!」

苦痛の叫びを上げる少女

そしてその泥はラウラを包み込むと一人の人間の形を取る
その形はまるで……

「千冬姉……………」

織斑千冬その人を物語っていた

第17話・Unlimited Blade Works（前書き）

えーと

最初に言っておきます

今回はかなり短いです。すみません

第17話・Unlimited Blade Works

ラウラが泥にのまれる少し前。サモナーのジル・ド・レエにサーヴアントとそのマスター達は無尽蔵に召喚される海魔と戦っていた

「はああああー!!」

風王結界で海魔を斬るアルトリア

「うおおおおー!!」

干将・莫耶かんしょう ばくやで海魔を斬る士郎。他にも凜はガントや宝石魔術を駆使している。セシリアと鈴音も回復したISで応戦。デイルムッドは二本の呪槍で海魔を貫く。クー・フリーンは戦闘力の低いカレンを守りつつも対城宝具、突き穿つ死翔ゲイ・イ・ボルの槍クを放つ。イスカンドルも神威イアス・ホイールの車輪で疾走し薙ぎ払う
だがいくら斬っても斬っても海魔は減らない

「あーもうきりがない！一体どうなったのよ！」

宝石魔術やガントで攻撃していた凜が苛立ち言う

「リン！奴の召喚の要は宝具である魔導書です！魔導書をなんとかできれば……！」

「なるほどね。ランサー！デイルムッドの方ね」

凜がデイルムッドを呼ぶ

「なんだ!？」

「今から私達が攻撃の隙を作るわ！あんたはその隙が出来たら破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇である本を破壊して！」

「ふん、そんなこと。造作もない！！」

「頼むわよ！」

「おう！」

するとアルトリア達はディルムツドの一撃を作る為の隙を作ろうと攻撃を繰り返す
そしてその隙ができる

「今よ！」

凜の指示と同時にディルムツドは紅の呪槍をサモナーの宝具、螺湮ブレラーティ
イス・スベルブック城教本に照準を合わせる

「穿て！破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇！！！」

破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇は放たれジルの手の螺湮城教本に向かい一直線に伸びる
だが、破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇が螺湮城教本届く前に紅い呪槍は見えない壁に弾かれる

「なに！？」

ディルムツドは弾かれた破魔ゲイ・ジャルグの紅薔薇をキャッチし構える
すると先程まで海魔に指示を出していたジルが口を開く

「フフフツ。これがサモナーのクラスに与えられた能力。名を固有空間。固有空間は召喚師に必要な詠唱呪文を唱える為の空間。それに私は今回サモナーとして現界しました。と、言うこと前回とは違い、私は消費魔力の半分で海魔を召喚させることができます。さら

にい！この空間は薄い膜のようにすることで姿を消すことも、ランクA+以上の対城宝具でなければ破る事の出来ない最強の壁にもなります」

ジルは不適な笑みを浮かべる

「つつことは、あの壁を砕く事ができるのはセイバーの約束された勝利の剣だけってことか？」

「そうなるわね……………」

クー・フリーンの言葉に奥歯を噛む凜
すると

「うあああああああああああああ！！！！！」

ラウラの叫ぶ声が全員の耳に響く
それと同時に螺旋湮城教本がどす黒く強く光だす

「おお！これは！」

魔導書に膨大な魔力が流れこむのをジルは感じていた
ジルは螺旋湮城教本のページを括りあるページを開くきそのページの呪文を唱え始める

「まずい！」

声を上げるアルトリア

「奴め、大型の化け物呼び出すつもりか！？」

「させるか！A A A A r a r a r a r a r a r a r a r a I e

「！！！！」

イスカンドルは神威の車輪^{ゴルディアスホイール}で突撃するがサモナーの固有空間に阻まれる

「ムダですよ。ムダ」

「おのれ！！」

ジルの一言に怒るイスカンドル

前回の聖杯戦争に参加していたサーヴァントは皆知っている

元キャスターは以前同じく巨大海魔を召喚した。その悍ましい姿を知っている

だが、それは遅かった。ジルは詠唱を終え巨大海魔の召喚に成功する

「千冬姉……………？」

一夏はそう呟く

すると彼は齒を食いしぼり、泥に捕われたラウラだったモノを攻撃する

「うおおおおおお！！」

だが弾かれ、黒いそれは持つてる剣で一夏を切り付ける

「ぐあ！！」

とつさに一夏は白式の装甲を纏った腕で防御したが、吹き飛ばされISが解除されてしまいエネルギーも尽きる

しかも今放たれた剣技は一夏が初めて千冬に習ったものだった

「ふざけるな!!」

サツと起き上がり死に物狂いで黒いそれに飛び掛かる一夏をランスロットが止めにはいる

「マスター！落ち着いてください!!」

「放せ、あの野郎ぶっ飛ばしてやる!!」

一夏の叫びがアリーナ全体に轟く
すると

「一夏!!!!」

若い女性の声のアリーナに響く

一夏、エミヤ、ランスロット、シャルルは声の元を見るとそこには
避難したはずの箒がいた

箒はただまっすぐ一夏の元まで行くと大きく右手を振り上げ

パン!

一夏の頬を叩く。一夏の頬に赤い跡が残りランスロットは手を離す

「箒………?」

「なにを考えている死ぬ気か！それにあいつがいったいなんだというのだ!？」

「あいつ、千冬姉と同じ居合を使いやる。あの技は千冬姉だけのものなんだ!」

一夏の頭に過去のヴィジョンが流れる。それは小学生の頃千冬に剣を習った時の事だ。その時千冬が言った言葉を思い出す。「いいか一夏、刀は振るうものだ。振られるようでは剣術とは言わない。重いだろ、それが人の命を断つ武器の重さだ」と以前言われた言葉を思い出した

「今のお前に何ができる？白式のエネルギーも残っていない状況でどう戦う？」

「それは……………」

一夏は思いつく限りの策を上げるが全く奴には通用するようなものはない

「なにも策がないだろ。今はあきらめろ」

「……………。違うぜ筈、全然違う。俺がやらなきゃいけないんじゃないんだよ。これは俺がやりたいからやるんだ!!」

「ならばどうするっていうのだ？」

「それは……………」

答えが出ない

奴を倒す策が思い付かない。ランスロットとエミヤの力を借りたとしても勝てる確率は低い
絶望的状况に追い込まれる
すると

「I am the bone of my sword」

エミヤが独り言のように呪文を言う
全員がエミヤに視線を向ける

「Steel is my body, and fire is my blood」.

だがエミヤは呪文をただ坦々と読み続ける

「I have created over a thousand blades」.

「unknown to Death」.

「Nor known to Life」.

「Have withstood pain to create many weapons」.

「Yet, those hands will never hold anything」.

「So as I pray, unlimited blade works!!!」.

そして最後の呪文を詠唱終わると一夏達の景色が一辺する。空に歯車がゆつくりと回転し何千、何億、何兆という剣が地面に突き刺さっている

これはエミヤの世界。固有結界、無限の剣製だ

アンリミテッドブレイドワークス

第18話・轟く斬撃（前書き）

読者の皆様すみません！

今回も短いです！

ですが新キャラが出ます！

次回で活躍しますので今回は勘弁くださいーい！！

ではどうぞ

第18話・轟く斬撃

エミヤの固有結界・無限の剣製
アンリミテッドブレイドワークス

それは一夏、箒、シャルル、ランスロット、そしてラウラだった黒いISを取り込み一つの世界に連れ込んだ

「これは私の固有結界・無限の剣製。
アンリミテッドブレイドワークスここにある剣は全て私の所有物。そして私の剣製だ!!」

一夏達は驚愕した。エミヤの剣製とエミヤというサーヴァントに

「ここにある剣は全て私が投影したものだ。お前達は好きに使うといい」

「アーチャー……。サンキュ」

「礼はいい。とにかくあの黒いのを片付けるぞ」

エミヤの鋭い視線は黒いISに向ける

「ああ!!」

そして一夏は無限の剣の中から一本の剣を抜き。エミヤは箒に肩を並べるように歩み寄る

「篠ノ之箒、私はこれより織斑一夏と共にあの黒いのを斬りに行く。君にもサポートを手伝ってもらいたいのだが。構わないか？」

「はい。一夏が戦うなら私も!」

箒の言葉にエミヤは覚悟を見た

「そうか。では君はこの刀を預けよう」

するとエミヤは一本の刀を投影する

「妖刀の類のものだが、君なら使いこなせるはずだ」

エミヤはその刀を箒へ渡す。それを受け取ると箒は刀の鞘を抜き刀身を見る。その刀はまがましい刀身とそれに見合う輝きを放つ

「この刀は………！」

箒は口にしなかったが、この刀は村正。江戸当時妖刀として恐れられた一本の刀である

「今の君にはそれで十分だ」

「……………。感謝する」

エミヤは「フッ」と笑いランスロットとシャルルの方に身体ごと首を向ける

「サー・ランスロット、シャルル・デュノア私達はこれよりあの黒いのを斬り捕われたラウラ・ボーデヴィツヒを救い出す。君達には後方射撃からの援護を頼む」

エミヤは二人に援護を頼む

「OK。わかった」

「よかるう。マスターの命貴様に預けるぞ。アーチャー」

シャルル、ランスロットの順で言う

そしてエミヤは双剣、干将・莫耶かんじょう ばくやを投影し、五人は黒いISに向かい合う

「では、行くぞー!!」

エミヤの声と共に一夏、箒、エミヤは飛び出す。黒いISは五人の殺気を感じ取り剣を構える

「させない!!」

そう言い放つとシャルルはライフルとマシンガンを構え黒いISに連射で放つ

ズガガガガ!!と音を響かせ銃口から弾丸が飛び出す

黒いISは防御しシャルルの銃弾から我が身を守ったが

「ランスロットさん!」

シャルルの声と同時にライフルを構えたランスロットは宝具となったライフルの銃弾を黒いISめがけ放つ。銃弾は黒いISに命中すると黒い煙りが纏わり付く
そしてその中煙りを斬り裂き箒が特攻する

「はあああああああ!!」

ISの懐に入り込んだ箒は篠ノ之流剣術でISの左手で斬り飛ばすさらにエミヤは干将・莫耶かんじょう ばくやで右手の剣を弾き剣もろとも腕を斬り捨てる

「行け、織斑一夏!!」

「おう!!」

一夏はエミヤの影から飛び出し切っ先を黒いISに向ける

「うおおおおおおおおお！！！！」

そしてその切っ先は黒いISの頭部を貫く

『ガギ……ガ………』

黒いISは貫かれた頭部からゆっくりと引き裂かれるように割れ、黒いISに捕われたラウラは解放されゆっくりと一夏の胸に倒れ込むその時一夏とラウラの瞳が合う。ラウラの瞳は弱々しくまるで「助けて」と言わんばかりだった一夏が倒れ込むラウラを背負う。それと同時に無限の剣製は役目を終えたかのように世界崩壊し元のアリアナへ戻る

そして一夏は箒の元へ行く

「箒」

「なんだ？」

「ラウラを頼む。俺達はまだやるんだ」

そう言つて一夏は視線を向けるジル・ド・レエが召喚した巨大海魔を

「わかった」

箒はそう返事を返すとラウラを一夏から貰い箒が背負う

「シャルルもここは危険だ。できれば箒と一緒に行ってくれないか？」

「わかった。でもその前に一夏、右手の白式をこっちに向けて」

シャルルはそう言うとリヴァイブからケーブルを抜き出す。一夏は右手の白式をシャルルへ向ける

「リヴァイブのコア・バイパスを開放」

シャルルは白式にケーブルを繋ぎ言う

「エネルギー流出を許可」

すると白式にエネルギーがあふれてくる。シャルルはリヴァイブのエネルギーを白式に分けてくれたのだ。そしてエネルギーが尽きたリヴァイブは粒子化し消滅する

「きっとこれで白式は一定限定で零落白夜の発動が可能だよ」

「そうか。サンキューなシャルル」

「ううん。でも約束して絶対勝ってきてね」

「当たり前だ。負ければ男じゃねえよ」

「じゃ、負けたら明日から女子の制服で登校してね」

クスツと冗談のつもりで言う

「お、おう。いいぜ」

一夏がそう返答すると隣で箒が微妙な顔をしている

「じゃあ僕達は行くから。頑張つてね。一夏」

「絶対勝つのだぞ一夏！」

シャルル、箒の順で言う

一夏は「おう！」とだけ言い戦場に戻った
その後ラウラを背負った箒とシャルルは安全な場所へ避難した

同じ頃、巨大海魔を召喚したサモナーのジル・ド・レエは召喚の際に海魔に取り込まれ海魔の体内から魔力を送り続けている
そしてそれに対峙するサーヴァントとそのマスターは海魔に攻撃を仕掛けていた

「はぁあああああ！！！」

輝く宝剣で海魔を切り裂くアルトリア。だが海魔の傷はすぐに回復してしまう

「くっ、斬っても斬っても再生する……………このままでは……………！！！」

奥歯を噛み締めるアルトリア
すると海魔の触手が無防備なカレンに襲い掛かる

「しまった！」
「チッ！」

舌打ちしカレンの元へ急ぐクー・フリーン。だが間に合わない
カレンは死を覚悟し目を閉じる

「なに勝手に死ぬ用意してんだよ？」

カレンは聞き覚えのあるその声に目を開く

するとそこには体中にさまざまな災厄や罪等を刻みこまれた身体をし頭に赤い布を巻き付けたことなく士郎に似たサーヴァントでは番外クラスにて最弱なアヴェンジャーのアンリマユという名を与えられた少年がいた。アンリマユは最弱ながらも異様な形状の短剣で触手を切り落とす

「アヴェンジャー……………？どうしてあなたがここに？」

「俺だけじゃなえぜ」

カレンの言葉に振り返りながら答える

するとカレンの背後から一人の女性が飛び出す

「はあああああああああ！！！！！！」

飛び出した女性は海魔の額に右ストレートを打ち込む。海魔は強烈な痛みにもがいている

「魔力反応を辿って来てみればやはり貴方方ですか……………」

その女性の耳にはクー・フリーンと同じ銀色のイヤリングを着けた男性用のスーツを着込み肩からは大きな黒い筒を垂れ下げた女性

「魔術協会の人間として見過ごす訳にはいきません……………」

そしてその女性は地面に着地し海魔を睨みつける

「この私、バゼット・フラガ・マクレミッツの鉄拳を叩き込んであげましょう！……！」

彼女はそう宣言し海魔に向かい構える

第19話・斬り決る戦神の剣（前書き）

遅くなりましてごめんなさい！

ギリギリ今週の最後でしたが投稿できました
駄文な気もしますが指摘（お手柔らかに）お願いします
ではどうぞ！

第19話・斬り決る戦神の剣

バゼット・フラガ・マクレミッツ

彼女は魔術協会の人間にしてかつてのランサー、クー・フリーンのマスター

言峰綺礼により宿った令呪を左腕ごと奪われる。そして死の瞬間、現れたアヴェンジャー、アンリマユと契約し息を吹き返す

アヴェンジャー、アンリマユ

本来は英霊ではないただの少年。だが村人達に様々な呪いや罪といった悪を表すものを身体に掘りこまれ、アインツベルンが第三次聖杯戦争で召喚された

だが彼の戦闘能力はかなり低く序盤で脱落し聖杯に返るが数々の呪いのせいで聖杯にこの世全ての悪の願望を叶えてしまう

これより第四次、第五次と共に聖戦争が狂い始める

そして言峰綺礼によって大聖杯を解放されるがそれは士郎達の手で阻止された

現在のアンリマユは繰り返す四日間の最後の一日にて士郎の殻を破り現出したサーヴァント

そして突然現れた二人、得にバゼットは拳を構え海魔を睨みつける海魔を殴り飛ばしたバゼットに驚くセシリアや鈴音、デイルムツド、イスカandal

「ほお、あのデカブツを一発で倒すとはなかなかやるのお。あの女」

髭を触りながら言うイスカandal

「まったくだ……。彼女は一体何者だ……？」

デイルムツドも冷や汗をかく

「魔術協会属する魔術師にて、現存する数少ない宝具を受け継ぐ家系で伝承保菌者の名を持つアヴェンジャーのマスター。バゼット・フラガ・マクレミッツ……………！！」

凜は知っているバゼットの情報を言う

バゼットは鋭い視線を海魔に送り続けるが海魔は起き上がらない。気絶しているようだ。その隙に士郎と凜がバゼットの元へ向かう

「バゼット！」

士郎の声に振り返るバゼット

「久しぶりだな」

「そうですね」

「バゼットはどうしてこっちに？」

「実は数日前。謎のサーヴァントと交戦の際に宝具かなんらかの影響で見知らぬ土地にたどり着き、大きな魔力を辿っている内にここについたんです」

バゼットは自分がここまで来るまでの事を大まかに説明する

「それよりも、なんです？あの化け物は？」

バゼットは気絶しているジルの海魔の事を凜に尋ねる

「あれはサモナーのサーヴァントが召喚した海魔の一体よ」

「サモナー？たしか、聖杯戦争の参加サーヴァントにそんなクラスは……………」

バゼットは己の知らないサーヴァントのクラスを聞いて困惑する

「それは後で説明するわ。それよりも今はあの海魔をなんとかしないね」

「はい。アレをなんとかしない事には始まりません」

バゼットは海魔を睨みつける

すると一夏、エミヤ、ランスロットの三人が駆け付ける

「すまない士郎」

「ああ、ラウラとの決着は着いたのか？」

「なんとか。それより……」

一夏は巨大海魔に視線を向ける

すると凜は思い付いたかのように口を開く

「ねえ、一夏くん」

「ん？どうした凜？」

「白式のエネルギー残量はどれだけ残ってる？」

「だいたい、零落白夜一回分だな。それがどうした？」

「ちよつと作戦を思い付いてね。みんなちよつと集まって。あの化け物が起きる前に作戦を説明するわ！」

凜の言葉にその場の全員が集まり、凜の言葉に耳を貸す

凜は作戦伝達を終えると同時にバゼットに殴られ気絶していた海魔は目を覚まし雄叫びを上げる

「ギアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

怒りの雄叫びを上げた海魔は己を傷付けた相手を血眼で探そうとする

こうとしたその瞬間黒い影がその攻撃を受ける。それはアンリマユの右腕だった。一夏は動きを止める

「お前！」

「へへへ、心配すんなって。大丈夫だよ」

アンリマユは右腕に刺さった海魔を抜き踏み付け殺す

「貴様あああああああ！！！」

ジルは叫ぶ。すると腕に痛みを感じた。しかもアンリマユと同じ右腕に

（なんだ！？いきなり腕に痛みが！？）

ジルは右腕を見るがそこから血のどころか傷さえない。するとアンリマユが口を開く

「言^{アウエ}つてなかつたな。さつき貴様に俺の宝具を発動した。偽^{ヴェ}り写^{ルゲ}し記す万障。俺が指定した奴は俺や俺の仲間に傷をつければその傷がそのまま指定した奴にそのまま返すってしろもんだ」

そう言つと舌を出すアンリマユ

（本当は俺が傷を与えた奴に俺の魂を与えて俺のダメージは相手に与えるって宝具なんだがな。それはさつき貴様が落下の際にちよつと傷を付けさせてもらったぜ）

とアンリマユは心で言う

再び一夏は飛び出す。ジルはアンリマユの策にかかり小型海魔でダ

メージを与える事が出来ない
そして一夏の刃は固有空間を破壊する

「なあにいい……………！？」

ジルはそれをピンチと悟り後ろに飛ぶ

「おのれえ我が固有空間を！！もう一度巨大海魔を……………」

ジルは今度は自分はどうでもいい。とにかくこの連中を皆殺しに
することだけだった

ジルは魔導書を開き呪文を唱え、それが終わると巨大海魔が再び召
喚されそうになる
すると

「唱えたな。呪文を……………」

ジルは背後からの声に振り返る。電磁波のような物を放つ、鉄の玉
が浮いておりそれを構えたバゼットがいた
その鉄の玉の名は後より出て先に断つ者

それはバゼットが持つ現存する宝具の一つ。発動条件は相手が切り
札を発動しそれにカウンターをするように放つ、斬り決る戦神の剣
という魔剣だ

そしてジルが魔導書を唱え海魔を召喚した。これがトリガーとなり
斬り決る戦神の剣は発動された

ジルはその光景に恐怖し始めていた

「おお！神よ！！私を私をお救いください！！！」

ジルは腕を天に掲げる

第20話・自分（前書き）

皆さんお久しぶりです!!

今回はグダグダ感がありますがそこは大目に見てください
ではどうぞ

第20話・自分

黒いESとサモナー・ジル・ド・レエの事件から数時間後
保健室で眠っているラウラは夢をみていた

真っ白の空間の中ラウラは男に問う。お前はなぜ強くあろうとする
？どうして強い？

（強くねえよ。俺は、まったく強くない）

あれほどの力を持つてなお、強くないと言っ？

（それは、強くありたいから強いのだ。それに強くなったらやりた
いことがあるんだよ）

やりたいこと？

（誰かを守ってみたい。自分のすべてを使って、ただ誰かのために
戦ってみたい。そうだな。だから、お前も守ってるよ。ラウラ・ボ
ーデヴィツヒ）

ああ、確かにこれは……。惚れてしまいそうだな
と呟いてしまう

すると、景色が一変する。青い空、生い茂る草原にラウラは立つ
さらにその空間には一人の甲冑姿の女性が長い金髪を靡かせている
女性は振り返りラウラに手を差し延べる。ラウラはその手をとると
彼女はこう言った

「ごめんなさい」

ラウラにはその言葉の意味がわからなかった。そしてラウラは目を覚ます

ラウラはゆっくりとまぶたを開き上半身を起こす。保健室のベッドの上で。隣では千冬が椅子に腰掛けていた

「私は……。何が起きたのですか？」

「重要案件のために機密事項なのだがな。VTシステムを知っているな？」

「ヴァルキリー・トレース・システム？」

「そう、IS条約でその研究おろか開発、使用すべてが禁止されている。それがお前のISに詰まっていた。精神状態、ダメージ、そして何より所有者の意思、いや願望か……。それらが揃うと発動する仕組みになっていたらしい」

「私が……。望んだからですね……」

ラウラは唇を噛み締め自分を悔やむ

「それに」

千冬はラウラの右手を掴み、その手の赤い令呪を見る

「貴様がマスターになっているとはな。サーヴァントはいつ召喚した？」

「先日です。私がアーリーナの発射台にいと、令呪が刻まれ奴が召

喚されたのです」

「では、奴は偶然召喚したんだな？」

「はい」

「奴をあの場合に呼び出したのはお前だな？」

「はい」

「あの化け物を召喚するように命じたのもお前だな？」

「はい……」

ラウラは千冬の質問にゆっくり目を閉じ返答する。己の罪を認めた時の人間の表情にラウラはなっている

「そうか。一応お前のサーヴァントの損害や騒ぎは偽装出来た。でもお前には厳罰が必要だな」

千冬の言葉を聞き思った。あれだけの事をしておいてはこの国、このIS学園にはいられない。良くて国への送還。悪ければ牢行きか死罪になる

ラウラは悪るい方が下ると思い恐怖の感覚が蘇る。デイルムツドとイスカンドルと戦った時に味わった感覚が
そして千冬の厳罰の内容が下された

「とりあえず、お前には反省文30枚とアリーナの修理と整備。そしてここからが重要だ。よく聞け」

ラウラは口に溜まった唾液を飲み千冬の最後の厳罰内容を聞いた

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。これからお前という人間を作り出せ」

「え？」

千冬の言葉に啞然となるラウラ

「お前はこれまで自分がしたい事を考え実行した事はあるか？」

「い、いえ……」

「ならちようどいい。お前はラウラ・ボーデヴィツヒだ。これからゆつくりお前という人間を作り出せ、ここにいれば最低でも三年は自分を作りあげれるだろう。学校とはそういう場所でもある」

千冬は立ち上がり、ドアの前まで歩く。ドアが開くと千冬は立ち止まりこう言った

「それから、お前は私にはなれないぞ」

そして千冬は退席する。残されたラウラは何があつたか嬉しそうな笑い声を出す。本当に優しそうな

その頃、一夏とシャルルは自室にいた。一夏は三人分の緑茶を湯飲みに注いでおり、シャルルはベットの上で雑誌を読んでいる。一夏のサーヴァントであるランスロットも実体化し椅子に腰掛けている

「お待たせー」

一夏はお盆に三人分の湯飲みを乗せやって来る

「これはランスロットの分」

一夏はランスロットに「湖」と書かれた湯飲みを渡す

「ありがとうございます。マスター」

ランスロットは一夏から湯飲みを受け取ると次にシャルルに湯飲みを渡す

「ありがと、一夏」

シャルルは起き上がりシャルルは湯飲みを受け取る。一夏はベッドに腰掛ける

そして三人は同時に茶を啜り、ランスロットが呟く

「やはりマスターが注ぐお茶は美味しいですね」

「そうか？なら良かった」

そう言い一夏は湯飲みにも口を付ける

「それにしても、伝説の英雄の皆さんとこうして会えるなんて驚いたよ。サインまで貰っちゃった。見る？」

シャルルはサーヴァント達のサインが書かれたノートを一夏に渡すページを開くとアルトリアという名の隣に箸とご飯茶碗が描かれているサインや、モクー・フリーンの名の横にホットドックが書かれたサイン。イスカンドルの名の横に「征服！」と大きく書かれ、ディルムッドの名には彼の宝具を象ったように赤い槍と黄色い槍が交際して刺さっている絵などの個性的な四人のサインが書かれていた。エミヤとギルガメッシュのサインが無い理由は、エミヤの場合「私は君達に名乗るほどの英雄ではない」と断られ、ギルガメッシュはなかなか捕まえられずサインは貰っていない。それを見た一夏は

「ランス、お前も書いたのか？」

「はい。アーサー様の次のページに書かせていただきました」

一夏はペラツと次のページを開くと、そこにはサー・ランスロットとブリテン語の後に「湖」と小さく書かれている

すると一夏はちよつとした疑問を抱きはシャルルにある問いをする

「そういえばシャルルはどんな英雄が好きなんだ？」

「へ？どうしたの急に？」

「いや。こんなに英雄達のサインがあるんだから好きな英雄がいるのかなーって思ったただだよ」

一夏がそう言うときシャルルは「あれでもない。これでもない」と呟きながら考える。そして自分が一番好きな英雄の名前が頭に浮かぶ

「ジャンヌ・ダルクさんかな？」

シャルルはニコツとした表情で言うが、一夏とランスロットはつい「え？」と声を漏らす

「ジャンヌ・ダルクってあのジャンヌ・ダルク？」

「うん」

「あの紅蓮ラ・ビュセルの聖女のジャンヌ・ダルク？」

「うん」

「あのジル・ド・レエと一緒に戦場を巡ったジャンヌ・ダルク？」

「そうだよ！どうしたのさっきから同じような質問ばかりして？」

「いや……別に……」

一夏とランスロットはシャルルからつい目をそらしてしまう

それはそうだ。なんせさつき一夏達と戦ったサーヴァントがフランスの大量殺戮を犯した英霊ジル・ド・レエだ。奴の聖杯に托す願いはジャンヌ・ダルクの復活。それを凜から聞いた一夏と第四次聖杯

戦争で奴の目的を知っているランスロットは徐々に血の気が引いていった。ある意味マスターやサーヴァントに言わせればトラウマになりそうな名である。実際奴のせいでアルトリアはタコが苦手になったのは言うまでもない
するとコンコンとドアがノックされる

「お客さんだ。ちょっと出てくる」

一夏は霊体化するように指示するとランスロットは姿を消し霊体化する

ランスロットが完全に霊体化すると部屋のドアを開ける。ドアを開けるとラウラがいた。二人は数秒間黙り込む

「よう。なんか用か？」

まず一夏がそう言う。するとラウラは

「すまなかった……」

「え？」

一夏は己の耳を疑った。いままで自分を蔑みゴミ同然と見てきた一夏にそのような言葉を言うとは思わなかった

「先日からの数々の非礼、本当にすまない」

と頭を下げる。一夏はクスツと笑うとラウラの頭を撫でる

「気にすんなって。まあ、確かにやり過ぎだったかもしれないけどな」

一夏が手を退けるとラウラは頭を上げる

「ありがとう一夏」

ラウラはニコツと一夏に微笑む

「おう。それより俺のどこよりセシリアや鈴に謝ってこいよ」

「ああ、そうするよ。じゃあな一夏」

「じゃあなラウラ」

お互いは手を振り合いラウラはセシリアと鈴音の所へ向かう
そしてラウラがその場を立ち去ると一夏は部屋に戻ったのだった

第21話・口は災いの元

ラウラが一夏の部屋にやって来てから数時間後の食堂

「結局、トーナメントは中止だつて。ただデータがとりたいたから一回戦は全部やるそうだよ」

「ふうん」

一夏は焼きソバをすする一夏とシャルルの食事をとりながらの会話だ

「ん？」

一夏は何やら自分を見ている女生徒がいるので軽めに覗いてみる

「優勝、チャンス消えた……………」

「交際無効……………」

「うあああああああん」

その生徒達は泣きながら去っていく。一夏は少し視点をずらすとそこには筭が立っていた。一夏は思いだしたかのように立ち上がり筭に歩み寄る

「そつえば筭、先月の約束な」

「えっ？」

「付きやってもいいぞ」

「なに？」

少しテンションが上がった筭は一夏の衿を掴んで引っ張りしばらくすると離し、咳ばらいする

「なぜだ。理由を聞こうか？」

「そりゃ幼なじみの頼みだからな。付き合っさ」

「そうか」

「買い物くらい。げふっ!？」

箒のストレートが一夏の顔面にヒットする。一夏は頬を抑え倒れ込む

「そんなことだろうと思ったわ!!」

そして箒は一夏の腹を蹴り上げる

「ふん!」

箒はそっぽを向き去っていくと、一夏の隣にシャルルがやって来る

「一夏って、わざとやってるじゃないかって思う時があるよね」

と苦痛にもがく一夏にしゃがんで言う

すると真耶が二人の前に姿を現す

「ど、どうしたんですか？ 織斑くん……」

「な、なんでもありません……」

一夏は腹を押さえながら答える

「そ、そうですか……?」

真耶は一夏を痛い子を見るような目で見ると彼女は思い出したかの
ように話だす

「それはそうと。今日から織斑くん、衛宮くん、デュノアくんのこれまでの労をねぎらう場所が今日から解禁になりました」

真耶は笑顔でそう言う。そしてウィンクしその場所の名前を言う

「男子の大浴場です！」

「ふゝ、生き返るゝ」

一夏は風呂に浸かりながら頭にタオルを乗せ言う。ガラガラと音がしたため、そちらを振り向くとそこには体にタオルを巻いたシャルルがいた

「おっ、お邪魔します……………」
「なっ！？」

一夏はつい見とれてしまう

「あまり見ないで……………。一夏のエッチ……………」
「すっ、すまん！」

一夏はシャルルのその言葉で我に帰りシャルルから体ごと目を逸らす

「なっ、なんでだ！」

「僕が一緒だとイヤ？」

「けしてそういうわけではないが！」

「やっぱり、そのお風呂に入ってみようかなって……。迷惑なら上がるよ?」

「いやいや、上がるなら俺が!もう堪能したし……………」

一夏が湯舟から上がろうとするとシャルルがそれを止める

「待って!話があるんだ。大事なことから一夏にも聞いてほしい……………」

「わかった……………」

シャルルは一通り体を洗い終わると一夏と背中合わせの状態で入浴する

「その前に言ってたことなんだけど」

「学園に残るって話か?」

「そうそれ、僕ねここにいようと思う。一夏がいるからここにいようと思えるんだよ」

「そっそうか……………」

「それとねもうひとつ決めたんだ。僕の在り方を」

シャルルは静かに一夏に抱き着く。一夏は頬を赤くする

「あつ、ありがたつて……………」

「僕のことはこれからシャルロットて呼んでくれる?二人きりの時だけでいいから」

「それが本当の……………」

「それが本当の、お母さんが僕にくれた本当の名前……………」

「わかった、シャルロットこれからもよろしくな」

「うん、よろしくね一夏」

真耶はオドオドしながら教卓で話だす

「えーと……………、今日は皆さんに転校生を紹介します……………」

廊下からざわつき始めた教室に一人の女生徒が入ってくる。それは金髪の美少女だった

そして自己紹介を彼女は自己紹介を始める

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてよろしくお願ひします」

「えーと、デュノアくんは、デュノアさんという事でした……………」

一気に教室がやかましくなる

「デュノアくんって女？」

「おかしいと思った。美少年じゃなくて美少女だったのね」

と好き勝手にいってる

「てっ、織斑くん同室だから知らないってことは……………」

いたいところをついて来る

「ちょっと待って昨日って確か男子が大浴場使ったわよね！」

すると教室の壁が破壊され甲龍を纏った鈴進軍してくる。どこからこのじょう方を入手したかは定かではない

「一夏あああー!!」

「あはは、士郎の唇とったりー」

と胸を張って言う

だが、巨大な魔力が凜に牙を向いた

「リイイイイイイイン！！！！」

アルトリアは立ち上がり百獣の王の眼力で凜を睨みつける

「おほほほ、セイバーこれで士郎は私のよモノ」

「ふざけないでください！！強引にキスをしてなにが私のモノですか！？」

アルトリアは齒を軋ませて言う。しかもアルトリアの背後には獅子が凜の背後には龍のエフェクトが見える
その言葉を聞いた生徒達は

「えー！なににアルトリアさんって衛宮の事！」

「しかももしかも！遠坂さんも衛宮を！？」

「これはなんとという三角関係！！」

とキヤーキヤーはしゃいでいるが鬼神の堪忍袋がブチ切れた

「うるさい！！！！静かにしろおおおおおおおお！！！！」

千冬の怒りの声が教室に響き平和な平和な一日が始まったのだった

第22話・再度召喚

ラウラと凜のキス騒動から数時間後

一年寮のとある一室のシャワールーム。そこでは長い銀髪、左右の瞳の色の違う一人の少女がシャワーから流れ出る湯を被っているラウラだ。ラウラは壁に額を付き

「はぁ……」

とため息を漏らし

「私のしたいことが……」

と呟く。ラウラがいま口にした言葉は千冬がラウラに与えた厳罰のひとつ。ラウラ・ボーデヴィツヒという人間をIS学園の生徒の間に作り上げる。というものだ

（私のせいでアリーナはほぼ崩壊寸前。私の犯した罪は重い）

付いた額を壁から離し壁を殴る

（クソッ。私が愚かであり未熟だったせいだ。これでは一夏と肩を並べ戦う事なんてできない。せめて一夏と同じように肩を並べるに相応しい人間へならなければ。それにはまず……）

ラウラは蛇口を捻り湯を止め、シャワールームから出て着替えを終えると自室のドアを開け、とある場所へ向かった

「凜、君は今朝のような軽率な行動は控えるべきだ！」

と赤と黒の服が印象的な銀髪オールバックの英霊、アーチャーのエミヤが椅子に偉そうに腰掛けいつもの赤い服に身を包んだ凜に怒り口調で言う

「うっさいわね。いいじゃないだつて私本気で士郎の事好きなんだもん」

凜はケロツとした表情でエミヤに言う

「だが、それでは遠坂家の家訓、常に優雅たれ。というのはどうなつてしまうのだ？」

「うっ……………」

エミヤの発言に答える事ができない

「私だつてたまには家訓の一つや二つ忘れる時だつてあるわよ!!」

と逆ギレする凜にエミヤはため息をつくしかない
するとピンポンと呼び鈴が鳴る

「ん？お客さんかしら？」

凜は椅子から立ち上がりドアを開けるとそこにいたのはラウラだった

「ボーデヴィツヒさん？どうしたの？」

「遠坂。今日は相談があつて来た」

「相談？」

「そうだ」

頷くラウラ

「そうなの？じゃ上がっていってお茶ですから」

「ありがとう。では、いただきます」

凜はラウラを部屋に招き入れ茶の仕度を始めラウラは部屋の奥に行くと、そこにはエミヤが壁にもたれ掛けていた。彼女はエミヤを見てつい声を漏らす

「お前は、あの時の……………」

「ほお。客人は君だったのか、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「ああ、お前が遠坂のサーヴァントだったとはな。驚いた」

「それはこちらもだ。まさかサーヴァントを召喚し織斑一夏を狙うとは肝が据っていて大胆な女だな」

エミヤは鼻で笑い言う

「それは過去の私だ。今の私は一夏に恋し、奴は私の嫁だ」

と胸を張るラウラ

「嫁…………とはどういう意味かはわからないが、とにかく丸くなつことは褒めておく」

「貴様に褒められるほど私は墮落してないぞ。アーチャー」

ラウラは「フッ」と笑う

二人の会話の終了と同時に凜が紅茶を持って来ると椅子に腰掛け脚を組みラウラはベッドに腰掛け

「それで、なに？私に相談って？」

紅茶を啜りながら凜が問う

「それはな……………」

それだけ言うと沈黙が続く。そしてラウラは声を出す

「私にサーヴァントの召喚方法を教えてくれないか？」

「え……………」

凜は啞然としてしまう

「あの…。ボーデヴィッヒさん？」

「なんだ？」

「あなた令呪はあっても、別にもう聖杯戦争に参加する必要はないのよ？それに……………」

凜が続きを話そうとするが

「私が聞いているのは、召喚する事が出来るのか出来ないのかと聞いているのだ」

「それは……………」

「出来るのだな？」

凜を睨むラウラ。凜は眼力に負けてしまう

「はぁ……………」

凜はラウラに飽きたため息を着く

「あのねボーデヴィツヒさん。たしにこっちの聖杯戦争では同じ人物は聖遺物と三つの令呪があれば再びサーヴァントは召喚できるし、サーヴァントを召喚するのは簡単だけどあなた一回体験しなかった？サーヴァントを召喚した時の負担とか？」

「ああ、感じた」

「それにあなたは魔術師じゃないのだから魔力供給できるけど自ら召喚する、しかもあなたの場合は再度召喚かなり無理があるわ。さらに言つと令呪はあるけど、聖遺物はどうするの？そう簡単に見つけ出せる代物じゃ……………」

凜がサーヴァントの再度召喚は諦めると遠回しに言うがラウラを割り込み「ある」と言葉を放ち凜は「え」と言葉を漏らす

「聖遺物ならここにある」

ラウラは首からかけてあるペンダントを取り出し、凜に見せる

「そのペンダントは？」

「このペンダントは奴が私にくれた物だ」

「奴って、サモナーの事？」

「そうだ。私が次の日に学年別トーナメントで戦つたからお守りとしてこれをくれた」

ラウラはペンダントを凜へ渡す

「これを使ってサーヴァントは召喚できないか？」

ペンダントを受けとった凜にラウラは問う

「そうね……。確かに魔力は十分あるし聖遺物としての機能もちやんとしている。これならサーヴァントは召喚できるわね。しかもとびっきなのが」

「そうか」

ラウラは安心してホッする

「だけど、なんでそんなにサーヴァントを召喚したいの？」

凜がラウラに問う

「私はいままでこんな感情を抱いたことがなくてな。あいつを見ていると胸が苦しくなり心地好くもあり、あいつと一緒にいてくれると穏やかにもなる……………」

ラウラは微笑み胸にそつと手を当てる

「それって一夏くんの事？」

凜がそう問うとラウラはコクンと頷く

「だから私は一夏のとなりで一緒に戦いたい。肩を並べたい。嫁を守るのは亭主の勤めだからな。だから私は再び聖杯戦争に参加する。一夏を守る為に……………!!」

凜はラウラのその言葉に覚悟を悟った。自分とどこことなく似ているとも凜は感じていた

「そう。わかったわ。なら行きましょ」

「行くとはどこへ………?」

「決まってるじゃない。あなたがサーヴァントを召喚した場所へよ」

22時頃、IS学園アリーナのIS発射台

そこでは凜が赤い液体で巨大な魔法陣を描いていた。この場所はラウラがサモナーのジル・ド・レエを召喚した場所。つまりこの土地はラウラにとっては一番都合のいい場所なのだ
そう、それはサーヴァントを召喚の際に必要なとする魔法陣を描いていたのだ

「これでよし。ボーデヴィツヒさん、呪文は覚えた?」

「ああ、大丈夫。覚えた」

ラウラは魔導書を持ちついさっきまでその本に記されているサーヴァントを召喚する為の呪文を読んでいたのだ

「よし、ならペンダントを魔法陣の中央に置いて」

「わかった」

ラウラは歩きだし、魔法陣の中央へ行くと聖遺物であるペンダントを置き魔法陣の外へ出る

「では詠唱を………」

凜がそう言つとラウラは頷き右手の平を魔法陣に向け深呼吸し呪文の詠唱を始める

「告げる――。汝の身は我が下に――。我が命運は汝の剣に――。聖杯の寄るべに従い――。この意、この理に従うなら応えよ――。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　――！！」

全ての詠唱が完了する

すると星空だけの暗闇のなか魔法陣が輝きを放ち魔法陣を覆うように灰色の煙りが舞う

そしてカシャンカシャンと魔法陣の中から鎧の音を響かせ旗を携えたサーヴァントが姿を現す

「問おう。私を呼び。ルーラーのクラスに限界せしめたマスター。貴女様の名をここに問わせていただきます。貴女様は何者ですか？」

ここにルーラーとして新たなサーヴァントが召喚された。紅蓮の聖ラ・ジュンセル女のジャンヌ・ダルクが……………！！

第23話・紅蓮の聖女

「問おう。私を呼び。ルーラーのクラスに限界せしめたマスター。貴女様の名をここに問わせていただきます。貴女様は何者ですか？」

魔法陣の中央でそう言う少女。キリツとした紫の眼球、羽織っているマントにはロザリオを思わせる白い十字架、そして綺麗な金髪を三つ編みをなびかせる紅蓮の聖女。彼女こそ、ジル・ド・レエが死に物狂いで復活を望んだフランスの大英雄、ジャンヌ・ダルクなのだ。ジャンヌは己を召喚したマスターであるラウラに問う

「そうだ。我が名はラウラ・ボーデヴィツヒ。これかより私と戦い聖杯を勝ち取るために協力してもらおうぞ」

ラウラはジャンヌの問いに答える

「はい。ここに契約は成立しました。これより貴女を我がマスターとし、聖杯戦争を正しく導くと同時に我々は聖杯を手にししよう」

とジャンヌはラウラに言う

「そうか。ではこのような場所では話はできん。私の部屋でじっくりと話をしよう」

「イエス・マイ・マスター」

凜とラウラはジャンヌを連れ部屋に戻った

「それにしても似てるわね」

ラウラの部屋ではジャンヌを椅子に座らせ、凜はなめ回すようにジャンヌを見る

誰に似ているのかというとそれはもちろんアルトリアにである

「は、はあ……………」

そんな凜にキョトンとなるジャンヌ

「凜そんなになめ回すように見るなルーラーも驚いているぞ？」

「そうね。ごめんなさい」

凜はジャンヌに謝るがジャンヌは「はあ……………」としか言えない。するとラウラはジャンヌを見て言う

「それはそうと、お前の真名はジャンヌ・ダルクでそういないな？」

「はい。我が名はジャンヌ・ダルク。フランスの英雄として名を統べた英霊です」

問いに答えるジャンヌ

「では、私からも問わせていただきますが。そこにいるアーチャーのサーヴァントは何者ですか？」

ジャンヌは壁にもたれているエミヤを睨みつける

「私か？安心したまえ、私は君達に手を出すきは毛頭ない」

「そうですか。なら安心です。そうなら私も本性をあかせます」

そう言うと彼女は口元を歪める

「本性？」

凜はジャンヌが言った本性という言葉が引つ掛かり警戒するがそれは取り越し苦労だった

「はい。こうして笑顔をさらけ出せますから」

ジャンヌはそう言うと満面の笑みを凜やラウラに向ける。まるで天使のような

「私、ほとんどこうして笑う事ができなかったんです」

「どうして？」

ジャンヌの言葉に凜が問う

「私がものごころついた時には戦ばかりの世の中で、そう笑ってられる時代ではなく。そのまま私は処刑されました。唯一笑い会えたのは彼、ジルの前だけだった。私を一番愛してくれたあの人……」

……

ジャンヌはそつと胸に手を沿える

「だから私は決めたんです。次のチャンスがあるのであれば、その時は笑顔でい続けよう」と

彼女は顔を上げ、笑顔を崩す事なくラウラの顔を見ながら

「ですからマスター。私は皆さんの太陽のような存在でいたいので

す」

と言う

「そうか。わかった。ではお前は私達の太陽でいてくれ、私はその太陽を隠す月、黒い日食になってやる。これからよろしくなジャンヌ」

ラウラは立ち上がり、ジャンヌに右手を差し出す

「はい。よろしくお願いします。マスター」

ジャンヌはラウラの右手をそつと右手で握る

「じゃ、私達は帰るわね。明日また早いし。ふあゝ」

凜は立ち上がりあくびをしつつ言う

「ああ、今日はすまないな凜」

「いいわよ気にしないでボーデヴィツヒさん」

凜は手を振り言うが

「ラウラでいい」

「へ？」

「私の事はラウラでいい」

「そう？じゃ、ラウラまた明日教室でね」

「うむ。では明日」

そして凜とアーチャーは退室し今日という日が終了した

翌日、IS学園1ー1教室では毎朝のようにHRが行われていた

「以上が今日の予定だ。次の時間はISの授業だ。各自、アリーナへ移動。そしていつものメンバーとデュノア、ボーデヴィツヒは残れ、以上解散！」

千冬がクラス全員にそう指示すると士郎達は外へ出、他の生徒達は着替える。着替えを終えると士郎達は教室に戻り席に付く。しばらくすると二組の鈴音がやって来て適当な席に座る。さらに数分後カレンの代わりにクー・フリーンが現れ皆と合流する

今日もいつもと同じようにISの時間を使った聖杯戦争の今後を考える会議が始まる。今回の講師は千冬だ

「これより、聖杯戦争の今後を考える会議を始める……、といったところだが、少し予定を変更する。まずは全員サーヴァントをここに呼んでくれ。いますぐにだ」

「……は、はい！」「……」

一夏、凜、セシリア、鈴音は同時に返事をし

（ランス時間だ。来てくれ）

（来なさい。アーチャー）

（デイル様お時間ですわ）

（ライダー時間よ早く来なさい）

とそれぞれのサーヴァントを呼び出す

「サー・ランスロットここに!!」

「私は既にここにいる」

「主の命によりディルムッド、馳せ参じました」

「なんだ、仕事の最中だというのにの」

マスターの命により、四人のサーヴァントが姿を現す

ランスロットとディルムッドはひざまずき、エミヤは壁にもたれ、
イスカンドルは何故か作業服で現れた

それを見た千冬は

「鳳。ちよつとこい？」

「はい」

鈴音は千冬に呼ばれ、微妙な顔をしながらトボトボと歩く

「アレはなんだ？」

「はあ、実は部屋でゴロゴロせんべいかじって寝てるの見てました
ら……『あんた!ゴロゴロしてせんべいかじってDVD観てるなら
そのせんべい代とレンタル代自分で稼いできなさい!!』って言
いましたら、次の日バイトみつけてきたみたいで……」

「それがあれか？」

「はい。すみません」

鈴音は鬼のような千冬の目を合わせることができない

「まあいい、座れ」

千冬はイスカンドルに呆れたため息を付き鈴音を席に付かせる

「では、気をとりなおして、今回はここにいる全員に紹介したい奴

がいる。ボーデヴィツヒ」

「はい。教官」

ラウラは立ち上がり、教卓に向かう

「織斑先生だ。馬鹿者」

そう言うのと千冬はそこを退きラウラに譲る。そのままパイプ椅子に腰掛け足を組む

「今日は皆に合わせたい者がいる。来いルーラー」

『はい。マスター』

教室に女性の声が響くのと同時にラウラの横に金髪の三つ編み、甲冑、紫のマントを羽織ったルーラーの女性サーヴァントが現れる
彼女は士郎等の方を向き

「今度の聖杯戦争にてルーラーのサーヴァントとして召喚されました。ジャンヌ・ダルクです。皆さんよろしくお願いします」

彼女は自己紹介を終えると頭を下げ、ニコニコと笑顔を見せる

ジャンヌの登場にざわめき始める教室のマスターとそのサーヴァント達

そんな中、一夏が口を開く

「あー、ラウラさん？」

「ん？どうした、我嫁よ？」

首をかしげるラウラ

「いや嫁じゃないし。それより、あの方はなに者？」

「私が召喚した私のサーヴァントだ」

「えーと。じゃ、クラスは？」

「ルーラーのクラスだ。一応剣も使える」

「じゃ、これが最後。真名は………？」

一夏、ラウラの順で繰り返す言う

そして最後に恐る恐る真名をラウラに聞くとラウラの変わりに本人が答えた

「あれ？ちゃんと聞こえませんでしたか？ジャンヌ・ダルクですよ。ジャン・ヌ・ダ・ル・ク」

ジャンヌは最後の一文で頬に指を当て笑顔を絶やさない
すると

「「「「ぎゃあああああああああああああ！！！！！！」
「「「「「」

と士郎、アルトリア、セシリア、鈴音、クー・フーロンの悲鳴が響き、五人は教室の後ろまで逃げるように飛び出す
ランスロットとデイルムッドは驚きを隠せない表情をし、イスカンダルは顎に手を当て「ほおほ」と珍しい物を見ている目をする
状況を知っている凜とエミヤは悲鳴がうるさいせいで耳を塞いでいる
そしてシャルロットは……

「本当にジャンヌ・ダルクさんですか！？」

とジャンヌに飛びつくように目を輝かせている。よく見ると犬の耳と尻尾のような物がパタパタさせているように見える

「はい。そうですよ。どうかしましたか？」

とジャンヌが訪ねるとシャルロットはノートとペンを取り出しジャンヌに突きつける

「サインください！ここにジャンヌ・ダルクってシャルロットへって！ー！お願いします！ー！」

「はい」

ジャンヌはページをめくり、空白のページを見つけるとペンを握りサインを書き出す

「ジャンヌ・ダルクつと。はいシャルロットちゃん」

「ありがとうございます！ー！」

ジャンヌからノートを受け取るとそこにはピンクの文字で「ジャンヌ・ダルク」と書かれ、さらにフランスの国旗も描かれていたシャルロットの目がいつもよりも生き生きしている
しの光景を見た悲鳴を上げた五人は我に帰り席に付くと

「皆さん、申し訳ありませんでした」

ジャンヌは申し訳なさそうな表情で謝る

「ジルが私のせいで皆さんにご迷惑をおかけしました。たくさんの子供たちの命をもてあそび、特にセイバーさんにはご迷惑をかけました。これは許されることはありません。私は私は……………」

ジャンヌは奥歯を噛み締め涙を流す。その涙は愛した者が犯した罪

を嘆く涙だった

するとジャンヌの頬を伝う涙が拭われる。ジャンヌが顔を上げるとそこにいたのはアルトリアだった

「セイバーさん……？」

アルトリアは頷きたた微笑みながら涙を拭う

「あなたは悪くありません。あなたは全く悪くない。たしかにあなたが愛した人物は無駄な血を流し命を奪ったかもしれない。ですがあなたがしたことではない、ですから泣かないでください」

「セイバーさん。ありがとうございます」

ジャンヌは泣いたせいで赤くなった顔で微笑む
するとイスカンダルが

「よし、ならばカラオケとやらへ行かぬか？」

と言い出し空気をぶち壊す。アルトリアは眉間を寄せ呆れ口調で言う

「ライダー、貴様という奴は………」

「まあ、よいではないか。こういう時のための優遇施設であろうお？」

とイスカンダルは親指を立て言う

アルトリアは「まったく」と呟きジャンヌの方を向くとそこには微笑むジャンヌ・ダルクという女性がいた。アルトリアもそれに微笑み返す

「では行くとするか！ほれ、準備をせんかセイバー」

イスカンドルは巨大な腕でアルトリアの腕を掴む

「私には授業が……！！」

と慌てながら言い千冬の方を向く

「行つてこい。出席にしておいてやる」

と教師らしからぬセリフを言う

それにアルトリアは「ありがとうございます」と言うとアルトリアやイスカンドル達サーヴァントは街のカラオケボックスへジャンヌの歓迎会をしに行ったのだった
そして

「後はあいつだけか………」

と千冬は呟く

でそのあいつとは……

「ハックションー！！」

と街の公園で野宿していたバゼットのくしゃみが響く
隣に座っていたアンリマユが訪ねる

「風邪か？マスター」

「いえ、なんだか噂をされたような気がして……」

バゼットは鼻の下をこすり言う

「ハッハッハ、そりやそうか。バカが風邪ひくわけないか」
「どういう意味ですかそれ？」

バゼットはアンリマユを睨みつけた
そう千冬が言っている「あいつ」とは彼女のことであった

第23話・紅蓮の聖女（後書き）

突然ですがアンケートです

1つ

かーにはるシリーズをやりたいんですが希望がある方がいましたら感想に記入ください

今のところマスター達がサーヴァント達に料理を振る舞うという小ネタしか思い付きませんですからご協力お願いします

2つ

サーヴァント達のステータスってありますか？

ゲームでもサーヴァント達のステータスはありますし、宝具の情報等もありますので気になる方がいらしたらぜひ感想やメッセージでもいいのでご連絡ください

強制ではないので待ってます。期限は今年中ですので気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9276x/>

F a t e / S t r a t o s

2011年12月16日22時43分発行